
貴族生活、ゲルマニアにて

ライサンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴族生活、ゲルマニアにて

【Nコード】

N6495J

【作者名】

ライサンダー

【あらすじ】

テンプレ憑依主人公によるテンプレでない貴族生活・・・
果たして彼は心穏やかな生活を満喫できるのか・・・？
徐々に強化されてゆくゲルマニア貴族の成長録？

第一話 貴族屋敷にて（前書き）

初めましてライサンダーです

初執筆初投稿なので、至らぬでしょうが

またゼロの使い魔は主に二次創作からの知識なので、設定矛盾などもあると思いますが

おおらかな気持ちでお目通し頂ければ、幸いです

第一話 貴族屋敷にて

あー………何が起きた？

俺は、ええと……たしか昨日はいつものように寝たはずだよなあ・

それが、なんだろうな、この状況は

第一話 貴族屋敷にて

「おお、目が覚めたか！お前の名はリユーベン、リユーベン・カイ
ス・フォン・ジエデラードだ！」

……目の前でなんか外国人のオッサンが騒いでいらっしやる
自分で言うのも悲しいが俺はすばらしいほど田舎者なんだ
だから外国人耐性なんか無いわけで……

ちよ、緊張するって

……まあ、大体は把握したよ

アレだろう？憑依やら転生やらって奴だろうさ

自慢じゃあないがウチの実家は夜八時を過ぎれば辺りは真っ暗闇の
世界

辛うじて繋がっているネットの海ぐらいしか娯楽がないんでな！

粗方の二次創作は読み漁ってたんだぜー！

・・・ふう

現実逃避はさておいて

今のところ把握できた現状を整理しよう

・名前はリユーベン・カイス・フォン・ジエテラード

・貴族の次男

・父の肌の色から恐らくはゲルマニア？

・・・注目すべきは三番目、ここがゲルマニアだったことだ

なんかチラホラ聞いたことのある名詞が魔法やらメイジやらって単語に混じって聞こえてくる・・・

ゼロの使い魔ですねありがとうございます

しかしゲルマニアで

原作じゃあ完全な噛ませ犬じゃないの

弱肉強食のこの国で俺みたいな俺TUEEE主人公でもない、元日

本人がやってけるだろうか・・・

「うあー・・・（不安だわあ・・・）」

・
・
・
・
・
・
・

さて、生まれてから三年経ったわけですが

え？早い？そんなもんだろ子供の成長なんて

この三年で解ったことが大分増えた

まずは我がジエデラード家について

やはりゲルマニアの、それも中々に力のある方の貴族らしい

爵位は伯爵・・・

軍門の家であり、長男である兄は13才にして既に軍の方に顔を出しているとか

俺の分も頑張ってくれと日々願うばかりだ

父、ドメル・ザメンホフ・フォン・ジエデラード伯爵は軍を退役し自領の内政にかかりつきりだ

そのため俺はほったらかしが多いわけだが、まあ都合がいい

あ、この三年で俺のスタンスは決まりましたよ

『原作非介入かつ穏やかに緩やかな貴族人生』

これに限るぜ！

いや原作なんて入る余地無いでしょう

前世（いや、前の世界で死んだ訳じゃない・・・と思う）でも無
口で暗くて誤解されまくりの俺だったんだ

あんなツンデレとか、主人公補正とか、ムンムンねーちゃんとか、
不思議無口とか・・・絡めねーよ

とりあえず家は兄貴に任せるとして・・・神聖アルビオンとの戦争
をうまく乗り切れれば死にはしないだろう

ご都合主義と言うべきか、恐らく戦争が始まるのはあと三十年後な
わけで・・・

まwだw原w作wキwヤwラw生wまwれwてwねwーwよw

端から介入なんてできやしないから

大体そんな昔からイベントとか無かつただろ・・・？

ん？原作二十年前に何かあった・・・気が・・・

続く

第一話 貴族屋敷にて（後書き）

短いなあ・・・あとセリフが二個しかねえ

第二話 次期当主にて

あれから七年経ったわけですが・・・

皆さん、事件です

、死んでしまいました

兄さんが

第二話 次期当主にて

俺が十才になったこの年、兄さんが死んでしまった。近隣諸侯との小競り合いで運悪く敵の矢に当たっただけらしい

兄さんは俺なんかよりずっと優秀だった。若くしてトライアングルとなり、頭脳も人並み以上

そんな兄さんでもころりと死んでしまったんだ

この世界がいかにかに死と隣り合わせであるかを改めて認識させられた

よ・・・

兄さんはほとんど家に帰ってこなかったから思い出なんかほとんど無いわけで、でも、俺に優しくしてくれたことは覚えている

兄さん、ご冥福お祈りしております。どうか安らかに・・・

・・・この世はホント儘ならんなあ

兄が死んだ

つまり家督が俺にお鉢が回ってくるわけで・・・

おいおい、計画七年目にして挫折かよ！

この世界は本当にこんなはずじゃないことばかりだよ畜生！！

まあ、今までの密かな手回しは幸い継続中だ。

これをうまく使いジエデラード家の利益に繋が・・・アレ？いや、違う違う。死なないようにするんだ、うん

「・・・るか？リユーベン、聞いているのか？」

おっと、思考に沈んでいた

「・・・はい、父上」さて、父上とは皆さんご存じ伯爵さまだ。深緑の髪に豊かな髭をたたえた、いかにも軍人然とした威厳あふれる

ナイスミドルなんだが・・・
今は少し憔悴している

兄さんが死んで悲しむまもなく跡継ぎたる俺に自覚を持たせようと
頑張つてらっしゃるわけで・・・

悪いな、父上。期待はずれの息子だよ、俺あ。まだラインだしね

余談だがこの世に生を受けて10年。未だにしゃべるときは前世の
癖で出だしを言いよんどんでしまう

また目つきが悪いらしく使用人にも時々目をそらされている
俺は悲しいよ兄さん、でも負けないぜ！

「お前もジェテラードの男ならば軍役に就かねばならん。そのため
にもまずは来年から王都の軍学校に入るといい」

「・・・私が軍人となることは誉れだと思っております。しかし、
軍学校に行くのは後三年待つて頂けませんか？」

「む？早い方がお前のためにもなるだろう？」

それはそうなんだが・・・

「・・・今の私では、力が無さ過ぎます。軍学校で相応の訓練を受
ける前に、せめて兄上が軍務に就かれた十三の年まで修行に励みた
いのですが」

「ふむ・・・」

俺のスタンスは『若隠居』だった

しかし、家督を継ぐ（コレ、不可避）にあたりそうも言ってもらえないにせ自分の手腕が足りない。近隣諸侯の中で生き残れないってことになる

流石は弱肉強食ゲルマニア

うちは決して弱くないんだが、そこまで強大でもない
内政にしか従事してない割に良くも悪くも昔ながらの父上では効率
が悪い部分も多々あるしな

ツエルプストー伯爵なんかは軍部でも元帥クラスだし、安泰なんだろうが・・・
とりあえず生き残る、ジエデラードを背負うためには前世知識だろうがなんだろうがフルに使ってやる

それに思い出したことがある

原作以前のイベントで、かなりヘビーな奴が三年後に迫ってるんだよ
昔の俺なら無関係を買いたろう。だけど、ジエデラードの次期当主
として使える人材は集められるだけ集めたい

と、奮起したわけだよ・・・我ながらキャラに合わねーなあ

「・・・よからう、三年待とう。13歳になれば軍学校に入りなさい。それまで己自身を納得させる強さを身につけなさい」

「はいっ、ありがとうございます・・・！」

布石は上々・・・

さて、状況を始めようか！

・・・一回言ってみたかったんだよ、コレ

side伯爵

上の息子が死んですぐ、私は次男であるリューベンを私室に呼び出した。上に期待していただけに今回の死はさすがに私も堪えた・・・この子も悲しいだろうが、この子の為にも覚悟はさせねばならん

そう、思っていたのだが・・・

「・・・私が軍人となることは誉れだと思っております。しかし、軍学校に行くのは後三年待つて頂けませんか？」

「む？早い方がお前のためにもなるだろう？」

「・・・今の私では、力が無さ過ぎます。軍学校で相応の訓練を受ける前に、せめて兄上が軍務に就かれた十三の年まで修行に励みたいのですが」

「ふむ……」

この子は昔からこうだった。この答えを出しているのが10才の子供だと言われて信用できるだろうか

普通ならば貴族の教養を学びながら遊びたい盛り of 時期であるだろうが、リユーベンは、『違っていた』

第一に何事にも冷静な態度を崩さない。冷徹と言っていていいほどに今もお、つい先日兄が戦死したばかりだというのに、全く動揺を示さない

決して兄弟仲が悪かったとは思えない、この子が異質なのだ

身内の死にすら動じない胆力

自らの力量を押し量れる判断力

未だに魔法の方はラインだが、それも成長とともに改善されゆくだろう

そして異彩を放つあの『眼』だ

純粹な幼子には持ちえない醒めきった眼

使用人達などはその眼を怖がるようだが、そんなことはどうだっていい

これは才能なんて甘い言葉ではない、もっと、それこそ自分の息子だとは思えないようなモノをあ の 瞳 には 感じ た の だ

「……よかるう、三年待とう。13歳になれば軍学校に入りなさい。それまで己自身を納得させる強さを身につけなさい」

「はいっ、ありがとうございます・・・！」

私は髭をなでながらリューベンに許可を出してやる

間違いない

この子には指揮官として十分な素養がある
家督を継がせるには申し分なかったわけだ

兄が死んで弟の才を再確認させられるなど、なんと因果なことだろう

私はやはり、普段通りの立ち振る舞いで退出してゆく息子の背中を
見送り、眼を閉じた

あの子はすぐに大人の、貴族の世界に足を踏み入れるだろう
ならば

「後三年ぐらいは子供でいさせてやるのが、私にできる愛情の形だ
よ、リューベン・・・」

重い期待をかけざるを得ない息子を思いながら、私は独りごちた

夕闇の迫る室内は、暗くなりかけていた

続く

第二話 次期当主にて（後書き）

キャラがブレてブレて定まりませんよ

第三話 目下修業にて（前書き）

かなり説明的な内容です・・・

軽妙洒脱な会話文が書きたい・・・

第三話 目下修業にて

さて、後三年の猶予を得たわけだが・・・

どうするか

正直、ほとんど決まっております

兄さん、どうしようか・・・

第三話 目下修業にて

自慢じゃあないが俺はなんの取り柄もない大学三回生だった

領地改革に必要なノウハウがあるわけでもなく、
なんかすごい体術を極めていたわけでもない

日暮らしパソコンに向かいて、時折畑を耕す農家の息子だった

大根の堀り起こし方には自信があるんだが・・・農家の知識もその
程度である

んー・・・

「やはりーから勉強在るのみか」

「そうですね。そのための私ですぞ、坊ちやま」

これは俺が内政を学びたいといったら魔法の修行の合間に教えてくれている家令のジャクソンさんだ

ご自分の仕事もあるだろうに合間を縫って暇を見つけ、俺に教えてくれている

かなりのお年だが・・・

ありがたいね、ホント

「では坊ちやま、お次は税收の内訳についてですが・・・」

「・・・ああ、わかった。資料を見せてくれ」

「こちらでございます。」

ふむ。うちの領は土地は狭いが豊かな土壤に恵まれているようだ。

かなり良質な菜種が採れるようで、それを原料に油を特産としている・・・やはり農業でやっていくには些か狭すぎるかな。

これから多少なりとも力を付けなきゃならんから、

やはり技術職を強化していくべきか、誘致をどうするか・・・

・・・ああ、頭が痛い。

別に優秀でもなんでもない我が頭脳では、新たな分野を1から勉強なんて耐え難いんだよ

だが、やらねばならん・・・

『俺式人生設計』殺伐とした原作を潜り抜ける』

を達成するためにも！！

このあと二時間、ジャクソンの講義は続いた

「いいですよリューベン様。持続時間も延びてきました。この調子でいけば問題ないでしょう」

「・・・ああ。しかし、威力が心許ないような・・・」

「それはおいおい精神力を増やしていくしかありませんな。今は、まずこれをマスターしてしましましょう」

只今屋敷の裏、修練上にて父上の部下である元軍人のラインメイジ、

通称オツサン（仮）と訓練中だ

元々男爵家の三男らしく、魔法の実力も低かったので軍の中でも前線で走り回っていたタイプのメイジらしい

そのためかラインながらかなり効果的な戦い方を身につけている

だが、それもやはり一般的な『貴族』の枠の中での『効果的』だ

二次創作やら原作知識からすると緊急時には対処できないようにも思う

だが

今はそれよりも、基礎となる魔法が重要だ。

軍人として戦場に立つのが確定なら、戦い方はおいおい見つけていこう。

「『ウォーターウォール』・・・耐久値として、どこらまで防げる？」

「そうですね・・・現在のリューベン様なら、完全な発動でも飛んでくる矢を数本がやつとか、ドット辺りのファイヤーボールぐらいですかね」

「・・・ハア」

やはり俺は魔法の才がないんだらうか

ただでさえ攻撃に向かない水のメイジなのに

いや、軍人としてなら衛生兵やら後方支援やら在るだろうが、次期当主としては後ろに下がってばかりでは面子が立たんと言つか、家名に申し訳ないというか・・・

ラインだから仕方ない、

十才だから可能性は無限大だと、

言い切れたら嬉しいんだけど

・・・いかんせん成果が上がらないと、気分が落ち込むな

この世界の魔法はイメージが大事だ・・・妄想は得意な方だったのになあ

「落ち込むことはありませんぞ。まだまだ、これから鍛え方次第でいくらでも伸びましょう。なんといつてもあの伯爵殿を父上に持たれておるのですから！」

ちなみに父上はトライアングルでも上位の、天才ではないが『強者』
と言えるメイジだ

まあ叩き上げの軍人が貧弱じゃあ困るんだが

・・・原作では敵味方へタレばっかだったな

今はまだ小さな戦が頻発しているが、あと二十年もしたらどこの国も平和ボケか・・・

まあ時間はあるんだスクエアとかオリジナル超魔法とかいらさないから
せめてトライアングルで安定した魔法が使えるように、頑張りますか

バシヤリ

「どうしました！集中力が途切れておりますぞ！？ほら、もう一度
やってみなされ！」

・・・前途は多難そうだ

介入すると決めた、
三年後に迫った原作イベントとは・・・

そう、あの「ダングルテールの虐殺」だ

俺が三年の猶予をもらった最大の理由

これが起きたときの行動を練るためだ

本来なら絡みに行く必要はない
むしろ無視しても何の支障もないだろうさ

だが、あの事件を経たアニエスは復讐者としてメイジ殺しにまで成長を遂げるといのが解っている

そして将来領地を守りきるには有能な平民の戦士が必要になる

これは引き入れるに限るだろう

・・・勿論、青田買いだよ

だが、あの復讐から来る向上心とストイックな性格、そしてアンア
ン王女に忠誠を誓っていたところを見ると騎士としても申し分ない
だろう

アレをうまく飼い慣らせればかなり使えるモノになるだろう・・・

・・・なんだ？最近思考が黒くなってるのがするな・・・虐殺が起
きる前に対処するとかしない時点で、俺もたいがいな悪人か

胃が痛いな

ともかく、どうやってアニエスを引き込むか

まあプランとしてはトリスティンに偽装潜入して逃げてきたアニエ
スに接触

貴族として気まぐれで平民を召し抱えるのはそれなりにある話だ
幸い火を憎むだろう彼女に対して俺は水メイジ。
ハナから悪印象は持たれないだろう

潜入に関しては問題ない

トリスティンは弱小の癖してかなり警備がザルでやんのWWW

今でコレなら原作時のヘタレ具合も納得って感じだ

・・・しかし懸念は一つある

音に聞く、彼の

『烈風カリン』の存在だ

よく考えたら原作二十年前なんて最盛期も最盛期

ゲルマニアでも聞こえてくる武勇はまさに失禁モノだ

個人の武力限界はどれぐらいなんだろう、この世界

ゲルマニアの国境付近は殆どヴァリエール領だ

つまり近くを通らざるをえないわけで

へたに彼女にかぎつけられようもんなら、まさに骨も残らんよな・・・

・

じゅっ、寒気がする

・・・そこらへんは保留にしておいっ、うん

続く

第三話 目下修業にて（後書き）

トリステインボロクソ言ってみました

第四話 介入開始にて（前書き）

やっぱり説明文だなあ

会話を増やしたい

第四話 介入開始にて

side???

ハアツ ハアツ・・・

「グオ、ツ、何処だぁーッ！何処に行きやがった隊長ォーッ！」

後ろから、先程私が眼を焼き潰した部下の声が聞こえてくる

もう立ち直ったか

しかし奴に構っている暇はない

今は一刻も早く、私の腕の中で気を失っているこの子を逃がさねばならない

自己満足だというのは解っている

私の罪は決して消せるものではないだろう

しかし

せめて、この子ぐらいは助けたい

自己満足だろうが、生きていてほしい

そのために、私はただ走っている

そんな時

「あのう、すみません。貴族様でいらっしやいますか？」

闇夜から声が響いた

第四話 介入開始にて

「何者だ!!」

周囲を警戒しながらも私は声の主を見定めた

目の前には老いた馬を引いた少年が、こちらを向いて立っていた。

格好からして平民だろう

気付かぬ間に殺気を飛ばしていた様で、顔色を青くさせている

情けない

いくら気が急いているとは言え、ここまで近づかなくては意識が向かなかつたなど実験部隊の長として……いや、その

肩書きは今の私にはただの罪の証に過ぎない。考えるだけ無駄だ

押し黙った私に対し、少年は恐る恐る口を開いた

「ハ、ハイ。えっと、僕はここから北にある村からきました。主人よりこの先にあるダングルテルという村に使いに出されまして・・・」

「・・・その村はもう無い。どうやら野党に襲われたようだな。壊滅していたよ。私は今までそこにいたが、生き残ったのはこの娘だけだよ」

その村の名を聞いた時、咄嗟に嘘をついてしまった

どの口がほざく

あの惨劇を起こした張本人が

少年は大層驚いている。

何故こんな所に貴族がいるか？

何故生き残ったとはいえたかが平民の子を貴族が連れているのか？

よく考えたら矛盾点の多々あるその場しのぎの嘘に過ぎない

だが貴族の言ったことだ。平民からすれば本当にそうだろうか。なからうが関係ないものなのだろう

少年は悲痛な面持ちで私の腕の中に眠る少女を見ている

「・・・君は、主人と言ったが、何の使いとして行く手筈だったの

かね？」

「ハイ、あの、僕の主人はワインの商家を営んでおりまして。今回はその村の教会に卸す品を、向こうのシスターへ確認してこいと申しつけられたのですが・・・そのような酷いことになっているのであれば、一度戻ろうかと・・・」

彼は商家の小姓であるようだ

成る程、確かに農民にしては少し高価な服を着ている彼の主人とやらの店もそれなりの大きさなのだろう

しかし、彼が会うはずだったシスターとはこの子を守り抜いた彼女のことか

こうまで話にあがると自らの罪を糾弾されている錯覚に陥ってくる

こんな所で縁者に会うのも運命なのだろうか・・・
この純朴そうな少年になら、任せられるかもしれない

「・・・この娘は教会の前で倒れていたのだ。恐らく教会に住んでいた子供たちの一人だろうが、君の村まで連れて行ってやってはくれないか？」

「ハイ。それは構いません。教会の子なら縁もありますし、それに・・・こんな小さな女の子が一人ぼっちなんて可哀想ですから。主人へ頼んでみます」

「ああ。・・・済まない」

それは誰に向けた言葉だろう

少年へか？

少女へか？

それとも、命を守り散った彼女へか？

わからない

「・・・主人に断られても困るだろう。この袋を持たせよう。頼んだよ。・・・私は行かねばならない」

少年にありつたけの金貨を持たせる
これで悪いようにはされないだろう

「え？こんなに！？ハ、ハイッ！お任せください！」

私は少女を少年に託し一人歩き出す

結局、最後までなにも果たしていない

今の私は何をしている？

行きずりの少年に託して逃げているだけじゃないか

こんな体たらくのまま野垂れ死ぬことが相応しいか？

いや、それすらも許される身ではないだろう

・・・ああ、やるべきはただ一つだけだ

実験部隊の『炎蛇』は今宵死んだ

ここにいるのは償い切れぬ罪を犯した唯の大罪人だ

私の残りの人生は

あの、全てを失った少女に裁かれるためにある。
死などただの逃避にしかない

ここに、罪人、ジャン・コルベールの背負うべき道は定められた

sideリユーベン

「あのう、すみません。貴族様でいらっっしゃいますか?」

こんばんは

もの見事に三年経ちました
月日が流れるのは光陰矢の如しですね

・・・現在俺はトリスティン北部、ダングルテール方面にいる
とうとう介入の時期がやってきました

三年間で雇い、育て、放った俺直属の諜報員によると、きな臭い動きがあるのは解った

そしてついに今夜、『ダングルテールの虐殺』が起きたわけだ

ここに来るまで大変だった

細かい日時が解らないからなんとかしてその場に居合わせようと情報収集に心血を注いだ

領地外、しかも他国に潜り込むわけだからバレないように慎重に慎重を重ねた隠密行動を繰り返してきた

父上には三年間の修行の集大成として一ヶ月の一人旅という口実で外出の許しを得てきた

国境越えにあたって貴族の格好じゃなにかと制約が多いので、町民としての服と年老いた馬を用意して商家の小姓スタイルに変装もしてきた

あ、『烈風カリン』の件だけだ

よく考えたら彼女の所属はマンティコア隊。
つまり王宮直属の護衛部隊だ

里帰りとかしてない限り確実に王都に詰めてるだろう

それに彼女程のビッグネームの動きは逐一諜報員が知らせてくれる

結果、今回の旅では遭遇することは無いと判断

いや、取り越し苦労で済んでよかったよ

「何者だ!!」

つと閑話休題、閑話休題

俺は今、目の前の貴族に声をかけた

そして帰ってきた殺気たつぷりの視線

怖エーよ・・・洒落にならんて

いくら修行を積んだとは言えここまで研ぎ澄まされた殺気は初めて
ダヨ

しかし

幾分か若いがこの顔は見たことがある

と言ってもアニメの中でだ

どうやらこのジャックナイフのような御仁が後のつるぴか発明おじさん

ジャン・コルベール師だろう

ビンゴ！状況はバツチリじゃないか

さて、ここからが正念場だ巧くやらないとな

「ハ、ハイ。えっと、僕はここから北にある村からきました。主人よりこの先にあるダングルテルという村に使いに出されまして・・・」

殺気に怯えたふり（いや、ふりだよ。足の震えとか止まらないけど、ふりだよ）をしながらダングルテルの名を出してみる

どっからどう見ても平民の少年だ！

間違っても貴族なんかじゃ見えやしないぜーッ！

・・・覇気がないとか言うな

「・・・その村はもう無い。どうやら野党に襲われたようだな。壊滅していたよ。私は今までそこにいたが、生き残ったのはこの娘だけのようだ」

その言葉に一応驚いて見せた

・・・やはり、罪の意識に既に苛まれてるんだらうな。僅かだが、

村の名前を聞いて顔を曇らせたよ

そしてちゃんとアニエスと思しき少女を抱えている

どうやら接触はこのタイミングで正解だったな

原作じゃ助けたとは解っても何処で育ったとか解らなかったもん

「・・・君は、主人と言ったが、何の使いとして行く手筈だったの
かね？」

「ハイ、あの、僕の主人はワインの商家を営んでおりまして。今回はその村の教会に卸す品を、向こうのシスターへ確認してこいと申しつけられたのですが・・・そのような酷いことになっているのであれば、一度戻ろうかと・・・」

この設定が今回の鍵だ

確かコルベールがアニエスを庇った人を殺したのが教会の筈だ

これで彼には、俺が縁のある人物だという意識下への伏線が張られた
なんか悲しげな顔をしてコルベールさんに抱かれたアニエスを見たりしてみる

・・・小さいなあ。こんな年から復讐に人生捧げるなんて
やっぱ二次元じゃなく実際に見るとその悲惨さが辛いと言っか・・・

いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない

頼むぜ？

伏線が効くか否か・・・

「・・・この娘は教会の前で倒れていたのだ。恐らく教会に住んでいた子供たちの一人だろうが、君の村まで連れて行ってやってはくれないか？」

よっし！食いついた！！

スルーされて帰れとか言われたら困るところだったが、神は俺に味方したようだ

「ハイ。それは構いません。教会の子なら縁もありますし、それに・・・こんな小さな女の子が一人ぼっちなんて可哀想ですから。主人へ頼んでみます」

しかし行きずりのガキにたった一人の生き残りを簡単に預けちゃつていいのかね、コルベールのに？

「ああ。・・・濟まない」

・・・濟まないとか

咳かないでくれよ、聞こえちゃってるから

誰に言ったか知らないけれど

俺にはその絞り出したかのような辛い声に相当な想いが籠もっているように聞こえたよ

「……主人に断られても困るだろう。この袋を持たせよう。頼んだよ。……私は行かねばならない」

「え？こんなに！？ハ、ハイッ！お任せください！」

俺に金貨のたつぷり入った袋を預け俺たちとは反対方向に歩いてゆくコルベールさん

ちらりと伺ってみたが、まだ若いだろうに何と重いモノを背負った背中なのだろう

……そんな彼の思いを託された少女を、俺は利用しようとしているわけだ

……悪いことはしたくなかった、とは、今更言えんな

俺はアニエスを抱えながらジェデラード領に帰るために馬を走らせる

アニエスに目を落とせば起きる様子もなく、疲れ果てて懇々と眠り続けている

……彼女にとって、眠りから覚めたらまっている現実は、残酷なことだろう

だが、それでも

こうして俺の意志で、俺の都合で運命をズラされたんだ

ならば、利用することになっても、彼女の人生を見守り続ける義務が出来た

・・・当初の予定ではただの駒だったんだが

情が移った、というか

俺は悪人になりきれないか、やっぱり

それでも半端者には半端者なりに生き抜いていかなきゃならん

取り敢えず、家へ帰ろう

全てはそれからだ

続く

第四話 介入開始にて（後書き）

アニメス出ました

しかし、喋りませんでした

第五話 幼女覚醒にて（前書き）

今回から一人称から三人称視点に変えてみました

今一切り替えがウマくできてない気しますが、大目に見てください

第五話 幼女覚醒にて

とある貴族の屋敷の一室にて、本来の歴史から外れた道を往く少女が目を醒ました

「……う、うん……アレ、ここは……？」

第五話 幼女覚醒にて

「目が覚めたか？」

「っ!?!？」

少女が場を把握する前に室内に一人の男、少年と呼べる人物が入ってきた

ご存じ、リューベンである。彼は起き抜けの少女をなるべく怖がらせないよう、本人の精一杯の爽やかな声で話しかけた

「体に異常はないようだな。ああ、安心したよ」

「……っ、あの、ここは、何処……ですか？」

しかし努力の甲斐はなかったようで少女は警戒しながら、途切れ途切れに言葉を発した

(まあ、そりゃあ警戒するよなあ)

『起きたら全く知らない場所で、知らない人間に話しかけられる』
赤ん坊としてそれを体験したりユーベンからすれば、今の彼女の焦りよりも実に共感できることだった

「(とりあえず掴みが肝心だからな・・・)ここは帝国ゲルマニアがジエデラード伯爵領、その屋敷だ。

と、申し遅れたな。私は、ジエデラード伯爵が次男。リユーベン・カイス・フォン・ジエデラードだ、お嬢さん」

「!!!? 貴族さま・・・!?!」

そう言っただけを見直す少女。確かに室内は豪華な調度品で彩られており見慣れた平民の家ではあり得ないとわかった。

しかし、すると何故自分がここにいいのか解らなくなり、何が起きたのかと思考に集中する。

体験者として彼女の頭の中がどんな状態か理解できるリユーベンは、とりあえず落ち着くまで静観していることにした

(なんで、こんな所に・・・? 昨日、なにが・・・ッ!?)

「ッア、アアアアアア!!!ウア、アア、、、アア・・・!!!」

昨晚の惨劇を思い出したのか体が覚えてしまった『死の恐怖』がこみ上げ叫び声を上げる。

ガタガタと震えだした彼女を、しかし上から抱きしめるものがあつた

「大丈夫だ。ここは、もう、安全だから・・・」

リユーベンは手の中で震えている少女にそう言い聞かせる。

ギュツと抱きしめられた少女は彼に縋りつくように抱き返していた。しばらくして落ち着いたところを見計らい、彼は少女からそつと離れた

「もう、大丈夫か？」

「・・・グスツ、はい、あの、すみませんでした・・・」

落ち着いた少女は、しかし頭の中に昨夜の情景が消えることがないようで顔色が悪い

「・・・まだ、君の名前を聞いていなかったな？」

「あ、はい、あの、私はアニエスといえます・・・」

「アニエス、か。良い名だ。ならばアニエス、君が疑問に思っているであろう事に答えるでしょう」

リユーベンは事のあらましをアニエスに説明した。

コルベールの部分は助け出してくれた人がいたと、

ここに来た経緯はその人とジェデラード家に縁があり君を伯爵領で

暮らせるように頼まれたと、

多少の改竄はしたがあながち間違いでもない、粗方の説明を終えた

「・・・私、一人だけ助かったんですか？」

「・・・残念ながらな」

「そうですか・・・あ、あの、私はどうなるんですか？」

アニエスは見ず知らずの土地に来てしまっただけで帰れないという事に、不安な様子を隠せないようだった

これを見たりユーベンは（やっぱり子供の頃だと原作みたいなキツツイ感じはしないんだなあ）と、場違いなことを考えていたり・・・
・流石に自重した

「そうだな、君は、どうしたい？」

「え？」

アニエスは耳を疑った。

平民ではない自分は引き取られただけでも良かった方であり、孤児ではない自分はどんな目に遭ってもおかしくないと思っていたからだ。

しかし彼はそんな自分に、『貴族の都合に左右される存在』に『自由を与えた』。

不思議がつて一時呆けていると、リューベンは切り出した

「君がこの領で普通に暮らしたいというのなら父に掛け合いどこかの村に居場所を作ろう。」

この屋敷で働きたいというのなら侍女長に頼んであげよう。
したいことが解らなくても最低限の面倒は見るつもりだ。
君は、どうしたい？」

「・・・な、んで、そこまで」

「む？」

「なんでそこまでしてくるんですか？貴族さまにそこまでして貰えるようなことなんて、私は・・・」

アニエスの疑問も尤もであった。このハルケギニアでは平民の地位はあって無いレベルに扱われることが多い。孤児院に放り込まれて終わり、もしくは更に酷い目に遭うことだってある。自分はこれも女であるし、決して無いわけではなかった

「そうだな・・・君を助けた人から頼まれたということもあるし、私とその人物に一方的に恩を感じているから、というところだ」

「恩ですか？」

「ああ、それに、君を預かったのは父上でも、他の誰でもない。私の意志に依るものだ。ならば君に対する責任は、私にあるからね」
(本人渾身の)柔らかな笑みでアニエスを見やるリユーベン。
アニエスは、貴族というものはこういう人もいるのかと思った。
自分よりも少し上の、精々13〜4歳の人からこんな言葉を聞くなんて思ってもみなかった。
そして『どうしたいか？』という彼の言葉について考え始める

考え込む彼女の真剣な顔にリユーベンがちょっと可愛いと思ってし

まったのは内緒だ。
彼はロリコンではない。
断じて。

アニエスは考える。

リユーベンの言ったように今までとは勝手が違つたろうが平穩な居場所を再び得ることは出来るだろう。

だが、その平穩な場所を奪つたのは誰だ？

あの、村を襲つたメイジ達に他ならない。

自分の立場を落ち着いて受け入れることの出来た今、アニエスはドス黒い感情が心の根底より湧き出てくるのが自覚できた

村を焼いたのはあのメイジ達だ

全てを奪つたのはあの炎だ

私はそれを許せるのか？

否、許せるわけがない

ならばどうする？

復讐だ

村を襲つた奴らを一人残らず見つけだし、全員殺してやりたい
いや、『殺してやりたい』んじゃない・・・『殺す』んだ・・・必
ず・・・

「私は・・・村を襲つた奴らを・・・殺してやりたいです・・・！
！」

リユーベンは確固たる意志を持ってそう答えたアニエスにそつと痛ましい目を向ける。

まだ十年も生きていない少女が復讐を決意し、確固たる殺意をその目に宿している。

これは平和だった前世では有り得なかった、少なくともリユーベンの知る範囲では無かったことだ。

つい最近自我が出来たような幼子が、一つの意志に人生を賭けるなんて事が異常でないわけがない。

それともこの世界 ハルケギニア ではごく当たり前のことなんだろうか？

何にしろ、目の前でこんな小さな子が修羅道に堕ちる覚悟を決めたことが、リユーベンにとっては一番痛く感じた

(やつぱり・・・『実際』に見るのは辛い、な)

アニエスは原作通り復讐に生きる人と成るのだろう。原作でコルベールが孤児院に預けた後の詳細が解らなかったため、事件のすぐ後に選択肢を与えてみたら、もしかや復讐を考えないのではないか？
新しい平穩を求めるのではないか？

とも考えた。

それならばそれで良いとも考えてしまった

しかし結果は復讐者の道だった。

(いや、感傷に浸るな・・・元々予定通りだったんだ。俺の未来のために、この子を利用すると・・・！)

「・・・そうか。君がそれを望むならば。私はそれを手助けしよう。

君に修羅道を歩かせることが、正しいかは解らない。だが、君が決めた道ならば。私は何もいわないよ」

「ありがとうございます・・・!!」

何が「正しいかは解らない」だ。

子供が道を踏み外したなら、修正してやるのが大人の役目だろうに。利己的な、自分の吐く偽善にリユーベンは吐き気を感じながらも、張り付けた笑みを剥がさないままに続けた

「・・・君の道に関しては、私と君だけの秘密だ。父上は堅物だからな。平民如きに構うな、などと仰るやもしれん。」

「はい、わかりました」

「当面はこの屋敷で面倒を見よう。なに、表向きには、君は私が拾ってきた平民の孤児という扱いだ。この屋敷では君は私のモノだ。とにかく、今は休むと良い。この部屋を使ってくれて構わん」

「あの、、、何から何まで、ありがとうございますっ!!」

アニエスはリユーベんに深々と頭を下げた。恐らく彼女にはリユーベンが慈悲深い聖者のように移っているのだろう。

リユーベンはそんな彼女に笑みを向けてやる

「何かあったらこの鈴を鳴らすと良い。誰か人をよこそう。これからのことは解らないが、今日は君は私の客人だからな。では、ぐっすりと休みなさい」

リユーベンはそう言って振り返らずに部屋を後にした。

後に残されたアニエスは、やはり幼い子供なのだろう。知らず知らずのうちに溜まっていた疲れか、緊張の糸が解けたのか、普段ならば逆に違和感を感じてしまうフカフカのベッドに沈むように眠りに落ちた。

その顔には凄惨な決意は浮かんでおらず、年相応の可愛らしい寝顔が、そこにあった

「ハアー……」

アニエスの入る小部屋を後にしたりユーベンは廊下を歩きながら溜息を吐いていた。

今更ながら自分の選んだやり口の悪どさに嫌気が射す。

最近是自己嫌悪ばかりだと、ふと考えた。

しかし、そんな暇ではないことに思い当たる。

アニエスにはああ言ったモノの、自分は貴族で次期当主とはいえ、

『次期』でしかなく、現在はただの13歳のガキである。

ガキがガキを拾ってくるなんて面倒臭いことをしてしまい、父親に対するウマイ言い分を考えないといけない。

それに来年から自分は軍学校に入る。

それまでにアニエスの立ち位地をしっかりと定めてやらないといけない。

また、初期の命題である自己の鍛錬も怠っては意味がない。

「やることには事欠かないが……胃が痛いなア」

少なくとも自己嫌悪なんて非生産的な行為に勤しんでる暇はないと、
ウマイ言い訳を考えながら、父の書齋に足を運ぶリユーベンであっ
た。

続く

第五話 幼女覚醒にて（後書き）

アニエスの立ち位地を侍女にしてしまいたい

しかしそれでは話が繋がらないなあ

第六話 王都訪問にて（前書き）

この作品内では二十年前の時点でアニエス6歳という設定です

原作でどれぐらいだったか忘れたんですが、まあ、この作品ではこの年齢で行きます

第六話 王都訪問にて

昼食も済んだお昼過ぎ、とある貴族の屋敷でこんな会話が為されていた。

「なあ、ジャクソン」

「何でございましょう?」

「メイドの戦闘力というのは、いかほどだろうか?」

「・・・・・・は?」

第六話 王都訪問にて

ジャクソンは嘆息した。

彼が仕えるジエデラード家の跡継ぎ、次の主たるリユーベン・カイス・フォン・ジエデラードが『また』おかしな事を言い出したと。

彼は三年前からこの若き次期当主に、政務の家庭教師みたいなものをしていいる。本来の家庭教師はまた別にいるが、先代よりこの家に

仕えてきたジャクソンの知識と経験からも教わりたいと、家令の仕事の合間を縫いリューベン直々の願いを聞いていた。その中で気づいたことがある。

小さい頃は物静かながら、幼さを感じさせない目をした大人びた子供だと思っていた。

しかし、実際は、確かに大人びており、知識の吸収も早い秀才だが、時折突拍子もないことを口にしたたり実行したるするという少年だったことだ。

しかもその奇行を突き詰めてみると、人生経験豊富なジャクソンからしても成る程と思わされるようなことだったりもした。

そういった所にリューベンという人間が変人なのか、ある種の天才なのか、ジャクソンは彼の器を測りかねていた。

現に今もまた何か言い出した。

今はリューベンの政務の勉強の合間の、休憩時間のはずである。

断じてメイドの戦闘力云々が話題にあがる勉強内容ではなかったはずだが……。

「リューベン様、メイドを何と戦わせるおつもりですか？」

「……やっぱり、変だろうか？」

「それはもう、このジャクソン、我が耳を疑ってしまいます程にはジャクソンはリューベンを目を細めながら見やる。

別にリューベンとしてはふと考えついたことに意見を求めてみただけだった。

『戦うメイドさん』

二次元には欠かせない（と、彼は考える）要素であるそれを実際にやってみようかな？ぐらいにしか思っていない。

何故麗らかな昼下がりからこんなことを議論しているのか？

それは、リューベンが未だにアニエスの立ち位地を決めかねていたからだった。

（・・・アニエスの容姿でメイドさんは・・・目つきが悪いか？いや、しかし・・・）

綿密に計画していた割に、細かいところは見切り発車のリューベンだった。

アニエスを連れて帰ってくるまではよかった。

しかしいざ連れ帰ってきてみると、いくら平民の孤児とはいえ一人の人間。

とりあえず原作通り強く育てようと楽観視していたが、実際にはそんな簡単にはいかなかったのである。

父の説得には成功。家には置いて貰えることに（立場的にリューベンの所有物）。

しかしその結果、父は彼女をリューベン付きの従者がメイド、最悪妾にするものだと思ってしまった。

まあ一般的な思考ならば、そのような幼子の道などそれくらいが妥当だと考える。

しかしリューベンはアニエスを戦力にするべくさらって・・・もとい引き取ってきた。そのために鍛え上げ、実力を付けてもらわなく

ればならないと考えている。

この温度差を埋めるべく何かいい案はないかと考えているわけである。

再び考え込んだリューベンにジャクソンは、次は何を言い出すのかと内心ドキドキである。それにそろそろ休憩時間も終わりであるから、彼としては折角教えている勉強に集中して欲しかった。ジャクソンは密かに嘆息した。

そんな家令の内心などつゆ知らず、リューベンは方針を練り続ける。

(むう……。来年度の入学までは後十ヶ月。さすがに軍学校にまで連れてはいけないしなあ……。それまでに誰かに弟子入りでもさせるべきか……。あ!!)

「そうだ、王都へ行こう!」

「……は?」

「おや、今日は何のご用ですかかなりューベン様!わざわざこちらに

来られるとは珍しい。鍛錬の予定は明後日ではなかったですか？」

思い立ったが吉日とばかりに、しかしその日は勉強をしなければならなかったため、渋々翌日。

リユーベン達は王都ヴィンドボナに来ていた。

そんな彼らを出迎えたのは王都の中級住宅街に居を構えるリユーベンの魔法の師匠、元軍人の通称オツサン（仮）であった。

「いや、今日は別件でな。少し力を貸してほしいのだが」

「ほう？私にできる範囲ならば、このウェンブラム、お手伝いいたしますぞ？」

通称オツサン（仮）こと、元軍人のウェンブラム氏。リユーベンが毎週三回領地まで来て貰い稽古をつけてもらっている。この三年でかなり鍛えられたおかげで、軍学校に入れるレベルの水準以上には成長したリユーベンである。

そんな彼を訪ねることが、王都に来た理由であった。

「とりあえず立ち話もなんですな。まあお上がり下さい」

「悪いな、急に押し掛けてきて」

「いえいえ、構いませぬよ。さあ、どうぞ・・・おや？そちらは？」

「ああ、この子が今回訪ねてきた理由だ」

リューベンは後ろに隠れるように立っていたアニエスをウェンブラムに紹介するように前に押し出した。

「従者……にしてはいささか幼すぎますな？まあ、詳しくは中に入ってからお聞きいたしましょう」

ウェンブラムは再度促し、とりあえずリューベン達は彼の後に続いた。

屋敷に入り、メイド達がお茶を出し終えたところでウェンブラムが切り出す。

「して、ご用件は？」

「ああ、それはだな。この子を鍛えてほしいんだ。アニエス？」

リューベンはアニエスに挨拶するよう促した。リューベンの言に反応し、後ろに控えていた彼女が一步前に踏み出す。

「アニエスと申します」

ウェンブラムは年不相応に毅然と話すアニエスを見定めるように目を細める。

「この、娘をですか？失礼ですが、また妙な思いつきか何かで？」

「ん、まあ、今回は少し事情があつてな・・・」

リユーベンはアニエスにまつわる事情を掻い摘んで説明する。何故貴族たるリユーベンが平民の娘にそこまでしてやるのか、それらしい理由を捏造しながら。

ここでアニエスが復讐を誓っていること。

その相手がメイジであることなどもキチンと話した。体験から、この人物に師事しようと思うならば、何のために力を求めているのかいつかはバレると解ったからだ。

それならば初めから目標を明かしておけば鍛錬の方向性も見定められるだろう。それに平民の扱いが体系だっていないトリスティンと違い、ここゲルマニアならば軍に組み込まれる平民の質も高く、傭兵も戦士と呼べる強者が多い。

王都ともなればそれらとの出会いも期待でき、アニエスの為になるだろうとリユーベンは画策している。

しかし本来ならばメイジである貴族にメイジを殺すための鍛錬を付けてくれと頼むなど、酷く矛盾しており普通ならば断られそうなものだが、このウェンブラムは貴族としてのしからみやらをあまり気にしない質だったので今回はそれが幸いした形であった。

リユーベンはおおまかなことを話し終える。

「ふむ、この年で復讐に人生を捧げると覚悟しておりますか。中々に背負うモノは背負つとるわけですか？」

「で、どうだろうか」

「ふむ・・・アニエスと言ったか」

ウエンブラムはしばし黙考しアニエスに声をかけた。

「はい」

「復讐に生きるといふのは構わん。人生を捧げる心算だろうが結構。しかし、本当にそこまでの意志を貫き通せるかね？復讐を諦めるほうが易かるう。ここはトリステインではなくゲルマニアだ。平民でも能力があれば多少の良い暮らしはできる。ここに来るまでに見えたであろう？平民達で賑わう街の様子が。この国で、リューベン様の元におればそれなりの暮らしはできるぞ？女の身でありながらメイジに復讐しようなどと、生半な努力では到底叶わん。それこそ地獄を見る必要があるう。それでも尚、力を欲するのかな？」

ウエンブラムはアニエスに目を合わせジツと語りかける。その目には普通の好男子の様な明るさは含まれておらず、一切の容赦を許さない目をしていて。決してアニエスの様な幼子に向ける視線でも、幼子が耐えられる視線でもなかった。

「私は・・・」

アニエスは、しかし目を反らすことなく、見つめ返しながら答えた。

「私は、それでも力が、欲しいです。リューベン様に拾っていただき、道を選ばせてもらえただけで望外の幸福です。本当なら野垂れ死んでてもおかしくなかったとわかっています。・・・ですが、ですが！それでも、私は、あの日、村を焼いた、みんなを殺した！あのメイジ達に復讐したい・・・っ！！」

アリエスは語るにつれて言葉に力が籠もっていくようで、最後には言葉が震えていた。

その間反らされることの無かった眼にはキラキラとした黒い炎が垣間見えた。

ウエンブラムがアリエスに聞いたこと、これはリユーベンがここに来るまでに幾度も確認したことであった。

『復讐以外の道もある』

『この国ならば穏やかに暮らしていける』

しかしアリエスの意志は、あの目覚めた日に決意した通り動くことはなかった。これによりリユーベンは彼女の復讐に本気で助力すると決めたのである。

「……中々に気骨のある娘ですな。いや、ウチの息子にこれくらいの胆力が欲しいものです」

「……ああ、インドリユーは弱気だからな」

余談ではあるが、元軍人の体育会系貴族ウエンブラム氏にはかなり綺麗な嫁と、親父に似ても似つかない、線は細いが軍人になるべく軍学校に通う、15歳になる息子、インドリユーが居る。ウエンブラムは三男であるため領地も爵位もない、ほとんど平民に近い貴族であり、平民への対応も軍時代の平民の戦友がいたせいかなり寛容だ。実力ある者は平民だろうが認める。そういう男だった。

そんな父に根性がないと言われ、リユーベンに弱気と称されるこの場には居ない彼が、

この先リユーベンとかなり長い付き合いになるのだが、今は誰にも知る由はなかった。

閑話休題。

「よろしいでしょう。この娘、我が家で責任をもつて預らせていただきます。」

ウエンブラムがそう言つとアニエスはパツと顔を輝かせ、深く頭を下げる。

「あつ、ありがとうございます!!」

「ああ、有難う。よろしくな。期間は私が軍学校に入ってから卒業するまでの三年間、とりあえずそれまではここに置いてやってくれると有り難い」

「ハハツ、鍛え甲斐の有りそうな娘ですからな、そのくらい構いませぬよ。年の頃は6歳程度かな？三年ではまだまだ体が出来上がりはしません、この気性なら育て方によっては有能な護衛になるでしょうなあ。女子なれば相手も油断しましょう?」

ウエンブラムは笑顔で鷹揚に頷きながら語る。

どうやらかなりアニエスのことを気に入ったようだ。

既に育成プランを練っているのか独り言のようになっていた彼を横目にリユーベンはアニエスに話しかける。

「さて、アニエス、これで来年からここで三年生活することになったわけだが、何、心配せずとも軍学校はここから二時間の所にある。

何かあっても、すぐに駆けつけよう」

笑顔で彼女に言ってやると、アニエスは「・・・ほんとうに、ありがとございます・・・」と消え入るような小さな声で返す

アニエスからしてみれば平民の自分に対して返しきれないほどの恩を受けているわけで、ますますリューベンにいつか酬いようと決心することとなった。

ウェンブラムはその幼い主従の会話を耳ざとく拾い、ニヤリと笑いながら告げる。

「リューベン様、心配なさらずともこの私が直々に見るのですから！必ずやメイジ殺しを育て上げて見せましょう！」

キリリと言い切るウェンブラムにリューベンは苦笑を返す

「ハハハ、メイジがメイジ殺しを育てるとはな、これ以上ないほどの皮肉だ」

「違いありませんな。フツ、ハツハツハツハツ！」

密かに誓いを立てるアニエス。

苦笑するリューベン。

高笑うウェンブラム。

三者三様のまま、この日の王都訪問の目的は終わった。

こうしてアニエスのこの先三年の居場所は決まったのであった

続く

第六話 王都訪問にて（後書き）

次回は軍学校入学編？

第七話 驚愕遭遇にて（前書き）

少し、設定捏造してると思います

第七話 驚愕遭遇にて

朝靄立ちこめる早朝。

ジエデラード家の門前に立つ数人の人々がいた。

「では父上、行って参ります」

「うむ、、三年間、研鑽を忘れることの無いようにな。」

「承知しております。必ずや、ジエデラードの名に恥じぬ男になって帰ってきましょう。それでは」

「ああ、気をつけてな、リューベンよ」

第七話 驚愕遭遇にて

今年、リューベンは13歳である。

三年前の約束により彼はこの春からゲルマニア帝立ヴィンドボナ軍部養成校に通うこととなった。

彼の思惑である原作を生き抜く以前に、まず弱肉強食の自国で生き抜く備えをせねばと相成ったわけである。

今はリューベンの知る原作開始より丁度二十年前。

未だ戦も絶えず、国内も不安定（原作時はアルブレヒト3世の即位により多少安定している）、

更に諸外国には名のある脅威（幸いにして『烈風カリン』は寿退社済み）が存在する、まさに群雄割拠の時代である。

それを生き抜く為にも、リューベンは日々修行に励み、本来は兄に任せる分野であった軍人の道へと進むんでいる

彼は首都へと向かう馬車の中で揺られていた。

父には勇ましく「恥じぬ男になる」とか言っていたが、内心ではそうでもなかった。

むしろ三年前の決意の時よりやる気が大暴落していたのである。

「（くそう、、いざとなったら不安になってきたよ。軍学校とか絶対体育会系だよな。俺は昔から文系なんだよ、、。なじめるかな？ああ、胃が痛くなってきた・・・）」

彼は前世、新しい学年、クラスになるとおなかが痛くなるタイプの人間だった。

拾ってきた幼女（7歳）にも負けるような、

素晴らしいほどに情弱な精神力の持ち主だった。

彼の憂鬱を余所に馬車は王都へと進む

王都ヴィンドボナ

「……き・した。着きましたぞぼっちゃま。」

「うん? ……ああ、ふあああ……そうか、解った。悪いな」

リユーベンは爆睡していた。

前日は緊張しすぎて眠れなかったのである。

そのためたった数時間の馬車の旅でぐっすりと眠りに落ちていたのである。

今の彼はさっきまで悩んでいた不安などは忘れてしまったようだ。

精神力は情弱ではあるが、図太い時にはやたらとタフガイなりリユーベンだった。

御者に侘びを入れてから、軍学校なんだから荷物が多いとまずいだろと、手鞆一つに纏められた荷物を担ぎ、いそいそと馬車を降りた。

「ここか、ヴィンドボナ軍部養成校……なんというか、みすぼらしいな……」

リユーベンはとある建物の前に立っていた。

名より実を取るゲルマニアならではと言うべきか、王都にある学舎、それも貴族の軍人の為にある割には、その建物は古びていた。

よく言って格式高い。

悪く言えばボロツちいとしか言えなかった。

リユーベンがそんなどうでもいい事を考えていると、声かけられた。

「貴族様、どういったご用でしょうか？」

おそらくこの養成校の衛兵だろう。正門の真ん前でボーッと突っ立っている彼を見かねて声をかけたらしかった。

「……今年からこの学校に通うこととなっている。済まないが、案内を頼めるかな？」

「そうでしたか。ハッ、承知いたしました、ご案内します。こちらへどうぞ」

リユーベンは案内されたままに、これから三年を過ごす学び舎に足を踏み入れたのであった。

ここで、彼は後の人生を大きく変える男と出会うことになる

時は正午、昼飯時を過ぎた春の陽気の麗らかな時間帯。養成校の校庭にはおよそ80名の新入生徒が集まっていた。現在、入学式真っ最中である。

「……で、あるからして。諸君等にはこの国の貴族として、国を守る軍人としての誇りを、胸に抱いて貰いたい次第である！では、儂からの挨拶はここまでとする。以降、本校の生徒として恥じぬよ

う精進せい。では、これにて解散!!」

「では明日より訓練に入る。これより教官の指示に従い、各自部屋へと向かいなさい。」

(・・・っは!ん?終わったか?)

どうやら校長殿の挨拶が終わったようだ。

何やら教官方が新入生達に指示を出していた。

リューベンは半分寝ていた為周りのざわつきにより目が覚めた。

軍人である教官を前にして大した胆力である。

彼は情弱なようで、案外そうでもなかった。

リューベンは教官の指示に従い部屋へと向かう。

今更ではあるがここは軍学校である。

トリステイン魔法学院のような煌びやかな一人部屋であるわけもなく、共同で使う二人部屋であった。

(ちよ、二人部屋とか!?!聞いてねえよ?!うわぁー、下調べぐらいしろよ俺のバカっ!どうか怖い奴じゃありませんように・・・)

大分改善されたとはいえ、彼の本質はヘタレである。軍人を目指すようなこわい人(自分もその一人であることは気にしない)は、

自分の未来のために懇意になることが必要でない限り、本来なら積極的に関わる人種ではなかった。

彼はビクつきながらも扉の前に立つ。中から気配がする。部屋割り

は既に教官から指示されていたため、どうやら同室の者は到着済みのようだった。

コンコン、ガチャリ

「・・・失礼する」

リユーベンは意を決して中に入る。
するとそこには

(熊が居る・・・)

その男を見てリユーベンが初めに思ったのはそれであった。

熊・・・いや、男はリユーベンに気付くとベッドから立ち上がりのしと彼に近づいていき、気さくな笑顔で語りかけてきた。
彼が腰掛けていたベッドは、けっして小さくないはずだが、彼と比べるといささか小さいように、リユーベンには見えてしまった。

「やあ、君が、同室のミスタ・ジェラードかな？僕はブライアン。ブライアン・ナム・ヨイツ・フォン・ブルックリンだ。宜しく!!」

何やら元気な熊だ

リューベンはカラカラと笑いながら挨拶する彼に、そんな失礼なことを思っていた。

「……ロード？ミスタ・ジエデラード？どうかしたかい？」

「ハッ！？あ、ああ、いや、なんでもない。申し遅れた、私は、リューベン・カイス・フォン・ジエデラード。既にお知りのようだが、どうぞ宜しく」

「そうか！これから三年同室だね！これも何かの縁だよ！名前で呼んでもいいかな？」

「あ、ああ、構わない。どうぞ、呼んでくれ」

「いやあ！そうかい？じゃありューベンと呼ばせて貰うよ！僕のこととはブライアンと呼んでくれ！！」

彼の高いテンションに、一目にしてリューベンは既に押されまくりだった。

（やけに、エクスクラメーションマークの多い人だな、でも、いい奴そうでよかった。フウ……）

内心で安堵のため息を付きながら、にこにここちらに期待するよな目を向ける彼に、リューベンは応えた

「では先ず、この荷物を置いてしまいたいんだ、ブライアン」

彼は未だ入り口で荷物片手に突っ立っていた

「へえ、君は13なのかい？僕より二つも年下だ！それで同じ学年とは、やるなあ！」

「いや、まあ、年齢は、あまり関係ないだろう？早い人ならば私より年下も居るだろうから」

「それでもさ！うーん、ジエテラード伯爵の御子息が入学するとは聞いていたが！まさか同室になるとはね！！」

「御子息とは、、、私はまだまだひよつ子だろう？そんなに噂が立つようなことは・・・」

「いやいや、君の兄上は有名だったからね！・・・彼は、残念なことになってしまったが・・・悪いね、こんな話をしてしまって」

「・・・いいや、構わないさ。確かに、兄上は素晴らしい人だった・・・」

今、リユーベンはブライアンと部屋で話していた。

それも恐るべき早さで馴染んでいた。

正に数年来の友人であるかの如く

ブライアンの気さくな性格は、少々内向的なリユーベンにとっても

付き合いやすいモノだったのが幸運だった。

「話は変わるんだか、明日からの軍事訓練はどう言うものだと思う？僕は父上に少しは訓練を受けていたんだが、国軍式の訓練と言うものはあまり想像できないなあ」

「・・・父君から受けていた訓練がどのようなものかは解らないが、そんなに変わるものではないだろう。初めのうちは基本の肉体訓練と、魔法訓練の繰り返しだと、思うんだが」

「やっぱり！基本は大切だよね！僕も、ホラ、体が大きいだろう？だから肉体訓練は得意なんだよ！少し楽しみだなあ！」

「・・・どうやらブライアンは少し変わり者であるようだ。普通の貴族は地味で辛い肉体訓練よりも、派手な魔法訓練をやりたがる。しかし軍人となればそんな甘いことも言ってられない。しかしブライアンにはそんな心配いらないうだ

ブライアン・ナム・ヨイツ・フォン・ブルツクリンはブルツクリン子爵家の三男である。

家督を継ぐ長男は既に成人であり内政に従事している。

そして次男は婿養子として多少目上の貴族の令嬢と結婚した。

彼は家においても仕方がないと、体を動かすのも好きであるため軍人となる道を選んだ。

熊のような、180センチ・80キロの体格、茶髪を短く後ろで束ねた髪型、まさにワイルドの体現者である。しかしその外見とは裏腹にその性格は気さくで明るい、人好きしそうな性格だった。

リューベンが彼でつくづく良かったと思った。

「おっと、もう夕暮れだよ！少し話し込みすぎてたみたいだなあ。よし、そろそろ夕食だよ！行こうか、リューベン！！」

「あ、ああ」

やはりテンションには押され気味ではあったが

リューベンは「この食事は美味しいのかな？」とウキウキと前を歩くブライアンの後ろを

(・・・軍学校なら、不味いんじゃないか、常考・・・?)

などと考えながら付いていった

しかしこのリューベン、ついて行ってばかりである。

こうしてリューベンの一日目の学校生活は終わっていった。

後に思えば、リューベンはこの時どれだけ自分の見通しが甘かったのか、翌日から身を以て知ることとなった・・・

一ヶ月後

「では残り10周だ！解ったか！！返事はどうしたあっ！！」

『『『サー、イエツサー!!』』』』

ザツ、ザツ、ザツ、ザツ……

リユーベンはひたすらに校庭を走っていた。

ひたすら。

(か、軽く死ぬる……!!)

ヴィンドボナ軍学校の訓練は予想以上だった。

この一ヶ月、特に新兵訓練の様に重点的に体づくりから始まったのである。

魔法訓練はさわりしかやっていない。

正に『魔法?なにそれおいしいの?』なレベルである。

(あ、と、、、2周……っ!!)

ウエンブラム氏より三年間しっかりと訓練の手解きは受けた。

毎日の鍛錬も欠かさなかった。

しかしそんな彼でもへ口へ口になるまで全身を酷使していた。

いや、そんな彼だからこそ着いていけると言っべきか。弱音を吐きながらも、彼は訓練をこなせていた。

他の軟弱な貴族の子息の中には既に倒れている者もいる。既に退学者もいる。

彼らは、何故2、3年生が合わせて80人程度しかいないのか、今更ながら理解した。

「・・・よおしっ！それまで！！これにて午前の訓練は終わりだ！二時間後に、ここに集合するように！では解散！！」

『『『イエツサー！！』』』

「よおしっ！疲れたねえリユーベン！それじゃあ昼食にいこうか！」

「ハアツ、ハアツ、、あぁ、そうだな・・・」

リユーベンは荒い息を整えながら元気に話しかけてくるブライアンに、死にそうな声で返事をした。

(・・・この熊は化け物か・・・)

それでもこの一ヶ月でかなり慣れてきたのである。

しかしブライアンは訓練を真面目に、人一倍力一杯こなした上で、この元気をを見せてくる。

これも一つの才能か、と、リユーベンは訓練三日目ぐらいに才能の無さを憐んだものだった。

(あぁ、アニエスとお茶をしていた一ヶ月前が遠い日の様だよ、兄さん・・・)

リユーベンはブライアンに引きずられながら、同じ王都で修行を積んでいるであろう少女を思いながら、今は亡き兄に思いを馳せた。

「しかし今日は一段と厳しかったね！そろそろ体力づくりも終わりかな？楽しみだね！ハハハハ！」

(やっぱり、化け物だよ、コイツ・・・)

カラカラと笑う親友(気づいたら「僕たち親友じゃあないか！リユーベン！！」と言われていた)を横目に、とりあえず空を見上げて脱力感に浸っていたリユーベンであった。

リユーベンとブライアンが食事を終え、二時間の刻限を守るために校庭に向かおうと本棟の廊下を歩いていた。

するとリユーベンの耳に周囲の、普段よりも3レベル騒々しい生徒達の声が入ってくる。

「ん？騒がしいな。何かあるんだろうか」

「え？知らないのかい、リユーベン？今日はゲストがお越しになるんだよ！わざわざ軍学校の視察なんて、さすがは王族だね！」

「・・・王族？」

初耳だった。

別に噂には興味がないとか一匹狼を気取っているわけじゃない。リユーベンは人並みに付き合いはしていた方である。入学前の不安っぷりが嘘であるような馴染み様である。

案外リユーベンは軍学校で快適なスクールライフを送っていた。

話を戻そう。

その友人達の中でも、視察の話をしてきた者は居なかったとリユーベンは記憶している。

しかし

「あ、もしかあの話か？」

「何がだい？」

「いや、確か、私の聞いた話では、『近々、世間で噂の王家縁の放蕩貴族が学校の視察に来る』と、言っていた」

「まさにそれじゃないか、リユーベン。それに、そんな失礼なこと言っでいいのかい？君は、時々大胆だよな？」

ブライアンは物忘れが激しく、話の内容に少し危険な物言いが含まれている親友を、少々不安に思った。

そんな親友の内心をいざ知らず、リユーベンはブライアンに問いかけた。

「王族が視察とは、わざわざご苦労なことだな。しかし、何でまたこの時期に？」

「さあね？普通なら卒業する者の中で優秀な者がいないかとか、国軍のレベルの基準を測るためとか、理由があるもんだと思うよ？」

「・・・それは、まあ、そうだろうな。ただの視察と言っわけか。まあ、1年である私たちには関係のない話だ」

「　　そうでもないぞ。貴様が、ジエデラードの弟だな？」

「ウン？何だ、ブライアン？」

「・・・リユーベン、僕じゃない、よ。後ろだ・・・」

リユーベンは声のテンションが一気に下がった親友を訝しく思いながら、示された方向に振り向いた。

そこには一人の男が居た。

くすんだ赤い髪。

大柄な、日に焼けたゲルマニア人特有の褐色の肌。

そして、その若々しい容姿に不釣り合いな程に、ギラギラと野心に満ちた相貌を携えた、

覇気に満ちた美丈夫がリユーベンを見据えていた。

（　　全然、放蕩貴族じゃないじゃんか・・・信頼性の無さでは流石だよ、コーネル君・・・）

リユーベンは、思わず噂を覚えてくれた友人の一人に心中で愚痴をこぼした。

「貴様が、ジエデラードの弟だな、と、聞いているんだ、小僧。」

「アルブレヒト様！こちらにおられましたか！御出迎えの者より先に行かれたと聞き探しましたぞ・・・と？どうかございませんか？」

「大したことではない、少し、気になったので、な。おい、返事をしたらどうだ、小僧。」

焦りながら美丈夫の後ろから走ってきた、校長と彼の会話を聞く限り、
どうやらこの美丈夫　青年と呼べる男はアルブレヒトと言つらしい。

（この人が、後の『ゲルマニアのロリコン王』か・・・主にアンア
ンを手込め的な意味で・・・）

あまりな事態に、リューベンはまだもや失礼なことを考えながら、
無表情でフリーズしていた。

これがリューベンの、原作キャラとの三人目の出会いであった

続く

第七話 驚愕遭遇にて（後書き）

アルブレヒトは現時点ではまだ王族の一人でしかないわけで・・・
かなり自由な性格になってます

第八話 豪胆剛毅にて（前書き）

連投してみました

まあ、七話とは前後編みたいな感じですが

第八話 豪胆剛毅にて

帝立ヴィンドボナ軍人養成校の本棟、廊下では、普段ではあり得ない冷え冷えとした空気が漂っていた。

「ほう、貴様、この我を無視するとはいい度胸だな？」

「……えっ？」

「……いい加減にせんと流石に後がないぞ、小僧……」

第八話 豪胆剛毅にて

（どうしてこうなった……）

リユーベンは自分の運の悪さを呪った。
原作開始時までに力を付け、何としてもガリア戦役を乗り切るつもりだったのに……

「そういえば、貴様の兄もそういう所があったな。兄弟とは似るものだとは、よく言ったものだ」

目の前に座りこちらを見定めるように視線を寄越す男前に捕まってしまうた。

リユーベンは惚けていて知らないが、彼の親友は、アルブレヒトに連れ去られていくリユーベンに巻き込まれないよう、そつなく撤退していた。

引き際を見誤らない観察眼。

ブライアンも間違いなくゲルマニアの貴族だった。

「・・・兄は、亡くなるまで殆どを領外で軍人として過ごしておられました。私が兄と共にいた時間は、ほんの数年に過ぎませんでしたから・・・」

「ふむ、そうか。しかし、惜しい男を亡くしたものだ・・・」

・・・何故、アルブレヒトとリユーベンが和やか(?)に会話しているのだろうか？

リユーベン自身にも訳が分からなかった。

気がついたら来賓室でアルブレヒト殿下とサシで語り合っていた。

何を言っているかわからねーと思うg(ry

・・・普通なら有り得ないと一蹴できるシチュエーションだ。

帝位継承権を持つ皇族と、伯爵とはいえ一介の貴族、それも軍学生

などが親しげに会話するなど異例だった。

「貴様は、クレストと同じ血が流れているとは思えんな。奴の方が、数段気概に満ちていたぞ？」

(・・・まあ、承知のことなんだが、失礼な人だな・・・)

初対面の相手を熊やロリコンと称した自分のことは棚に上げ、リユーベンは内心でそう漏らしていた。

今更だが、クレストとはリユーベンの兄の名である。

クレスト・カイン・フォン・ジエデラード。

13歳にして風のトライアングルに開花。

軍人として国軍に入りながら、端正な顔立ちの美男子。持ち前の人柄で多くの者から人望と賞賛を受けていたが、23歳の若さにして戦場に倒れた、悲劇の男である。

リユーベンは兄が優秀なことぐらい既に心底理解していた。

しかし、そんな兄が、この皇族の一人と知己だったと言うことには驚きを隠せなかった。

「・・・兄は、殿下とお知り合いだったのですね？」

「ウン？ああ、そうだ。奴にはアイツが軍学校に在学していたときに始めて出会ってな。生意気な餓鬼が居たものだ、一つからかってやったのだ」

「それはまた・・・」

リユーベンはこのアグレッシブな皇族に対し呆れ半分脱力感半分な返事をした。

皇族が軍学校の一生徒をからかう。普通ならあり得ない。だが、あり得ない尽くしの型破りなこの男なら、やるだろうとリユーベンは思った。

出会って間もないが、リユーベンは早くもこの男の性格の方向性の一端を掴みつつあった。

(兄さんも、苦勞していたんだなあ・・・)

普通の貴族は皇族なんかには声を掛けられ、あまつさえからかわれたりしようものならトラウマモノだ。だが、兄は持ち前の性格と機転でこの皇族に気に入られる立ち回りを見せたようだ。

(つくづくすごい人だったんだな)

リユーベンはそう思わざるを得なかった。

反面、理由は聞いていないが、この男前な皇族が兄に声を掛けた際も、今回のような突発的な何かに違いないと、直感的に解りもしたが。

「クレストと話すことは多くはなかったが、奴と話すといつも弟の話題を口にしてな。」

「えっ？」

「私の弟はすごい子だとか、あの子は私を簡単に越えるだろうとか、この我を前にしてだぞ？つくづく変わり者であったわ」

アンタの方が変わり者だろう、と、普段のリューベンなら内心で密かに突っ込みを入れていただろう。

しかし、今のリューベンはそれ以外のことに思考を回していた。

（兄さんが・・・俺の話をも？）

兄との思いでは無いわけではない。

しかし、正直言っても無いに等しいとも言える。

幼い頃は時々遊んでもらっていた。

しかし、兄が十代後半になれば、軍内での活動もあるらしく、年に二、三回帰ってくるのが関の山だった。最期の年なんかは一回しか会っていない。

兄からしたら自分は大きくて大きな存在ではなかったのだろうと。

その程度の関係だった。

そうだと思っていた。

しかし、兄にとっては違った。

（兄さん・・・）

兄が自分のことをしっかりと見ていてくれた。

その上、自分を越える、とまで評価してくれていたことに嬉しさがこみ上げてきた。

リューベンは無自覚のうちに、優秀な兄に対する憧れがあったのだな、と、この時理解した。

少ししんみりとした時、
この男が切り出した

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「は？」

「クレストは死んだ。過ぎたことは仕様のないことだ。今はそんなことはどうでもいい」

リューベンは又しても脱力感に襲われた。

どうやらこの男前にとって、今、兄のことはどうでもいいらしい。

しかし、決して兄がどうでもいい訳ではなく、これから何をするか、という前向きな方向に目を向けているだけだというのが何となく解った。

(原作で言うほど悪い人じゃないんじゃないか?)

そんなことすら思ってしまった。

しかし、近い内に、彼は又しても自分の思惑の甘さを痛感することとなる。

「・・・あの、私を呼んだのは、兄の話をするためでしたか？」

リユーベンはとりあえず聞いてみた。

アルブレヒトはよくぞ聞いたと言わんばかりに、獰猛な笑みを浮かべた。

リユーベンはその笑みを見て、嫌な予感しかしなかった。

こういう場合の悪い予感は、酷く当たる。と、誰かが言っていたことを思い出した。

「それもある。が。実際は貴様を見に来たと言うところだ」

「私、をですか・・・？」

「あの『旋風のクレスト』が推した男にしてその弟だ。それが此度軍学校に入ったと聞いた。ならば、見に来てやるのがクレストへの手向けというモノだろう？」

ニヤリと、唇を歪めるようにして嗤いながら、アルブレヒトは言った。

(まったく手向けとか思ってたねーだろ・・・)

リユーベンはしれつと言いつ切る彼にまたしても呆れながら、話を続ける。

「私などでは、到底兄上には及びませぬ」

「ああ、正直、期待はずれも甚だしいな。気概も、立ち振る舞いも兄に遙かに劣る。見る限り戦闘能力も中の下といったところだろう」

(ぐっ・・・即答・・・)

アルブレヒトの返答に、思わず言葉が詰まるリユーベン。

「だが・・・」

そんなリユーベンを無視してアルブレヒトは言葉を続けた。

「貴様の『瞳』は、確かに当たりだったようだ」

(瞳?)

「・・・クレストはこうも言っていた。『あの子は、何より「瞳」が違う。私にもそこが見えません』とな。正直、唯の兄馬鹿の類だと相手にしていなかったが・・・実物を見てみるものだな」

ニイ、と、先ほどの『嫌な笑み』を浮かべながらリユーベンに語るアルブレヒト。

リユーベンからすれば『瞳が違う』などと言われてもピンとこなかった。

しかし、前世も合わせると30を越えた精神からか、彼の眼は、解るモノにとっては解る程に『異端』だった。

「一介の軍学生風情であれば、その様な瞳はしておるまい。貴様、何か大それた計画・・・野心でも抱いているな？」

リユーベンは思わずドキリとした。

野心とは言わないが、確かに未来に対するそれなりの計画は練っていたからだ。しかし、『瞳』なんてものでそれが見透かされるとは思っていなかった。

いずれ国を率いる男とはこういうモノなのかと、改めて感嘆した。

しかし、後の皇帝に『野心を抱いている不穏な輩』として目を付けられたのではないかとリユーベンは思い至り、背筋に寒気が走った。

(それだけは、マズいつての・・・！)

「・・・ならば、どうなさるおつもりですか？」

「アン？」

「私が大望を抱いているとして、それを知られた今、私をどうなさるのでしょうか？少し、興味が湧きまして」

リユーベンは一世一代で賭に出た。アルブレヒトに対して強気な態度を取ったのである。これは下手をすると不敬罪で討たれても不思議ではない暴挙だ。実際に表面は取り繕っているが、内心では冷や汗ダラダラ、今すぐ逃げ出したい気分であった。

しかし、彼は直感的にこうするべきだ、こうしなければいけないと思っただ。

彼は媚びへつらうだけの貴族は嫌いそうだ。

それに兄が媚びへつらうって取り入った訳がない、と確信していた。

なぜだか解らないが、アルブレヒトに関わることには異常なまでに直感が冴え渡る、と、リユーベンは後に感じた。

そんな彼の態度にアルブレヒトは、眼を細め、睨みつけるように押し黙った。

リユーベンが戦々恐々とする中、沈黙は続く。

「そう緊張するな」

不意に、アルブレヒトはそうこぼした。

それにより緊張感と場の圧迫感は一時的に緩みを見せる。

「中々どうして、豪胆な男だったようだ。我に勝ち気に出るとはな。

ククク、どうする気も、無い。例え、貴様が帝位篡奪を目論んでいようとも、な」

アルブレヒトは何でもないようにすごいことを言った。
リューベンはその言にヒヤリとしながらも、場を乗り切ったことに安堵した。

「恐れ多きお言葉で御座います・・・」

だが、まだアルブレヒトの攻撃は終わっていないかった。

「帝位は我が奪い取るからな、立ちはだかるなら潰すまでよ」

「・・・!!」

アルブレヒトの現在の立ち位置は『帝位継承権を持つ者の中の一人』である。

『帝位継承者』であるわけではなく、アルブレヒトよりも強い継承権を持つ者も居た。
そんな中でこう言い切ったのである。

リューベンはまたもやすごいことを言ったアルブレヒトに言葉を飲み込む。

「・・・私などに、話してしまわれてよろしいのですか？」

「貴様は、兄には劣るが愚鈍ではない・・・そうだろうか？そうでなければ貴様は今頃外の奴らと同じように校庭を走り回っているだろうからな。ならば、意味は分かるな？」

「八八八・・・」

リューベンはこの自信家のお眼鏡に適ってしまつた自分を呪つた。今日の彼はつくづくツいていないようだ。

アルブレヒトはつまり、自分が皇帝となるのに助力、いや、彼は一人でやり遂げそうだから帝位即位後の恭順か。そう持ちかけてきたのだ。

周到なことに父ではなく、次期党首であるが今はまだ若造にすぎないこの自分に。

ジエテラード家は軍部での有力家系である。

確かに、引き入れるには適した家柄だ。

しかもそれらしい口実まで作つて、不自然にならないように。

確かに皇族が不用意に出歩くななど不自然極まりないが、彼の場合は普段からの『放蕩息子』というレッテルによりクリアされる。

こうして時には部下を使い、時には自ら出向き勢力を強めているのだろう。

リューベンはその強かさに舌を巻いた。

まるで『尾張の大うつけ』と呼ばれた織田信長の様だと思つた。

侮つたが最期、骨まで喰らい尽くされる。

そんな言葉が浮かんだ。

「・・・因みに、兄に、その話はされましたか？」

「ああ、したとも。無論、快き我が同士となってくれたな、クレストは」

「やはり・・・」

兄の話をやたらすると思ったがこのためだったか。

兄が一度了承したと言うことは、一度ジェラードが彼に着いたということだ。

しかし兄は死んだ。

ならば次期ジェラードの当主を引き入れる必要がある。

確実に味方にするにはどうするか？

簡単である。

次期当主、つまりリユーベンにこの事を話せばいいのだ。

賛成すれば良し。

反対しようものなら、彼の統治後、ジェラードは潰されるだけだろつ。

引き入れられないのに内情を知る者など邪魔なだけだ。

彼なら容赦なく実行するだろう。なんせ未来で自らの親族を処刑・幽閉する梟雄だ。

彼の帝位即位が失敗に終わろうが、彼と関わった時点で、他の皇族から彼の助力者としての責を問われるだろう。

つまり、初めっからリューベンには逃げ道がなかったのである。

リューベンは先程彼に下した評価が完全に早まったものだと思った。

しかし、不利な話ばかりではない。

次期ゲルマニア皇帝の覚えがめでたければ、そんな大それた不祥事を起こさない限り親皇帝派として国内での立場は安定するだろう。

これは、リューベンの未来計画の遂行にも少なからずプラスになる・
・はずだ。

そう割り切ることにした。

「・・・有事の際は、非力ながら、助太刀させて頂きます・・・」

「ほう？そうか。有り難いな！コレで我らは一蓮托生だ！！しかし、クレストもよい弟を持ったものだ！

ククク、クツクツクツ、クツハハハハハ！！」

『嫌な笑み』を全開で顔に張り付けながら完全に勝者の顔で、悪の三段啖いをかますアルブレヒト。

その様はまるで水を得た魚のように生き活きしていた。

「ハツ、ハハハ、ハツハツハツハハツ！」

リューベンも、もう嗤うしかなかった。

「ハツハツハツハツハツ、ハアツハツハツハツハ！」

来賓室から漏れ出てくる狂ったような笑い声。それを聞いた、外で待機していた衛兵が何事かと思い、入室して確かめるべきか否か、密かに葛藤していた。
しかし、そんなことはお構いなしの2人だった。

急に嗤いを止め、アルブレヒトは口を開いた。

「貴様、ここを出た後はどうする気だ？」

「……国軍の方にてこの身で国に尽くそうかと思っておりますが・
」

「それはそうだろうな。ならば、貴様さつさと出世しろよ？我にっ
いて来る者が雑兵というのも締まらんだらう」

どうやらアルブレヒトはリューベンをかなり気に入ってしまったよ
うだ。

しかし、リューベンはふと疑問に思った。

「あの、殿下？」

「アン？何だ？」

「私にお話頂いた御真意は理解いたしました。しかし、失礼ですが、私は一介の学生に過ぎません・・・このような若輩者に、ここまで漏らしてしまってよかったですか？」

リューベンの問いにアルブレヒトは、ふと考える顔をした。

そしておもむろに腕を組みながら、リューベンの眼を見据え、こう言った。

「そうだな。確かに、慎重を期する必要がある話だ。だが、な。貴様と話して、『コイツは裏切らない』と、何故かそう思った。強いて言うならば、直感だ」

「直感で、ございますか・・・」

「それにな、貴様がどんな大望を抱いていようが、それすらも飼い慣らせないようでは、我の帝としての器もしれると言うものだ」

リューベンは、ギラギラとした彼の瞳が、一段と光を増した様な気がした。

（なんとというか・・・これが、指導者つてのか・・・剛毅なお人だねえ・・・）

リューベンは、最後に、やはり脱力感を感じ、ソファアに身を任せただ。

兄さん、貴方は、思ったよりも腹黒かったんですね

アニエス。俺は貴族社会の裏側を垣間見ちゃったよ

心中でお決まりとなった2人に語りかけながら、
リユーベンは目の前の男前の話を聞き流していた。

これが、リユーベンが長きに渡って仕えることになる君主との、最初の邂逅だった。

「リユーベン！もう話は終わったのかい！？一体何の話をしていたん……大丈夫かい？」

ブライアンは、解放されたらしく自室へと戻ってきた親友に声を掛けた。

その親友は、どこか疲れたような、呆けたような言葉を返した。

「ンア？……ブライアンか……」

「そつだよって、本当にどうしたんだい？」

「いや、な。何の備えもなしに嵐に遭遇してしまったかのようだよ。」

「・・・ああ、殿下だね。それで、何で君が呼ばれたんだい？みんな噂していて、鍛錬に身が入ってないと教官に怒鳴られていたよ。」

「ああ、兄上の繋がりで、少しな・・・。」

リューベンは、流石にこの熊のような親友が悪い人間ではないとはいえ、

明かしてしまつて良いことと悪いことの区別は付いたので、当たり前障り無い回答を答えておいた。

「へえ！君の兄上は皇族とも知り合いだったのか！つくづくすごいお人だったんだねえ！」

「・・・私も、そう思うよ、つくづくな。」

「で、アルブレヒト殿下は？どうだったんだい？噂に違わぬ放蕩貴族かい？」

「・・・君も大概、失礼な奴だったのか？」

「今は自室だ。誰も聞いちゃい無しさ。ようは、時と場所が肝心なのさ。」

ブライアンはカラカラと笑いながら言い切った。

先程貴族の腹黒い部分に触れてしまったリューベンは、この抜けていそうな親友ですらこうなのかと、精神的疲労が貯まってきていた。

「で！どうだったんだい？」

「あの御方は・・・なんというか、剛毅な御方だったよ。放蕩貴族などと、侮ってでは首を取られる様な、な・・・」

「やっぱりそうかい？」

「ん？」

「だってそうじゃないか？本当に放蕩貴族なら、皇族である自分を悪く言うような輩を放っておくはずはないからね。

小物ほどプライドだけは高いというのは、昔からある意味ではお約束だからね」

リューベンは、解っていたことだが親友が体力だけの人間でないのだと、改めて思った。

「ブライアン・・・体力だけではなかったんだな」

「そういうことは思っても言わないものだよ？僕は気にしないけどね？

しかし、やはり君の方が失礼だろう？」

いっしょにリューベンにあってとてつもなく疲れた一日は終わった。

アルブレヒト・フォン・ゲルマニア。

この時点で25歳の若者であり、後のゲルマニア皇帝となる男であった。

続く

第八話 豪胆剛毅にて（後書き）

アルブレヒト（25）・・・原作開始時には45のナイスミドルで
す

第九話 雨天敢行にて（前編）（前書き）

オリキャラ何人か出てきます

また、考察（？）が無駄に長かったりしますがひらにご容赦を

第九話 雨天敢行にて（前編）

帝立ヴィンドボナ軍学校の一室にて、厳めしい教官の声が響いていた。

「……と言うわけだ。今日はここまでだ！明日までにこの場合の対処案を思索して来るように。では解散！」

『『『ありがとうございましてっ！』『』』

「ZZZ……ンア？ああ……ありがとうございまして……」

109

絶賛一名惰眠を貪っていた。

第九話 雨天敢行にて（前編）

「リューベン、君は何で寝てるんだい？正直教官殿にどやされるん

じゃないかと冷や冷やしたよ！」

「ああ、そう言ってくれるなブライアン。私としては気づかれないうようにやっているつもりだが……」

「確かに、君の居眠りは姿勢を保ったまま、ペンも持ったままだからね。

逆にそこまでやると感心するよ、僕は」

アルブレヒトの襲撃から一年。

リューベン達は二年生へと駒を進めていた。

先ほどまでは一年生の半ばから始まった、軍略の授業の時間だった。

「何でそんなに眠そうなんだい？昨日、君は僕より早く寝てたじゃないか？」

確かにブライアンの言っており、リューベンは昨晚の消灯時間きっちり床に就いていた筈だった。

リューベンは眠たげに顔をしかめながら答えた。

「いや、な。少し、考え事があったもので、寝付けなかったんだ」

「へえ……体は大切にされた方がいいよ？何たって明日は……」

考え事。

それは主に魔法の事についてだった。

リユーベンは現在14歳。

水のラインメイジである。彼の予定では、入学までにはトライアングルにしまっただが、世の中はそこまで彼に甘くはなかった。

(やはり水気のない戦場では脆弱になる、よなあ・・・その場合は、後方支援しかないか・・・)

ここ半年彼を悩ませているのは『水メイジの攻勢の弱さ』である。

はじめの内は二次創作などによくある、チートレベルのオリジナル魔法を編みだそうと奮起していた。

しかし彼の魔法の才能は、精神力が人より優れている程度の、秀才レベルでしかなかった。

軍学校では魔法の強さではなく、状況に応じた使い分けや、取り回しなど実践的なことを教える傾向にある。

しかしやはり最後には、強力な魔法を修得できるか、に焦点を当てている。

これは魔法ありきの貴族社会では必然とも言えた。

この中でリユーベンは『少なく、弱い手数の中から、如何に戦闘を有利に進められるか』を念頭に置いてきた。

三年間のウェンブラムの特訓においても、魔法持続時間の訓練や、

基本技の創意工夫などを重点的に積んできたのである。

そして彼が見いだしたスタイルはこうである。

・高速詠唱による先手必殺

・単発の威力よりも、安定 性の重視

・一対多をこなせる極力無 駄を無くした省エネ術式

・・・まんまタバサのそれと言える。

しかし、リューベンとはタバサのそれと違い、機動性よりも固定砲台としての速射性を求めた。

これはタバサの「氷」の様に、殺傷能力の高くない「水」では動き回ったところで、むしろ狙いが定まらず弱体化するだろうと考えたからだ。

彼の才能では動き回りながら戦うのが無理だったからだとも言える。

このスタイルを定めたとき、リューベンには一つ思いつく法則があった。

『水魔法は、雨が降れば絶対不可侵となる』

つまり水源を確保すれば強くなるということだ。

ゲルマニアは湿度が低いため、陸戦では戦いづらい。

では、空はどうか？

空ならば雲という水分の塊が浮いているわけである。雨が降ればさらに問題はなくなる。

アレ？空で戦うべきじゃね？

短絡的にもリユーベンはそう考えてしまったのである。

彼は、前世で文系だった。科学と物理は、苦手だった……

閑話休題

「……！！……ユーベン？聞いてるかい？」

「（今は、考えが煮詰まっちゃってるな……ああ！もう！後にしよう！！）」

「……ン？済まない、なんだって？」

「だから、明日は模擬戦だよ！そんな調子で大丈夫なのかい？」

「ああ、大丈夫だ。ありがとう……（模擬戦、ね。あの決闘もどきか）」

この時代、この学校の模擬戦は原作時のトリスティンなどのそれと違い、実践指向の強いモノである。

だが貴族である以上、ある程度の形式ばったものとなっている。

ウェンブラムの苛烈なシゴキを受けたことのあるリューベンには、この学校で甘いところはそれだけだと感じていた。

お忘れだろうが、ウェンブラム氏は若かりし頃に戦場を走り回った、超実践型メイジである。

彼の教えの中には時折命のやりとりにまで発展する、危険なものもあった。

(アニエス、今頃何してるだろう・・・？大丈夫かな？)

リューベンは三ヶ月前の休みを最後に会っていない、今は幼いながらも鍛えられているであろう少女にふと思いを馳せ、近頃癖になりつつあるように空を見上げた。

「・・・(一雨、来そうだな)」

見上げたヴィンドボナの空には、薄暗い雲が立ちこめていた。

「リューベン？おい、リューベン？おい・・・？」

その隣では、この親友は色んな意味で大丈夫じゃないんじゃないかと、

ブライアンはちょっと心配になっていた。

「（ふう、スッキリしたぜ！・・・眠い・・・）」

リユーベンは寮の廊下を歩いていた。

消灯時間を一時間ほど過ぎた辺りであり、部屋を出る際にみた限りでは相部屋の熊さんは既に夢の中へと旅立っていた。

「・・・・・・・・！！！」

「・・・・・・・・!?」

（ウン？なんだ？）

部屋へと戻ろうとしたリユーベンの耳に、こんな時間にはそぐわない音が聞こえてきた。

（これは、アレか・・・？）

その音からおおよその状況を把握したリユーベンは、嫌な予感しかしなかった。

しかし、部屋に戻るにはこの廊下しかないわけで、仕方なくリユーベンは歩を進めた。

そして彼の目に何人かの人影が映った。

「・・・・・・・・って言ってるんだ！フンツ、貧乏貴族風情が！」

「あまり調子に乗らないことだよ？よく解っただろう？」

「ッ……！！！」

（やっぱり……イジメか。どこも変わんねえもんだな）

軍人となるための学校とはいえ、思春期の少年達が集まっていることには変わらず、仲の良いグループなどもあり、優秀な者に嫉妬や反感を抱くことも勿論ある。

つまりはこういうこと（イジメ）も有るということだ。

（関わり合いには、ならんほうがいいか……）

リューベンは事なかれ主義者だった。

しかし、この世界はやはり彼に甘くなかった。

「ほら、何とか言ってみたら……まずい！誰か来た！」

「！？何？………ホウ、ジェデラードか」

（……気づかれとる）

足音に反応したのだろう。三人の男達は、囲んでいる一年生と思われる生徒からこちらに目を向けてきた。

相手は三人。

主犯格だろう、金の長髪に嫌みな笑みを浮かべた男。それに、その取り巻きと思われるゴリラ二匹である。

(マル オイかつー！)

思わずそんなツツコミが口をつきそうになったが、我慢した。

厄介なことになった。

見つかってしまった以上逃げるのは無理だ。

先程振り向いた主犯格の男を知っているリューベンはそう思った。

仕方がない

そう思い話しかけた。

「……これは、ミスタ・グルフUNK。こんな夜中に奇遇なことだ」

「フン……それはこちらのセリフだよジェテラード。誰かと思えば、こんな時間にこそこそ出歩くなんて、実に君らしいねエ？」

(……相変わらずよく言っなあ、コイツ)

主犯格の男　　グルフUNKは、リューベンと因縁がある。

いや、リューベンには無い。グルフUNKがやたらと突っかかってくるのである。

ジェテラード家と同じ、そして派閥で対立しているゲルマニア軍の武門の家系・グルフUNK伯爵家。

その四男である彼は父が対立しているジェドラー家の次男であり、グルフ Junk よりも二歳年下ながら同学年であるリユーベンにやたらと敵対心を燃やしているのだ。

リユーベンとしては一年生の時も、二年になつてからも地味に過ごしてきたつもりだ。

唯一目立ってしまったのはアルブレヒト襲撃事件だけだと思つてゐる。

どこぞのオリ主の様に悪目立ちせず過ごしていきたかつた。

そのため、波風立たせるグルフ Junk の存在は迷惑以外のなにものでもなかつた。

「・・・何、大したことはない。所用だ。・・・だが、そちらはそう言つわけではないようだな・・・？」

「・・・！！フン、君には関係のないことだ。あまり余計なことに顔を突つ込まない方賢明ではないかな？軍人たるもの、それぐらい判断したまえよ」

(一々癩に障る野郎だ・・・死ぬ！三回ぐらい死ぬ！)

リユーベンは心中で悪態をついた。

決して口に出しはしない。出せば更に突っかかってくるのが目に見えていた。

・・・別にいじめっ子を怖がつているわけではない。もう一度言つ、彼は事なかれ主義者なのだ。

リユーベンが押し黙っていると、グルフUNKは満足したのかこちらを見下した様に鼻を鳴らした。

「ハッ！だんまりかい？

まったく、口ほどにもないとはこのことだねエ！・・・ま、今日はこれぐらいにしておこう。おっと、解っているだろうがこのことは黙っていたまえよ。いくら君が鈍いとはいえ、口を割ったりしたら・・・解るだろう？」

一方的にまくし立て、ニタリ、と、嫌らしい笑みを浮かべながらグルフUNKは踵を返した。
その後ろをそそくさと取り巻きの二人が着いていった。

（完全に小物だろ、アイツ・・・）

グルフUNKは、俗に言う「小物」と呼べる人種だった。
魔法の腕はトライアングルである癖に、人格とか、人間性とかいったものが完全に典型的な小物のそれだった。

その行動パターンのベタさに呆れ、リユーベンはしばらくその背中を見送っていた　　すると

「あ・・・有難う御座いました」

ふと話しかけられ、リユーベンは我に返った。

そういえばこの場にはもう一人　　いじめられていた一年生が居たことを思い出した。

「ン、ああ。大丈夫だったか？」

「ハイ・・・ジエデラード殿、助けさせていただき感謝いたします」

「いや、気にするな。通りがかっただけだ。と、君は？」

リユーベンは、このやけに堅苦しい話し方をする後輩の顔を知らなかった。

先程まで殴る蹴るされていたとは思えないほど、ピシリと立った少年だった。

今時の貴族には珍しく短く揃えられた茶髪で、年下なのに精悍と言える、中性的な顔立ちをしている。

「ハイ！自分はヒューラー・フォン・アルバートンであります！」

（アルバートン？・・・聞いたことがあるような？）

リユーベンはその名に聞き覚えがあった。

『今年の一年生に弱冠13歳にしてトライアングルの奴がいる』

今年のはじめに噂好きのコーネル君が触れ回っていたことを思い出した。

このイジメも大方グルフUNK達がその才能に嫉妬したのだろうと、リユーベンはなんとなく察した。

「君が噂の俊英か。名は聞いているよ。知っていたようだが、私は

リューベン・カイス・フォン・ジエラードだ。・・・しかし、何故あんな奴らに良いようにさせていた？君ならあの程度何とかなっただろう」

「いえ！先輩方に逆らうなど考えられません！」

（・・・これはまた体育会系だな）

キツパリと言い切った後輩に、リューベンは妙に感心した。

前世でも体育会系では『先輩は神様』といえる空気があったからだ。リューベンには縁のない世界ではあったが。

「それはまた・・・多少のことならまだしも、明らかに理不尽なもの逆らうのもやむを得ないと思うが。まあ、いい。災難だったな。では、私はこれで」

「ハイ！本当に有難う御座いました！」

「ン・・・」

リューベンはピシリと礼を続けるヒューラーに背を向け、部屋へ向かい歩き出した。

リューベンとしては、本当に成り行きなのにキラキラトした目で見られ、多少居たたまれなくなったのだった。

ヒューラーはリューベンの背が見えなくなるまで礼を続けていた。

ガチャリ

パタン

「ふう・・・とんだ足留め食ったな」

部屋に戻ったリューベンはずたため息をついていた。

今までの学生生活で辛うじてかわしてきた厄介事を、さっきの件で引き寄せてしまった気がした。

「イベント無しで、とは、いけないか・・・面倒なことにならんと
いーけどなあ・・・」

そう呟きながらも、無理だろうなと内心で諦めかけていた。

悩みの種が一つ増えたが、考えても埒が開かないと思い、リューベンは考えるのを止めた。

明日の朝も早く、リューベンは眠気を覚えたのでベッドにもそもそと入り込んだ。

(・・・明日は、模擬戦だったか・・・寝よう・・・)

ふと、夕方から降り出した、雨の音が耳についた。

「それでは、模擬戦の組み合わせを決める！とは言っても今回はお前達で自由に組め

！実力差のある者と組むも良し！

拮抗している者と組んでも良し！

これまでの訓練の成果を存分に発揮しろ！」

『『『サー、イエッサー！！』』』

翌日、午前の座学を済ませたりューベン達は、午後から練兵場にて模擬戦を行っていた。

普段は教官が決めた相手とやるわけだが、今回に限ってはごつやら自由に相手を選んで良いようだ。

二年生が始まって1ヶ月と少し。

教官達は、年度開けのカリキュラムから少しずつ変化をさせていく腹積もりらしい。

周りでは優秀だと言われる者に果敢に挑む者。

同じレベルの奴を見つけようと首をキョロキョロさせている者など、既に皆やる気のようにだった。

最近はず学中心だったので、久し振りの実戦訓練に気合いが入っているようだった。

そんな中、リューベンは特に熱意を見せるでもなく相手を誰にしよるか考えていた。

(・・・自由か。ブライアン辺りとやっつくとするかな。でもアイツ元氣すぎるからな・・・無駄に疲れるんだよ・・・)

「おや？ジェラード。君はまだ相手が決まっていらないのかい？ならば僕が一つ稽古を付けてあげるとしようじゃないか」

声を掛けられ、誰の声か解ってしまい嫌そうにしながら、しかし表情には出さず、リユーベンは振り向いた。

「・・・ミスタ・グルフUNK・・・」

「トライアングルであるこの僕が胸を貸してやるつと言った。感謝するといいよ！まさかそれとも、尻尾を巻いて逃げ出すか、ジェラード？」

気付けば取り巻きの二人に後ろに回り込まれていた。どうやら逃がしてもらえないようだ。

グルフUNKが突っかかってくるのは度々あることだ。

しかし、このタイミングで話しかけてきたのは確実に昨日の一件が影響しているだろう。

今度はイジメの標的にでもするつもりだろうか。よくよく考えればこの一年でそういう対象にされてもおかしくなかった。

今までの嫌みを言われるだけだったの日々はまだ平和だったんだなと、リユーベンは思った。

(やっぱ面倒なことになったか・・・このクソガキが!!)

とりあえず心中で罵倒しておいた。

やはり口にも顔にも出さない。

何度も言うが、基本的に彼は事なかれ主義者である。

リユーベンは心の中で深呼吸をし、一旦気を落ち着けた。

「・・・それこそまさかだ。お相手願おう、ミスタ・グルフユンク」

その返答にグルフユンクは我が意を得たとばかりにニヤツいた。

つくづく小物臭い奴だと、リユーベンは思った。

グルフユンクは練兵場の中央に向かって歩き出しながらルールを確認してきた。

「 よろしい。そうでなくては。ならば、早速始めようじゃあないか
！相手に参ったと言わせれば勝利だよ。もう準備は良いかな？」

「・・・了解した。始めてくれて問題ない」

練兵場の中央にてリユーベンとグルフユンクは向き合った。

グルフユンクは、ラインであるリユーベンがトライアングルたる自分に勝てる要素など無いと、余裕の表情だった。

「まあ待ちたまえよ。貴族たるもの優雅に構えるものだよ？そう急かさなくとも、模擬戦とは言えここは名乗りから始めようじゃないか」

（そんなに俺を叩きのめしたいのかコイツ？つか模擬戦だからこそ遊んでんなよ・・・バカなの？死ぬの？）

この辺りの形式がりューベンが無駄と称した由縁である。

あちらこちらでもやっているのが見受けられるし、半ば決闘じみたこのくだりを、練兵場の入り口付近で監視している教官も止めようとはしない。

貴族は総じて口上が好きなのである。

「僕はグルフUNK伯爵家が四男、ビザール・フォン・グルフUNK！『北風のビザール』だ！この戦いに敬意を表し全力を以て相手となろう！」

（ここは適当に付き合つか・・・ん？そう言えば・・・）

リューベンはふと地面を見渡した。

目の前ではグルフUNKが何か言っているが無視だ。

（かなり土が湿っている。空気中の湿度も高い、な・・・よし、ちよっと本気でやってみるか・・・）

昨晚から今朝がたに掛けて降り続いた雨により、空気中、地面ともかなりの水分を含んでいた。

これは水源を確保できるか否かで勝敗の分かれる水メイズであるリユーベンにとってかなり有利な局面である。

こういう状況のためにウエンブラム氏の特訓や、軍学校の実技でも試していた技があり、

リユーベンはそれを使って目の前のガキ（リユーベンの精神年齢は既に30半ばです）に一泡ふかしてやるうと考えた。

考えてしまった。

このとき

一年間我慢してきた鬱憤や、

一泡吹かせるに丁度いい機会だったとか、

そんな理由で軽はずみに目立ってしまったことが、

彼の憤ましい学校生活に大きく影響を与えることとなる。

この時我慢していれば、道はまた違っただろうと、後にリユーベンは語る。

「……ード！どうした！黙り込んで！今更怖じ気付いたかい？僕は構わないよ、別に今から取りやめても？」

名乗りと口上終え、こちらに催促してくるグルフユンク。

それに反応するように、練兵場のコンディションを確認し終えたりユーベンは顔を上げた。

その目は学校生活で今までにないくらい輝いていた。

「……では、こちらの番だ。」

我が名はジェテラード。ジェテラード伯爵家が次男、リユーベン・カイス・フォン・ジェテラードだ。二つ名は『霧雨』。押して参る・
・
」

続く

第九話 雨天敢行にて（前編）（後書き）

初めての前後編ですね

第九話 雨天敢行にて（後編）（前書き）

戦闘描写の薄さに全俺が泣いた

こんな話じゃなかったはずなんですけど・・・

第九話 雨天敢行にて（後編）

『霧雨』とは

雨でありながら霧であり

動でありながら静である

潜まず、忍び

去り行き、這い寄る

纏わり付いて、散り広がる

ただただ其処にたゆたうものである

それはまさに 彼の在り方そのものであった

第九話 雨天敢行にて（後編）

時は既に夕刻、

ヴィンドボナ軍学校・練兵場にて、二人の生徒が睨み合っていた。

「……実に、いい日だったと、そう思わないか、グルフユンク？」

いや、正しくはそうではない。

言葉を発することができず、ただこちらを睨みつけてくるグルフユンクを

リユーベンは、実父に「冷徹」と言わしめた眼差しをもって、冷ややかに見つめていた……

時は少し遡る。

「……では、こちらの番だ。我が名はジェデラード、ジェデラード伯爵家が次男、リユーベン・カイス・フォン・ジェデラードだ。二つ名は『霧雨』。押して参る……」

リユーベンは言い終えると同時に、あらかじめ手をやっておいた、右腰に提げている鉄杖を引き抜いた。

長さ50センチほどの武骨な、しかし頑強な一品である。

リューベンはこの世界で生き抜くにあたり、まず杖の存在に頭を悩ませた。二次創作でよくある大剣、刀、その他武器などの特殊なものは、手に入れることができない。また、とてもじゃないが彼には扱いきれなかった。

彼はそんな特殊な武器の製法なんか知らなかったし、別に前世では小さい頃から実戦に使える武術を習っていたというわけでもなかった。

せいぜい高校時代に誘われ入ってしまった剣道部ぐらいだった。彼はどこにでもいる農家の息子だった。

そんな彼が実際に戦場に出るにあたり、自分が最前線切り結ば、戦い慣れた平民の傭兵などに、簡単に殺されてしまうだろうと思いつくのは至極当然のことだった。

つまり貴族の一般的なスタイルである後衛を目指したのである。

そのため杖は鉄製の頑強な、しかし軽めの取り回しが利くものを作り、契約した。

これの制作にはウエンブラム氏や、トライアングルメイジである父にも携わってもらった。

軍人となったら契約し直すかもしれないが、リューベンは今のところこの杖に満足していた。

グルフユンクは杖を抜いたままこちらに向きただ立っているリユーベンに対し、自らも杖を引き抜いた。

「ライン風情が押して参るとは・・・いい度胸だ！今日は一段と僕の風の魔法が冴え渡るよ！実にいい日だ！そう思うだろジエデラード！！身の程を教えてあげようじゃないか！！」

グルフユンクはスペルを唱えた。

風・風のラインスペル、『ウインド・ブレイク』である。まずは様子見といったところだろう。

リユーベンはその見えない暴威に対して杖を一振りした。

「『ウオーター・ウオール』」

バシヤツ！

空中に出現した水壁に空気の塊がブチ当たり、辺り一面に水飛沫が飛び散る。

「それぐらいは出来るか！ならば着いてきたまえよ！？」

相殺されるのは承知の上だったのだろう。

グルフユンクは愉しげに続けてスペルを唱える。

リユーベンは、やはり先ほどと同じ位置に立ちながらただ杖を構えている。

メイジ同士の一騎打ちにおいて、動かないということは愚かなことだ。
動かなければ相手の放った火の玉や氷の槍が、自分めがけて殺到してくるからである。

だからこそ軍人は接近戦でも立ち回れるよう、訓練を積むのである。
しかし、この戦いではそのセオリーを両者とも無視していた。

リユーベンは言わずもがな。

グルフユンクも、攻撃してこないリユーベンを完全に嘗めて、その場から動かず魔法を放っていた。

（言うつからには多少やると思ったが。なんと言うことはない、本当に口だけみたいだねエ）

攻撃してこず、守りにはいったと思われるリユーベンに、グルフユンクは口角をニタリと吊り上げながら、勝利を確信していた。

「守ってばかりではなく撃ってきたらどうかね！？間違っても僕に届くことはないだろうがね！！」

『ウインド・ブレイク』

『ウインド・ブレイク』

『ウインド・ブレイク』

グルフユンクが風を放てば、リユーベンはその数だけ水壁を作りだ

しそれを防いだ。

水飛沫だけが飛び散り、二人の距離は膠着していた。

トライアングルである自分の精神力がライン風情より先に尽きることはない、

そう頭では理解していてもグルフUNKはこの状態に痺れを切らした。

「ったく!!!いい加減にたまえ!本当に口ほどにも無かったようだな!!!流石の僕もこの詰まらない時間は苦痛だよ!終わらせあげよう!!!」

一向に撃つてこないリューベンから一步距離を取り、グルフUNKは自身の持つ最高の技でこの身の程知らずを叩きのめすことにした。彼が唱えるルーンは

風・風・風のトライアングルスペル

『カッター・トルネード』

その威力は高く、決して学生同士模擬戦なんかで軽く使つてよいレベルの技ではない。

その魔法がなんたるか察した周囲の生徒たちはざわめきだした。

周囲で模擬戦に臨んでいた生徒達は皆終わらせ、

いつの間にか今戦っているのはリューベン達二人だけであった。

スペルを完成させ、早くも勝利に酔いしれながらグルフUNKは魔法を放つ

「有り難く受けるがいい！」カッター・トルネ

と、その言葉を言いきる前に、
グルフユンクの体がその場から消失した。

「「「「は??」「」」」

その模擬戦 決闘の様子を体していた戦いを見守っていた一同から、訳が分からぬといった声が漏れた。

唯一、リューベンと四六時中一緒にいたブライアンだけが、何が起こったのか正確に把握していた。

「・・・足下が、お留守だな。ミスタ・グルフユンク？」

模擬戦が始まって以来、初めてリューベンが口を開いた。

彼の言葉に一同が下に視線をやる。
するとそこには

「 つぶつはぁ！」

「「「「!?!?!」」」」

泥まみれになり、激しく咽せ込んでいるグルフンクがそこに居た。

「っは!?!?がっは!?!?・・・っ!貴様・・・っ!?!?」

何が起こったか解らずに、取り乱しながらもリューベンを睨みつけることだけは忘れないグルフンクだったが、そんな視線にもリューベンは動じずに返答した。

「・・・なに、単純だ。至極単純なことだ。・・・今日は、空も土も、実に良く『濡れていた』。ああ、こんな日は気分がいい」

クツクツと、少し押さえるようにリューベンが『啞った』。

それを目にした生徒達は、リューベンをよく見ているブライアンですら、背筋に氷柱を叩き込まれたような寒気を覚えた。

普段より饒舌で、

愉しげに啞い、

そして何より、このような『眼』をしたリューベンを見るのは、皆初めてだった。

一同の驚愕に構うことなくリューベンは続ける。

彼は自分のもたらす視覚効果をいまいち理解していなかった。

「斯様な潤いある日は実に・・・『優しい』。私のような『ライン風情』・・・に、すら、な」

「!？貴様っ、まさか!」

そう、単純な話である。

リユーベンは空気中、地中に存在するたっぷりの雨水　　水分を
水源としたのである。

『雨が降れば最強』。

ならば今朝に止んだとは言え、前日に降り注いだ豪雨がもたらした
水量とはいかほどか？

少なくとも、リユーベンの精神力の消費をほとんど抑えなが
らも風の塊を何度も相殺する程度には、この練兵場に水はあった。

飛び散る飛沫により更に水を増やしながら、リユーベンは密かに詠
唱をしていた。

錬金を応用して、その豊富な水分と緩んだ地面を利用し泥沼をグル
フュンクの一步後ろに精製したのだ。

使用したスペルは土・水。ラインである彼にも簡単に使えるものだ。

後は膠着状態に痺れを切らせたグルフュンクが、大技を放つために

一歩下がるのを待っただけ。

そしてグルフユンクは文字通り『泥沼にはまった』。

これだけのことだった。

軍人を語るならば、否、メイジならばこの程度誰にでも考えつくことだ。

考えつかなくては魔法など使える価値もない。

グルフユンクはライン風情とリユーベンを侮り、彼がこの程度の小細工もしてこないと高を括っていた。

この一連の流れの穴は、グルフユンクが大技に頼らず確実にリユーベンを攻め立てることだったのだが、

グルフユンクの大技に頼り見栄を張るだろうと予測したリユーベンはこの策を実行した。

結果はごらんの通りである。

やっと動き出した生徒達の中から声があがる。

「すると、グルフユンクは・・・」

「・・・ああ、『落とし穴』にはまったただけだ」

ニヤリと嗤い、リユーベンが答えてやる。

「・・・ツプ」

「ククツ・・・」

「・・・フツ、ハツハツハ」

「「「ギャハハハハ！！」」」

途端に笑い声が練兵場に充満する。

すべては、ガキのイタズラレベルの策にはまったグルフユンクに向けられていた。

「おいグルフユンク！トライアングルの腕を見せてやるんじゃないか
つたのかよ！？」

「ハハハ！お前、いくら何でも落とし穴はないだろ！！」

「恥ずかしいなあ、オイ！！」

「アツハハハハハ！」

やんやんやんとはやし立てる生徒達。

グルフユンクは泥と、屈辱から来る紅潮で顔をよく解らない色に変え、怒りにその面を歪めていた。

「っ、くっ！こんなもの！！貴族たる者が使う手じゃないっ！！貴様ア、貴族の誇りすらドブに捨ててきたようだな！？ジェデラード！！！！？」

胸から上を地上に出しながら、グルフユンクは吼え立てた。

それも周囲の笑いに火に油を注いでいるだけだった。

それに更に頭に来たのか、既に熟れすぎたトマトの様な顔色をしているグルフユンクは吼えるのを止めない。

それどころか

「ハッ！！流石は平民の矢如きに殺された者の家系だな！犬死にした兄の弟は卑怯者か！？流石はジェデラードの人間だな！！」

既に口調も崩れ、自らの体裁を貶めることしかしていなかった。

あまりにも見苦しいその醜態に周囲の笑い転げていた者達も、眉を寄せる。

しかし、何よりも、リユーベンの纏う空気に、その瞳に、今までの罵倒ですら見せることの無かった『怒り』の感情が顕現した。

周囲の空気も冷厳としたリユーベンの瞳により引き締まる。

リユーベンは腹の底から漏れ出しかのような声で、口を開く。

「……言つに事欠いて、言い出した戯れ言が其れかグルフUNK。語るに落ちるとは正にこのことだな」

ザツ、ザツ、と

ミスタ、と、敬称を付けることを止め、

リユーベンはグルフUNKとの距離を縮めていく。

グルフUNKを含め、周囲はその静かな怒りに吞まれており、微動だに出来なかった。

ラインレベルの、学生のメイジが出す空気ではない。

そう思ったトライアングル以上の実力者達も、同様に吞まれていた。

バギヤツ!!

「!?!ツア!?!?」

リユーベンはグルフUNKの元へ近づくと、未だに右手に持ち続ける彼の杖を、指ごと踏み砕いた。

「ギイ、アアアアア!?!?」

グルフUNKは一寸遅れて絞り出したかのような悲鳴を上げた。

リユーベンはしゃがみ込み、グルフUNKの首に鉄杖を突きつけな

がらのたまった。

「喚くな、喧しい。軍人を語るなら痛みぐらい我慢しろグルフユンク。……貴様は我が家名を侮辱した。相応の覚悟はあるだろうな。……？」

普段は多少の罵倒にも反応しないリューベンがここまで激昂する様子に、端から見ていた者達も、ブライアンも口を出せない。

「……この杖が刃ならば、貴様の首は既に飛んでいる。」

リューベンは、普段では考えられないほどに、頭に血が昇っていることを自覚していた。

自分への罵倒なら我慢できた。事実一年間そうしてきた。いくら言われようが二十歳にもなっていないガキの戯言と聞き流せた。

しかし、この愚かな貴族の四男は、ことも在ろうに兄を『犬死に』と評した。

自らの魔法の腕だけに酔いしれるような小物に、誇り高い兄を貶められた。

我慢がならなかった。

そう思ったときには既に杖と指を踏み砕き、喉笛に杖を突きつけていた。

目の前には痛みと、未だ信じられないといった驚愕を湛えた、グル

フュンクの顔がある。

思わず蹴りつけてやるうかと思ったが、
リユーベンは脅しを掛けるに留め置いた。

これ以上やるのは流石にマズいと理解できる程度には、頭は冷えていた。

リユーベンが纏っていた怒気を納めたことに見ていたブライアンは気付いた。

周りも同様であるようで、場の空気は先ほどよりも、少し和らいだ。

ふう、と、一息吐き、リユーベンはグルフュンクを見据える。

「・・・さて、杖は碎かれ、矜持は折られ。貴公はまだ認めないか、
『参った』と・・・？」

「ぐうつ、はつ、くつ・・・ま、参った・・・」

グルフュンクは痛みと屈辱に塗れ、リユーベンを睨みつけながらも降参をぼそりと宣言した。

リユーベンは今の自分に出来る最大限の嘲りと侮蔑を込めた歪な笑みを、冷徹とした眼のままにその顔に張り付けた。

「あいや結構。貴公の負け、だ・・・今日は、実に、いい日だった

と、そう思わないか、グルフユンク？」

自らの言を引用され、更に憎悪の籠もった目をリユーベンに向けながらも、グルフユンクには押し黙ることしかできなかった。

ここに、この模擬戦はリユーベンの勝利として終幕した。

この日、この出来事は

『霧雨の逆鱗』事件として学内で噂となり駆けめぐり、『霧雨を怒らせた者は心を砕かれる』と、まことしやかにささやかれ続けることとなる。

『霧雨』の名を世に知らしめた、記念すべき一つ目の出来事だった。

「リユーベン！もう終わったのかい？夕飯はまだだろう？」

「……ん、ああ。終わらせたとこらだ。確かに夕飯はまだだ。が、もう何もないだろうよ……」

「ハハハ、災難だったね？」

模擬戦から数時間。

時刻はすっかり夜となっていた。

あの後、グルフリンクが取り巻き二人に医務室に運ばれ、リユーベンや生徒達がさあ帰ろうとしたところ、

今まで何をしていたのやら、教官が現れ、イイ笑みを携えながらリユーベンにこう言った。

『ジェテラード、お前は、罰として魔法を使わず練兵場を整備しておけ!』

では解散!と、言い捨て、教官は去っていった。

止めるでもなく、恐らく入り口辺りからことの全てを見ていたであろうに、何という理不尽か、と、リユーベンは思った。

が、そう思ったところで罰が無くなるはずもなく、仕方なしにブライアン達と別れ、練兵場の裏の倉庫にあるシャベルと地均しを取りに向かった。

その罰が今し方終わったのである。

既に食堂も閉まり、消灯まで幾ばくもないため、今夜は飯抜きかとリユーベンは地味にダメージを受けていた。

すると、目の前にパンが差し出される。

リユーベンが顔を上げると、カラカラと笑う熊と眼があった。

「はい！そんなことだろうと思ってパンをとっておいたよ！だいぶ動いたみたいだし、お腹、減ってるだろう？教官殿に見つからないようにするのが面倒だったけどね！」

「・・・ああ、ブライアン、ありがとう・・・。持つべきものは、だな。ありがとう」

「どづいたしましてさー！」

リューベンはちょっと涙が出てきた。

本当に良い奴と知り合えたと、つくづく思った。

リューベンがベッドに座りパンをもそもそと食べていると、ブライアンがふと話かけてきた。

「昼間は珍しく怒ってたね？やっぱり、兄上殿のことかい？」

「・・・む」

リューベンは、よく見ているなと思った。

傍目には家名云々で激昂したように見えただろう。

しかし本当は少し違う。

家名はそこまでこだわっていない。

彼が激昂した原因は、ブライアンの言うとおりに、兄を侮辱されたことにあるのだ。

「見抜かれていた、か。ああ、やはり、兄上は私の憧れだったから……」

アルブレヒトとの会話以降、リューベンは素直にそう思えるようになっていた。

確かに兄は、貴族としては恥とも言える平民の武器により殺された。

しかし、リューベンにとっては武器だろうが魔法で死のうが関係ない。

自分などよりも高みにいた、誇れる兄であることに変わりはない。

「ま！今日のことですぐも懲りたと思うよ？それにあそこまでしてお咎め無し……じゃなかったけど、無いようなものだろう？逆に考えるんだ！良かったじゃないかってね！」

（ブライアン……それなんてジョースター？）

突っ込みは入れながらも、リューベンもその通りだと思っていた。

模擬戦の筈が決闘まがいなまで発展し、あまつさえ相手の杖と指を砕いたのだ。

問題に発展しても可笑しくないレベルだった。

しかし、実際は練兵場の整備という罰が一つ与えられただけだった。

教官殿が何を思ったのかは詳しく解らないが、恐らく訓練中の事故

として処理してくれるのだろう。

グルフユンクに関しても、因縁のジェデラードの人間に、それも二歳年下にちやちな策にはめられ、負けたなど公言できるはずもないだろう。

少し暴走してしまったが、まだ何とか平穏な学生生活に戻れるだろう。

リユーベンはそう考えていた。

「それにしても、『霧雨の逆鱗』か！カッコイイじゃないか、リユーベン！！君も晴れて有名人だね！」

「・・・アン？なんだって？」

「え？本人は聞いてないのかな？今日だけで全学年にもう広まったみたいだよ？」

「・・・何の話だ？」

「それは　「いよーーう！リユーベン！！」ご苦労様だったなあ
「！」

ドガアン、と

ドアをブチ開けて一人の青年が部屋に入ってきた。

「・・・コーネル、君か・・・」

「や、コーネル！でも、消灯も近いから、出歩かない方がいいよ？」
「ばっかやろう！こんな大きな噂が流れた日には、それが気になつてこんな時間に眠る奴なんかすくないだろ！むしろ居ないはずだ！」

夜分遅くなのに全く悪びれず、それどころか現在進行形で騒ぎ立てるこの男　　コーネル・ド・ワイリーはいつもこんな調子だった。
噂話が大好きな、正直軍人よりも諸国漫遊の語り部とかなればいいのに、とリューベンは常々思う。

コーネル・ド・ワイリー・・・通称『聞き耳コーネル』の異名を持つ学年きつての噂好き。その噂は信頼性に欠けることも多々あるが、概ね事実の、現代で言うパパラッチみたいな男だった。

藍色の短髪に高身長の細身の体。

ブライアンと同年のイケメン（ここ重要）だ。

この一年でブライアンの次に仲良くなった。
というのも、彼の部屋が隣であり、彼はあぶれて一人部屋だったため、自然と交流も増したのだった。

そんな彼が張り切っている。
リューベンは当たることに定評のある、悪い予感がした。

「……『霧雨の逆鱗』、とは、何だろいか、コーネル？」

「やつ！？本人が知らないのか！！フッフフ、説明してやろう！『霧雨の逆鱗』、それは「つまり今日の一件のことだよ。かなりの勢いで広まってるね！」　ブライアアアアン！！？」

コーネルの説明を遮り、先ほどの仕返しとばかりにブライアンが話した。

なるほど。

悪い予感がしたわけだ。

リユーベンは先ほどの「平穏な学生生活」を続けられると夢見ていた自分をデストロイしたくなった。

おそらく、広めた急先鋒は目の前の男だろう。

「……コーネル？君か？君が……」

「ああ！バッチリ、はじめっから最後まで！みんなに伝えてきたぜ？」

(いらんことじゃあよってこのアホー！！！?)

リユーベンは心の中で絶叫した。

今日の魔王な振る舞いの噂は、確実に学生生活に波風を起こすだろう。

「『雌雄を決した両雄！霧雨と北風は互いに死力を尽くし戦い合う。敗れた北風は見苦しくも霧雨の誇りを踏みにじり、その逆鱗にふれる！哀れ北風は踏み砕かれ、霧雨は冷徹たる瞳をもってその場を後にした』！これが『霧雨の逆鱗』の顛末だ！！そのままだろ？」

「・・・酷く、脚色が、為されているように思えるが・・・」

「気にするな！誤差はあるさ！」

リユーベンは暢気に語るコーネルに頭が痛くなった。

(なんか・・・つかれた)

未だにワイワイと騒ぐ友人二人を後目に、リユーベンは現実逃避よろしく、ベットに倒れ込んだのであった。

悪い予感通り、この先の学校生活で、彼が『地味で静かなジエデラード』に戻ることは、なかった。

新しき噂（伝説）

～ヴィンドボナ軍学校にて囁かれる一番

・『霧雨』を怒らせたら骨も残らない

・『霧雨』は嬉々として敗者の杖を踏み砕く

- ・ 『霧雨』 は教官にも一目おかれ、現にお咎め無しだった
- ・ 『霧雨』 に逆らった者はいずれこの学校から姿を消す
- ・ 『霧雨』 の前ではすべての魔法が打ち消される
- ・ 『霧雨』 の逆鱗は一度発動すると後には何も残らない

・ ・ ・ e t c ・ e t c ・

続く

第九話 雨天敢行にて（後編）（後書き）

リューベン（噂）の一人歩きがすごい

書いててわけがわからなくなってきた

第十話 癒心休息にて（前書き）

なんかグダグダと日常ですね

主人公の話し方がブレてきました

第十話 癒心休息にて

王都ヴィンドボナのとある邸宅にて、一組の男女がいた。彼らはお互いを見定めると親しげに近づき合った。

とは言っても、愛し愛される恋人達の逢瀬というわけでもなく

「お久しぶりです！リユーベン様っ！！」

「ああ、アニエス、久しぶり。年始め以来か。元気にしていたか？」

「はいっ！！」

久方ぶりの『家族』との再会を喜ぶ声であった。

第十話 癒心休息にて

早朝、ウエンブラム邸

アニエスはその日朝から機嫌が良かった。

今日は、彼女の慕う主が久方ぶりの休日を得てこの屋敷を訪れることとなっていた。

(久しぶりにリユーベン様にお会いできる・・・フッフ)

しかめっ面を常時展開している未来の彼女自身が見たら、『誰だこの娘は?』と問いたくなるような　　穏やかで嬉しそうな笑みを見せていた。

心なしか　　否、確実に彼女は普段よりも浮かれていた。

そのため、彼女は日課である小間使いの仕事、早朝からの水汲みなどもいつも以上に早く済ませ、準備は万全にしている。

主が来ると言うことで、師であるウエンブラム氏から、今日は休みをもらっていた。

主が来るのは九時頃。

現在はまだ六時半。

残り三時間をそわそわとしながら待ち続けた。

この様子だけを見ればまるで恋する乙女のようなのだが、彼女の中では未だ『お慕いする主に会える』ことが嬉しいだけである。

その様子は、大好きな主人の帰りを待ちわびる子犬そのものであった。

ウエンブラム邸の使用人達は、一番小さな使用人のそんな様子を微笑ましく眺めていた。

ヴィンドボナ軍学校学生寮

「リユーベン、今日はまたアニエスちゃんとらに会いに行くのかい？」

ブライアンは朝食を取りながら、同じく隣で朝食のパンにバターを塗っている親友に尋ねた。

「・・・かなり誤解を招きそうな物言いだが・・・事実ではある。まあ、久しぶりの休日であることだしな。それにウエンブラムにも少し用がある」

リユーベンはブライアンのふいの問いにも詰まることなく答えた。

この辺り、二年と少しの間付き合ってきた、息の合った親友と言えた。

リューベン達は三年生になっていた。

今年で15歳となった。

一年時の『アルブレヒト襲撃事件』、
二年時の『霧雨の逆鱗事件』をなんとか乗り切って、形ばかりは平
穏な学生生活を送っていた。

「そう言う君は、今日もひたすらに鍛錬か？」

「趣味のようなものだからね！日々精進、素晴らしいじゃないか！
！」

「確かに、な・・・」

ブライアンは休日をも鍛錬に回すようだった。

ただでさえ厳しくなってきたカリキュラムの中、貴重な休みをそんなことに使うのも彼ぐらいだ。

そしてそれで更に身体能力に磨きが掛かっているのだから流石だ。

ブライアンは一年の頃より確実に強者となった。

リューベンは、墮落した貴族がはびこる中で、日々精進を語る親友を素直に凄いと思った。

絶対将来出世するだろうな、とも思った。

「君の方こそ、休日に時々よくわからない理論を考察していたり、

あまり休んでないじゃないか？」

ブライアンにつつまれたリューベンだが、『よくわからない理論』とは、所謂現世知識から来るものであったため、適当に返して置いた。

「ウン？ああ、あれは趣味、みたいなものだ。休んではいるさ」

「僕と同じじゃないか！ぼくもちゃんと休んでいるよ？ともあれ、街に出るんならお土産よろしくね！」

「・・・この二年で随分遠慮がなくなったな」

「いいじゃないか！僕たち親友だろう？」

カラカラと笑うブライアンにリューベンも、自然な笑みを浮かべた。

それは入学したての頃に見せていたような苦笑ではなく、『いつも通り』のやりとりに浮かべた笑みだった。

彼らは親友だった。

リューベンはブライアンに、アニエスやウエンブラムのこともある程度話してた。

王都に在るといふことで会うこともあるかもしれないね？ぐらいの感覚だった。少なくとも、変な遠慮などはしない間柄だ。

それぐらいにはブライアンを信頼し、信頼されていた。

朝食を終えたりューベン達は一旦部屋へ戻る。

その間にすれ違う生徒、主に一年生から尊敬と畏怖の視線を受け続けていた。

「相変わらずの人気っぷりだよな？」

「……いつものことだが、慣れはせんよ。ああ、慣れてたまるものか」

「君は噂みたいに恐ろしい先輩に見られてるんだ。しょうがないんじゃないかい？諦めなよ？」

「……コーネルの仕業でなければ、諦めもついたさ、ああ」

『霧雨の逆鱗』は未だに学校内の語り種となっていた。

しかも、それを後輩にも知らせてやらねば！と、使命感に駆られた者達（主にコーネル。ブン屋的な意味で）により、新入生にも広まっていたのだ。

今では最高学年である『霧雨』は尊敬と畏怖の対象だった。

リューベンは『人の噂も七十五日』が当てにならないのだと、身を持って知った。

この一年で彼を取り巻く学校生活は一部に大きな変化を見せていた。

最初に述べたように『見かけだけは』概ね平和な日常である。

しかし先の視線の件や、何より変わったことは

「こちらに居られたのですかジェテラード殿！今日はご予定は空いておられますか？」

リユーベンは後ろから聞こえてきた、聞き慣れた声に振り向き、返事をする。

「おはよう、ヒューラー。悪いが今日は少し諸用があったな。何か用だったか？」

「そうでしたか。いえ、この前のように少し戦術の指南をお願いしたかったのですが・・・また次の機会にお願いしても？」

「ああ、悪いな・・・訓練をするのならば、ブライアンもそうらしい。つき合ってもらったらどうだ？」

リユーベンは隣にいるブライアンに目をやりヒューラーに提案した。彼はその言葉に、そちらに体を向け、改めて挨拶をしていなかった先輩に挨拶をする。

「ブルックリン殿！おはようございます！」

「や！おはよう、ヒューラー。今日も訓練かい？」

「はい！一手ご教授をば、お付き合い願えますでしょうか！！」

「ん！構わないよ！一人でやるより二人の方がより実践に近づけるしね！それに、君ほどの腕を持つ者とやれるならむしろ大歓迎さ！」

「ありがとうございます！！！」

リユーベンはテンションの高い、熱血体育会系の先輩後輩のやりとりを横目に見ていた。

そう、もつとも変わったことは声を掛けてきた後輩　ヒューラ

ー・フォン・ハルバートンの存在だった。

上官に対するように自分達と話す後輩だ。

リユーベンは昨年までは学内でも有名な生徒ではなかった。

どちらかと言えば目立たない、しかしそれなりに交友関係がある程度の存在感を醸し出していたのだ。

そんな彼だからこそ、後輩との交流なんか無かった。

しかし『霧雨の逆鱗事件』の後に、あの件の発端とも言えた彼、ヒューラーがリユーベンを訪ねてきたのだ。

『ジエデラード殿！先日はありがとうございました！それに、御活躍お聞きいたしました！やはり貴方は貴族の鑑だった！！』

『アン？君は、ハルバートンか。なんの　』

『貴族たるもの気高くあれ！それを体現なされ、見失った者達を正道に導かれた！！』

『いや、あれは』

『このヒューラー！軍人となった暁には貴方のような御方の下で働けたらと夢見ております！！』

『ああ、ありがとう、ハルバートン。しかし』

『自分のことはヒューラーと、そう呼んで下さい！！』

『う、む、ヒューラー？私はなにも、その様な大それたことをしたわけではない。ただ、己が未熟だっただけさ』

『いえ！！そんなことはありません！皆は貴方を畏れておりますが、自分は貴方を尊敬しております！』

『・・・ありがとう』

この様にかなり懐かれてしまったのだ。

(アレ？なんか変なフラグ建てた？助けるんじゃないか　いや、勝手に助けたことになってたのか・・・アレ？これ強制イベント？) リューベンが礼を言い去っていく後輩の背を見ながらそんなことを思ったものだった。

それが一年前。

今では今日の様になんか話のできる後輩だ。

彼は、ブライアンと同じく熱心な男だ。
初めてあったときなど、同類の匂いを察知したのかすぐに意気投合していた。

ヒューラー・フォン・ハルバートンは有名だ。

優秀な風のトライアングルメイジであり、ハルバートン伯爵家の長男でもある。

しかもブライアンと同じで、貴族としては珍しい根っからの体育会系だ。

良くも悪くも目立つ。

そんな彼がリューベンと共によくいたら、しかも慕っていたらどうなるか？

決まっている。

『あのハルバートンが『霧雨』の舎弟になった』

と、噂された。

主に隣室の嗜好きによって。

半ば間違いでない辺り、夕チが悪い。

更に『霧雨』の名は広がったわけだ。

この偽りの平穏でもまだましになっている。

酷いときは目のあった生徒が逃げ出すのもざらだった。

リューベンは今までの学校生活を思い、人知れず嘆息した。

「じゃ、リューベン！僕は鍛錬にいつてくるよ！」

部屋に戻り、お互いやることをやろうと準備をした。ブライアンは中庭でヒューラーとやり合うようだ。

部屋を出ていくブライアンの背を見ながら、リューベンは街へ出る準備をした。と言っても、財布と杖を持っただけのシンプルなものだ。

彼は街までの足を確保すべく、馬舎へと向かう。

久しぶりに会う少女はどうなっているかと思いを馳せながら。

そして時は冒頭へと至る。

「いやいや、軍学校ももう少しでござ卒業ですな」

「・・・ウエンブラム、まだ一年近く残ってるだろう。」

「ふむ、しかし時が経つのは早いものですな。この娘を預かって二年と少し。私も年をとってきました」

リューベンはウエンブラム氏邸内で紅茶を片手に話していた。

先ほど門の前でアニエスに出迎えられた後、客間まで案内された。

何度か訪れており、リユーベンには既に勝手知ったる場所だった。

「ご健勝そうで何よりだ。それより、アニエスの方はどうなっている？問題ないか？」

ウエンブラム氏との世間話の中、ここにはいないアニエスについて聞いてみる。

ウエンブラムはゆるゆるとした顔つきを少し引き締め真面目に答える。

「ふむ。今までと同じく、凄い速度で技術と実力を身に付けておりますな。体の小ささは仕方ありませんが、まだ十にも子供としては上出来です」

「そう、か・・・」

「しかし、あの娘の姿勢にはやはり鬼気迫るものがある。預かった時に申した『メイジ殺し』を育て上げるといってもあながち間違いはなかったようですな」

ウエンブラムからしたら、この二年でのアニエスの成長は素晴らしいの一言に尽きた。

年端もいかない故に腕力や体力が脆いのは致し方ない。

しかし、『強くなる』ことへの貪欲なまでの姿勢と、弱音一つ吐か

ない精神力は感嘆に値した。

アニエスの動機を知っているだけに理解もできたが、逆に知っているからこそ遠慮もなく稽古を着けていたのだ。

わずか8歳の娘が耐えているというところに、彼はアニエスが将来大成するだろうと考えることとなった。

その根性の半分でも良いから、うちの息子に分けてやってほしいとも、それなりに切実に思ったりもした。

「・・・まあ、まだ時間はある。彼女が死なないようにするために、強くしてやってくれ」

「うむ、そうですね。焦っても致し方ありません故」

話にも一段落つき、二人は紅茶を一口口に含む。

そこに件の少女がパタパタとやってきた。

やはりどこか仔犬を彷彿とさせ、リユーベンは微笑みを浮かべた。

「リユーベン様！お待たせしました！」

リユーベンと会うことを楽しみにしていたアニエスが、何故ここにいなかったのか？

それは街へ出かける用意をしていたのだった。

リユーベンがここへ来た目的もアニエスを迎えに来たことが最大のことである。リユーベンは久しぶりに会う妹分の少女を街に連れて行ってあげようと画策していた。

本来ならば他にやることも有ったのだろうが、中々取れない休みであるし、たまには家族サービスしてやろうと日曜日のパパのような感覚だった。

彼の中身（精神）は既に三十半ば。

アニエスぐらいの娘がいても可笑しくないので、あながちハズレでもない。

それに、一番の理由は潤いの補充ある。

野郎ばかりの軍学校に詰めていても安らぎは中々得られない。

むしろ『霧雨』の名前のせいで精神的疲労が嵩んでいくばかりである。

そのためまだ小さいとはいえ立派な女の子であり、無条件で自分を慕ってくれるアニエスに、リューベンは心を癒されるのだった。

学校にも無条件で慕ってくる後輩はいるが、野郎の其れは鬱陶しいだけだ。

アニエスも慕う主と出かけられることに喜んでいるので問題ないだろう。

リューベンはキラキラとした顔で用意を済ませてきたアニエスに、紅茶を飲み干してから言葉を返す。

「用意はできたみたいだな。さて、行こうか、アニエス」

「はいっ！」

「それではウエンブラム。また後でな」

「ハ、ではまた後程」

アニエスを伴いながらウエンブラムに別れを告げ屋敷を出る。リユーベンは久し振りの首都を存分に楽しむべく歩き出した。

「流石に虚無の曜日は道が込んでいる、か。アニエス、はぐれないようにな」

「はい！大丈夫です！」

はきはきと答え、確かに慣れているのだろう。

アニエスはしっかりとした足取りでリユーベンに着いてきていた。

（大丈夫そうだな・・・しかしこう混んできると、やっぱりちっさい子は見てて心配になるよ・・・）

リユーベンはアニエスと共に市街地の中央を歩いていた。

表向きは貴族の子息とその侍女の少女である。

一見して普通の主従だ。

貴族の方がやたら鋭い目つきで軍学校の制服を来ており、侍女の方がまだ幼女と言う辺り普通ではないが。

休日のヴィンドボナの街は賑わっていた。

商・工ともに発展した町並みは道幅も広いが、しかし道の両側に出た露天商と混雑で狭く感じられる。

リユーベンはアニメなどで見たトリスティンの町並みよりも広大な都市に、流石は大国だと、自身の国に感心したものだっただ。

「今日は、どうするか。何も考えていなかった・・・フム、取り敢えず昼も近い、昼食にしようか？」

「わかりました！」

妹とのデート感覚であるリユーベンは、この日の予定なんかは立てていない。

あくまでもぶらぶらと街を歩き、アニメスに癒されるのが目的である。

そのアニメスはリユーベンの後ろをついて回っているだけで満足そうである。

先ほどから追従の言葉しか喋っていない。

リユーベンとしてはもう少し話してくれても構わない、むしろ楽しいきたいのだが、一応身分差というのも理解はしていた。

リユーベンは、取り敢えず提案通りに昼食をとれる場所を探す。

(そついえば、前にコーネル君が言ってたな・・・)

その時ふと思い出すことがあった。

『 リューベンよう、最近王都の方に美味しい飯屋ができたらしいぜ？ 』

『 ン？飯屋？生憎最近は全く街に出ていないものでな。そうなのか？ 』

『 俺もまだ行つてないが、財布に優しい値段の割に貴族も御用達の味だつて評判だ。と、一年生達が言っていた 』

『 …… もう一年生と繋ぎを付けてるのか。熱心だな、相変わらず。 』

『 おつ！もちろん 『霧雨』 も広めといたぜ！感謝したまえよ！ 』

『 …… 』

『 …… 知らないことまで思い出してしまい、リューベンは少しげんなりした。 』

改めて思えば自分の周りには変にキャラの濃い人間ばかりが集まる凡人だと自覚している。あくまで本人は、リューベンとしては、もう少し落ち着いた友人が欲しいとも思った。

確実に類は友を呼んでいる。

コーネルオススメの店は確かに繁盛していた。
店構えも貴族にも十分かつ、平民もそれなりに入っている活気に溢れた食堂だった。

ここならアニエスが妙に萎縮することもないだろうと、店に入り、給仕の娘に二人連れだと告げる。

案内された奥のテーブルで、二人は料理を注文し、料理が来るまで会話に花を咲かせていた。

「ウエンブラムに聞いたが、最近は修業も厳しくなってきたそうだな？」

「はい、でも、私がお願いしたことです。それに自分でも信じられないくらいよくして貰っていますし、特にインドリユー様はお優しいです」

「インドリユー・・・？アイツがか？」

リユーベンはウエンブラムの一人息子であり、気の弱い件の青年を思いだした。

「はい。私が師に打ちのめされて気を失ったときなどに、平民である私なんかを部屋まで運んで頂いたり、時々こっそりと甘いお菓子を分けてくれたりします」

「へえ・・・（お菓子、と来たか。餌付けか？インドリユーもやるねい・・・）」

ニコニコと語るアニエスを見ながら、リユーベンは感慨深く思う。

リユーベンの記憶にあるインドリユーとはおどおどした様が印象的で、

キャラの濃いリユーベンの知り合いの中でも一段とまともな知り合いである。

気弱であるが、自身がそこまで高位な貴族でもないため、平民との温度差も低い。

なにより優しい性格であるため、小さな女の子が頑張っているのを見たら応援したくなったのであろう、と、想像できた。

他にも屋敷での普段の様子や、使用人達に可愛がって貰っているらしいことなど、他愛ない話を続ける。

どうやらアニエスはウェンブラム邸でそれなりに愛されているようで、彼女をそこに送り込んだ身としては嬉しいばかりである。

いや、ウェンブラム氏がそういう人間だからこそ預ける気にもなったのだが、そこは割愛する。

「お待たせしましたあゝ、白身魚の香草焼きと仔牛のワイン煮込み、ソーセージグリルとハシバミ草のサラダになりまゝす」

と、そこへ料理が来た。

間延びした喋り方をする給仕の子から料理をテーブルに移し、さあ食べようか、とアニエスに言っているとビックリして目を丸くした彼女がそこにいた。

(あら、かわいい)

リユーベンは時折年相応に可愛らしさを見せるアニエスに癒されていた。

普段から年齢以上に大人びた彼女だからこそ、可愛らしさも際だつと言つものだ。

リユーベンは断じてロリコンではない、善だ。これは父性的な愛情だと自分に言い聞かせる。

「どうしたんだ？」

「い、いえ・・・ハシバミのサラダって、おいしいんですか？」

「ああ、コレな。この苦みがなかなか美味しい。苦手か？」

アニエスが何に驚いたのか得心がいった。

リユーベンからすれば苦い葉っぱというのは前世によくあるモノで、小松菜とかそんな感じがして案外気に入っているのだ。

「はい・・・にがいのが、ちょっと苦手です・・・」

「む、食べ慣れると案外イケるものだな。

それに栄養価も豊富だ。バランスのよい体作りにはこれほどの食材はないぞ？」

「そう、なんですか・・・ムムム・・・」

体作りに役立つ、と言われては、早く大きくなりたいアニエスには無視しがたいモノであり、食べようか迷っているようだ。

ムムムと唸りながらサラダを前に悩む様は更に可愛らしさを引き立てる。

静かに笑みをたたえながらそれを見ているリューベンは、当初の計画通り多大なる癒やしを得られているようだ。

「さて、次は、どこに行きたい？」

「私はリューベン様に着いていくだけです」

「むう、もう少し積極的になってもいいんだぞ？」

「せ、積極的にですか・・・？え、ええと・・・」

「・・・取り敢えず、歩こうか」

「あつ、はい！」

腹ごしらえを済ましたリューベン達は再び市場を歩く。

アニエスに行きたい場所を聞いてみるが、案の定答えはリューベン任せ。

兄貴分としてはもう少し欲張ってくれても楽しいが、言っても仕方ないので、取り敢えず歩くことにした。

リユーベンには特に目的もなく、本当にぶらぶらと歩いているだけだったが、久々の街はそれだけでもどこか気分が楽しくなってくる。前世で田舎モノだった彼は、都会に憧れがあるのだ。例えば中世の町並みだろつと、首都の空気が、リユーベンは嫌いではなかった。

「ウエンブラムやインドリユー達に土産でも買っていくか」

「お喜びになられると思いますよ！」

リユーベンは確かブライアンにも土産が必要だったと考え、とにかく適当なモノはないかと散策する。

するとアニエスがある露天をじいっと見ていた。

目線をそちらにやると、そこにある看板にはこう書いてあった。

『トリスティン直輸入！タルブ産高級ブドウによる飴細工菓子』

キラキラと輝く芸術的な飴細工の数々がそこに並んでいた。

露天の屋台のクオリティーには思えない出来だ。

やはりアニエスも女の子。甘いモノは大好きなんだと、それを見つけているアニエスをまたまた可愛く思いながらリユーベンはその屋台に近づいていった。

「　　飴細工か。なかなか、綺麗なものだ。土産はコレにしようか、アニエス？」

「うえ？あつ！？そうですね、すごくきれいです」

ハッと我に返り、斜め上の返答をするアニエス。

近づいてくるリューベンを見て、屋台の店主は彼に話しかける。

「おや、貴族様！見ていってくださいえ！ウチの飴細工はまさにここいらの芸術品なんかより華がありますぜ！とくにこのグリフォンを模したモノなんか、職人渾身の一品でさあ！」

言われた商品を見ると、確かに極小なところまで緻密に仕上げられた職人の技の高さが窺える一品があった。

他にも様々な種類があり、リューベンは同じように眺めていたアニエスに聞いてみた。

「なあ、アニエス。どれにしようか？」

「えっ？・・・そうですね、コレなんか、きれいでいいんじゃないでしょうか？」

アニエスが指さしたのは

可愛らしい花や動物といったものでなく、男の子に人気のあるような、レイピアを模した騎士剣型の飴細工だった。

（確かに、きれいではあるけどね・・・）

それを選ぶセンスにリューベンは少し苦笑しながら、まあそれもいいか、と、

その品を四つ買った。

「毎度あり！」

「さて、ほら、アニエス」

「えっ？」

リユーベンは受け取った品の一つをアニエスに差し渡す。ふつうに何か買ってあげようとしても、アニエスは恐縮するだろうと思い、不意打ち気味にプレゼントを敢行してみたのだ。案の定アニエスは貰えると思っていなかったらしく、驚いている。

「え、でも、あの、私なんかが頂くのも悪いです……」

「遠慮しないでいい。これは今日の御礼だよ」

「お礼、ですか？」

「うむ、まあ、気にしないで受け取ってくれ。久しぶりに会えた記念、と言つにはいささか安すぎるがな」

「いえ！？あの、そんなことないです！！……ありがとうございます……」

リユーベンはどこまでも遠慮がちなアニエスに優しく笑いかけながら、騎士剣の飴細工を手渡す。

アニエスそんなリユーベンの言葉にわたたと首を振りながら、しかしどこか嬉しそうに頬を染めながらそれを受け取った。

周りの人々には彼女がパタパタと尻尾を振っている様が幻視

できただろう。

どこか微笑ましいものを見る空気が、一時その場を満たす。

リユーベンはそんな彼女に満足しながら、あることを思いだし再び店主に向き直る。

「そつだ店主、もう一品買いたいんだが」

「へい、どれになさりますか？」

「ああ、それではこの」

西日が辺りを照らす頃、リユーベン達はウエンブラム邸へと帰ってきていた。

アニエスはリユーベンに一礼して一旦部屋へと戻っていった。

リユーベンは現在午前中の様にウエンブラムと二人、客間で話をしていた。

「久しぶりの街はどうでしたかな？」

「ああ、楽しめたよ。いい息抜きになった。と、これは土産だ」

「土産、と？・・・ほう、飴細工ですか？また典雅な趣向ですな」

「アニエスのお勧めだよ」「騎士剣とは、あの娘らしいですな」

子や孫の話をしているような、ジジ臭い空気を漂わせながら件の少女について語り合う二人。

リユーベンはこの一日で思った以上に安らぎを得たようだ。

学校では見せないひどく緩んだ顔でウエンブラムと話している。

そこに噂のインドリユーが現れる。

「父上、シムズが探していましたよ・・・あれ？リユーベン様、いらっしやい」

「ん、インドリユー。久しぶりだな。今朝はどうしたんだ？来たときには居なかったようだが」

「ハハ、今朝は少し離れたところの村に出かけていたみたいです。二時間ほど前に帰ってきたところですよ」

「インドリユー、シムズが私を捜しておったのか？ふむ、まああらかた予想はつく。火急のことでもないだろう。後でよいか」

「・・・シムズも苦勞人だな」

「ハハハ・・・」

シムズとはウエンブラム邸の執事である。

ウエンブラムはこの調子で時折シムズから逃げ回りアニエスの稽古をしたりしているのだ。

彼の苦勞が目に見えるようである。

「あ、そうだ、リユーベン様」

「アン？」

「この前友人から聞いたんですがね、この一年軍学校で『霧雨』がすごいことになってるみたいですね？」

「なっ……!？」

「ほう？興味深いですな？いったい何事か？」

「いや、それは、な……」

「ふうむ、何か後ろめたいことでもおありか？道理でこの一年学校のお話をなさらないわけですね」

「……ぐぬ」

リユーベンは洗いざらい喋る羽目になった。

『霧雨の逆鱗』から今に至るまで、何となく二人から聞くまで返さないという空気を見たのだ。

リユーベンはいくら怖がられようが、彼を知る人間からすれば、身内の押しには弱い人間であった。

「ハハハハハ！」

「・・・おいおい、私にも不本意なんだ」

「あつ、すいません。いや、でも、ハハハ」

「そのようなことになっていようとは。いやはや、箔が付いてよろしいではないですか」

「他人事だと言ってくれるな・・・」

和気あいあいと話す三人。これがこの三人が揃ったときの空気だ。昔はおどおどしていたインドリユーも、リユーベンに慣れたのか今では父親と同じようにバンバンモノを言ってくる。父が憂いている以上に彼はたくましく育っていた。

リユーベンは昔の控えめな彼がつくづく懐かしくなった。

「しかし『霧雨』にそんな深い意味があつたんですか？」

インドリユーがふと聞いてきた。

彼の言う深い意味とは、いつしか『霧雨の逆鱗』の始め口上となっていた『霧雨とは』の下りである。

「・・・ああ、言うな。そんなわけないだろう。友人の悪ふざけだ、畜生」

リユーベンは苦い顔をしながら、悪ふざけが好きなコーネルを思い出す。

コーネルとしてはマジにやっているので余計に始末に負えない。

「『霧雨とは、雨でありながら霧である……』でしたか？中々詩的な言い回しですな？まあ実際はそのような浪漫も何もあったものではありませんが」

「え？父上はご存知なんですか？」

「ふむ、何を隠そうリューベン様の二つ名を決めたときに私もその場にいたからの」

ええっ！？と驚くインドリュー。

そんなに驚くようなことかとリューベンは思う。

別に魔法の師匠何だから普通じゃないか？と思っていた。

確かにこの二つ名にそんな意味はない。

これは、ある時、とある魔法の応用特訓をしていたときの話である。

『できたぞ。コレ、いいんじゃないか？』

『おや？ウォーターランスの応用ですか？このような細かい形態制御は至難の業では？リューベンは器用でいらっしやるな。本当にラインですか？』

『……残念ながら、まだ、な。しかし、決定力が足りんな』

『そのようすな。まあ、精神力があがればおいおい改善しましよ』

『し』

『・・・訓練あるのみ、か』

『話は変わりますが、その魔法、まさに雨の如しですな。ほら、虹が架かっておりますぞ』

『アン？ああ、そうだな。中々いい仕上がりにだ。このまま突き詰めれば、パーソナルスキル得意魔法にできそうだ』

『ふむ、、雨、雨、虹・・・』七色のリューベン』とても名乗りますかな？』

『・・・ア？いや、それは少な・・・もう少し落ち着いた奴の方が・・・』

『落ち着いた奴とな？ふむ・・・何かご自分の案はないのですか？やはり最後に決めるのは自分ですからな』

『はあ・・・雨、か・・・あ、霧雨』とかでいいんじゃないか？霧雨、中々いい響きだ』

『ではこれからは『霧雨のリューベン』ですな』

『・・・二つ名とはこんな簡単に、適当に決めてしまっても構わないのだろうか・・・？』

『特に問題はないでしょう。余りにも身の程知らずな名は身を滅ぼしますが、『霧雨』ならばお似合いですよ？』

『ふうむ・・・』

こんなノリで決まったのだ。

解ってニヤニヤしながら息子を煽るウエンブラムと、聞いたそんな眼をこちらに向けてくるインドリユー。

リユーベンはアニエスが早くやってこないかと、天井を見上げ溜め息を吐いた。

あの後素直に教えてやるのも癪だったため、インドリユーをはぐらかしながらアニエスが来るのを待った。

すこししてアニエスが来て、またしばらく団欒とされていたが、そろそろ門限だと言うことでリユーベンはお暇することにした。

「じゃあな、アニエス。またしばらくは会えんが、元気でな」

「はい・・・リユーベン様も、お体にお気を付け下さい・・・」

やはり寂しいのか、すこし気落ちした様子でリユーベンを見送るアニエス。

そんないじらしい彼女にまたもや笑みが漏れ、しかし気づかれないようにアニエスの頭に手をやり、優しく撫でる。

「そう寂しがらずとも、また会いに来るさ。今度来たときは、どれだけ強くなったかみせてくれよ？」

「！ は、はいっ！！」

ニコリと、リューベンが普段は見せない種類の笑みを向けられ、一転次に会うときまでに強くなってやろうと奮起するアニエス。

エヘへと照れているアニエスを撫でながら、リューベンはウェンブラム親子に挨拶した。

「ではな、ウェンブラム。お茶をご馳走になった。インドリューもな」

「いえいえ、僕は最後まででしたからね」

のほほんとインドリューが答え、ウェンブラムも言葉を返す。

「毎度のことですからな。今日はできませんでしたが、次に来るときはランチでも一緒にどうですか？」

「男に誘われて遊ぶ趣味はないんだが・・・その時は御相伴に預かるわ」

「ははは、ご期待下され」

リューベンはウェンブラムと軽快に言葉を交わす。

この二人の間には確かに師弟の絆があった。

「では、な」

「はい！リューベン様、また、いらして下さい！」

「ん・・・」

そう言って、リューベンはウェンブラム邸を後にした。

リューベンは学校の寮へと帰りつつ、今日の日に思いを馳せた。

（ああ、久しぶりに美味しいモンも食ったし、女の子成分も補充したし・・・なかなか有意義な一日だったなあ）

ふと、手に持った袋に入れた飴細工を取り出した。

実は、アニエスに何かものを買ってあげたのは今回が初めてだった。初めてのプレゼントが飴細工ってのもどうか？とも思ったが、アニエスが喜んでいたのでリューベンのには問題なし、となった。

むしろこの程度で妹の様に思える少女が笑顔になれたならいくらでも買ってあげたかった。

完全に兄バカ思考である。初めは駒にするとか言っていたのに、今

では完璧に絆されてしまっている。

やはりリユーベンは良くも悪くも自分に嘘がつけない人間だった

このとき、無意識のうちに笑みが浮かんでおり、飴細工片手にニヤリと笑うアヤシい貴族ができあがっていたのだった。

周りを歩いていた人々は、色々な意味で近づきたくなかっただろう。

「あれ？帰ってたのかいリユーベン？」

「オウ、ブライアン。今帰ったところだ。・・・その様子だと、一日中やっていただけなのか？」

「ハハハ、つい熱中してしまつてね！ヒューラーも中々やるもんだから、思わず昼食も忘れて暴れすぎたよ！」

「・・・相変わらずの体力だな。実に、羨ましい」

リユーベンは寮に入ってすぐの廊下で親友に出会った。

彼の服装は、昼前に見た訓練着が更にボロボロになったものだ。

もっている着替えを見るぶん、これから風呂に向かうらしい。

どうやらリューベンが出かけたときからついさっきまで鍛錬という名の模擬戦闘に明け暮れていたようである。

相変わらずの規格外っぷりを見せる親友と後輩に対し、イマイチ肉体派と言いきれないリューベンは男としての本音を漏らす。

それをもハハハと笑って受け流し、ブライアンはリューベンの持つ袋に気が付いた。

「あれ？なんだいそれ？」

「アン？ああ、これが。ほら、土産だ」

リューベンに袋を差し出され、ブライアンは一瞬えっ？と言う顔をして、合点が行ったようでそれを受け取る。

「本当に買ってきてくれたんだね！わざわざ悪いねえ！・・・と、これは飴細工、かな？」

「ああ、ツレのお勧めだ。綺麗だろう？」

なにが楽しいのか、ニヤリと笑いながらリューベンは言う。

ブライアンは素直に礼を言いながら、ふと思った疑問を尋ねてみた。

「確かに綺麗だね！うん、ありがとう！・・・でも、なんで『熊』の形なんだい？」

「深い意味は、ないさ」

クッククック、と、笑いながら部屋へと去ってゆく親友の後ろ姿をブライアンは眺めていた。

いつになく機嫌がよさそうで、悪戯っぽい笑みを浮かべたことが印象的だった。

「ハハ、どうやらいい休日だったみたいだね？」

あんなに機嫌の良さそうなリューベンは久しぶりに見たと、熊の飴細工片手にブライアンは風呂へと向かった。

リューベンの休日はこうして終わっていった。

ウェンブラム邸の使用人部屋、

アニエスは騎士剣の飴細工片手にニヘラ、と形相を崩していた。

どうやら初めての主からのプレゼントが嬉しくて仕方がないらしい。

普通ならば平民の、しかも孤児で野垂れ死んで当たり前だった自分が今ではこんな屋敷で働いている。

屋敷の主人達も厳しいが誠実な人たちだし、使用人達も一番小さい彼女を可愛がってくれている。

アニエスは自分がいかに恵まれているかを理解していた。

あまつさえ貴族から戦いの手解きを受けられるなど、あり得ないことだった。

どれもこれも全ては彼女の主、リューベンのおかげだと思っ
た。

リューベンが責任がどうか言っても、アニエスからしたらリ
ューベンは一の恩人である。
そして、お慕いする主人でもある。

(リューベン様のためにも早く強くなりたい・・・強くなって復讐
をやり遂げる・・・!!)

崩していた顔を引き締め、ギラリとした炎を瞳に宿らせる。
アニエスは決意を新たに、修行に励もうとして

ふと、考えた。

(復讐を成し遂げたら・・・その後は)

『リューベン様のお役に立ちたい』

本来の彼女ならば復讐を人生と捧げ、その先など考えなかったはずだ。

しかし、どん底からすくい上げてくれた存在を知る彼女は、復讐を成し遂げた後 『未来』への願いを見出しつつある。

このことが吉となるのか、それとも凶となるのかは、今はまだ、誰にも解らないことだった

少なくとも、リューベンの当初の予定なんかぶち壊すぐらいに、アニエスはリューベンに懐いているのだった。

忠犬誕生まであと数年・・・

続く

第十話 癒心休息にて（後書き）

次回は戦闘描写ありの予定・・・

第十一話 討伐演習にて（前書き）

今回から何話かにわたって演習編が続きます

ゲルマニアの細かい設定を忘れたので妄想で補完しますが、ご容赦
ください

第十一話 討伐演習にて

そろそろ日差しが辛くなってきた、初夏のとある日。

さらに気温が上がりそうな暑苦しい光景が繰り広げられていた。

「皆揃ったか！」

「「「「サー、イエッサー！」「」「」

毎度お馴染みとなっている、ゲルマニア軍学校の正門前広場に三年生の生徒達が集まっていた。

第十一話 討伐演習にて

「今日やることは通達してあったとおりだ！今から我々は何をする！？答える、デズモンド！！」

「はいっ！小隊毎による個別実地演習であります！」

「そつだ！ではノリンズ！！我々は何処で何をする！？」

「ハッ！各隊国境付近まで赴き亜人共を討伐に向かいます、教官殿！」

「ああそつだ！貴様等！今から貴様等はオークやらオグル鬼やらの豚共を狩りに行く！！一匹たりとも残さず駆逐してやれ！！」

「……サー、イエツサー！！」「……」

「演習だが死の危険は覚悟しろ！！仮にも勇猛なるゲルマニア軍人になろうと言うならば！この程度朝飯前に済ましてこい！！解ったかアツ！！」

「……サー、イエツサー！！！！」「……」

相変わらずの軍隊のノリにも対応してきた三年目、リユーベン達は久し振りの亜人討伐演習を受けることとなった。

先ほどの集会の後、各自装備を再確認し、小隊毎に分かれ行軍を開始するらしい。

リユーベンは一旦部屋に戻ったところで、同じ様にガサガサと装備を用意している、相部屋の親友に話しかけ

た。

「・・・なあブライアン。君と私は、同じ小隊だったか？」

「ああ！そうさ！いやありューベンが同じチームにいると連携が取りやすくありがたいね！！」

「・・・小隊の発表は終わっていたかの？何も聞いていなかったから、てつきり出発直前に教えられるのかと・・・」

「昨日張り出されていたはずだよ・・・やっぱり君はどこか抜けているよね？」

「・・・耳が痛い、な」

考えれば当たり前である。いくら演習といえども、『現場』には変わりないわけで。

そんな所に行くのに仲間内の情報すら回っていないわけがない。それ即ち死に直結するからだ。

リューベンは情報に遅れをとった自分を素直に反省した。

この二年半で彼は、戦闘・戦争のなんたるかを理解しつつあった。

国家レベルでも個人レベルでも、『戦い』というものは情報を掌握した側に圧倒的有利に働く。

演習とはいえこれを見逃していた自分はまだまだなんと、自戒した。

気を引き締め直し、装備をあらかじめ用意し終わると、リューベン
はライアンと共に集合場所に向かう。
道中、これから数十日の戦友となる級友達のことをライアンに聞
くことも忘れない。

彼は、軍人の端くれになりつつあった。

戦場で最も重宝するモノは、鉄火場を『経験している』者だ。

そのためこの学校では、毎年三年生になると大規模な一斉演習で、
戦場の空気を生徒に教えてきたらしい。

なにも演習が初めてという訳ではない。
一年の時にも、二年の時にも、リューベンは亜人の討伐に訓練とし
て赴いたことがあった。

しかし、やはり純正な平和ボケたる日本人だったこともあり、初め
の内は亜人とは言え殺すことに嫌悪感を抱いていた。

だが、そんな甘ったれが通用する優しい世界ではないと思
知ったため、今では殆ど気が咎めることなくオークぐらいなら殺せ
るようになっていた。

それを思い知る切っ掛けとなった事件が、二年の時にあったのだが今は割愛しておく。

一度殺せるとなると、リユーベンは驚くほどに心が冷えていくのが解った。

あれだけ『現場』の空気にざわついていた心が、『殺し』をトリガーに静まっていくのが解る。

また、日本人としての心は、これが『普通』ではないというのも理解していた。

しかし、いつしか形成されていた『貴族としての自分』は、これが普通だと許容していた。

日本人としては許せないだろう。

しかし、ここはハルケギニア。

倫理観から何まで全てが、平穏な日本とは異なる。

この肝の座り方も、この世界に順応してきた証なのだろうかと、リユーベンは双子月を見上げながら感慨深く思ったこともある。

つまり、今の彼は演習に対する無用な強張りは持っていないのだった。

正門前広場

リューベン達二人が広場に着いた際、三年生全四十八名、四小隊のうち二小隊は出発していた。

今回の演習は、十二人からなる小隊で、ゲルマニアの東西南北各辺境地での討伐演習だ。

今まで経験が無いわけではないが、今回は教官は付いていかない。

死のうが喰われようが、事故責任なのである。

さすがゲルマニアは過激だ。

貴族の学校にしてはなかなかシビアな制度ではあるが、原作でも主人公達が亜人狩りをしていたりするので、倫理的にはセーフらしい。

リューベンは『殺す必要』は理解できたが、そこらの線引きはいまだによくわからなかった。

教官がいらないという事は、小隊毎にリーダー、つまり小隊長が必要になると言うことだ。

ここで賢明な生徒ならその役割の難しさと利点を天秤に掛け、思考する。

立候補して失敗した日には折角三年間で得た校内の信用を無くすこととなる。

まあ失敗から学ぶことも多いわけで、普段なら大した問題ではない。しかし、今回はそのリーダーに全て責任がかかる。もちろんのこと、死人を出しても、だ。

つまりいつも以上に責任重大なわけである。

駄菓子菓子　　もとい、だがしかし。

いつの世にも上に立ちたがる人間はいるものだ。

その役割が実力相応の地位だろうが、完全に役者不足だろうが、関係なく。

ここにも

「ふん、ジェデラード。軍人たるもの行動は迅速にしろ。初めからこれでは先が思いやられるなあ」

（コイツが、同じ隊かよ・・・ジーザス！）

ブライアンに聞き既に知っていたが　　改めて目の前にとまた格別に嫌なものだと思った。

リューベンは、目の前で偉ぶる青年　　ビザール・フォン・グル
フンクに対してそれぐらいにしか思っていない。

グルフユンクからすれば、『霧雨』のダシに使われて憤慨だとか、色々有るのだろうか、知ったことではない。

しかし、あれだけ居場所が無くなったのに学校を辞めなかったり、あれだけ脅されてもこうして突つかかることを止めないことから、根性は以外とあるのだな、と、リューベンに変な感心もした。

無視するとまたウルサイので適当に付き合っつ。

「・・・すまん、グルフユンク。しかし、それはともかく、我らの隊はまだ私たち四人だけか？」

リューベンは『逆鱗事件』以来グルフユンクに敬称を付けていない。なんか色々メンドクサクになったのだ。

また、グルフユンクもそこに有り難いことに、そこには突っ込んでこなかった。

「どうやらその様だ。まったく、君といい、他の奴らといい、貴族としての自覚はあるのかねえ？甚だ疑わざるを得ないよ」

相変わらずの嫌みったらしさも慣れたらさほど苦痛ではない。

ちなみに、この場にいる四人とは、リューベン、ブライアン、グルフユンク、その取り巻きの一人（彼も同じチームだった）である。

既に不安満載だが、リューベンはこれから更に不安が増えることも

解っていた。

五分後、全ての隊員が門の前に揃った。

まずはリーダーを選定後、速やかに目的地に発つわけである。

と、その前に、リューベン達の小隊十二名を紹介しておく。

【仮称：第三演習小隊（小隊長選定後は、その名を隊名とする）
構成人員】

- ・ジエデラード（リューベン）
- ・ブルックリン（ブライアン）
- ・ノリンズ
- ・マルケス
- ・モントーロ
- ・グルフュンク（ビザール）
- ・ゴレイヌス（取り巻き1）
- ・サーリエ

・ロビスマン

・ブリューゲル

・エンニツヒ

・ユーストン

ちなみにコーネルは先ほど出発した残り二隊のうちの一つ
つ
まりリューベン達ではない方の隊に居た。

リューベンと離れたことを惜しがっていたようだが、ろくな理由で
はないだろうと、すぐに思考から追い出した。

さて、リーダー決めであるが やはりこの男が言い出した

「僕は、自分がこの役に相応しいと自負するわけだが・・・構わな
いかい？」

グルフユンクである。

やはりと言うべきか小隊長になりたがった。

リューベンは半ば予想していたし、亜人討伐ぐらいなら多少指揮官
が悪くともこなせるだろうと、口を出さないつもりだった。

しかし、いつもいつも彼の思惑は内側から瓦解するのであった。

ブライアンが口を開く。

「僕としては、リユーベンがやってくれると嬉しいな！」

その言葉にグルフUNKは露骨に嫌そうな顔をした。

しかしそんな彼を無視して、小隊の仲間達はブライアンに追従する。

「そうだな、僕もミスタ・ジェテラードでいいと思う」

「ああ、俺もだ」

「うん、グルフUNK君に任せるよりは・・・ジェテラード君、頼めるかな？」

（おいおい、面倒な流れになっちよるのう・・・）

やいのやいの言うみんなにリユーベンは声を上げる。

ちらりとみたグルフUNKは更に機嫌が悪そうで、今にもキレそうだった。

取りあえずなんとかするべくやってみる。

「ちょっと、待ってくれ。別に、私がやるのは構わない・・・が、本当に私でいいのか？私より年上の者もいる、何より、私はまだラインだが・・・」

我が意を得たりとグルフUNKはそこに口を挟む。

「そうだ！彼はまだラインなのだよ、君たち！！年下にやらせるのは遺憾じゃないかい？年齢も、クラスも上の僕こそがやるべきだろう？」

（心にもないことを・・・だがいいフォローだ！誉めてやるぜグルフンク！）

グルフンクの言葉に内心喝采を送りつつ皆の反応を待つ、が

「いや、指揮能力にクラスは関係ないし」

「それに悔しいが、ジェデラードがこの中で一番戦略実習の成績が高いしね」

「妥当なんじゃないかい？」

確かに、リューベンが戦略・観察眼にこの中では頭一つ抜き
んでていた。

伊達に前現併せて四十近く生きてはいない。

その上、もとより観察力はある方だった。

ブライアンも本気でやればリューベン並かそれ以上の万能型だろう
が、

その当人がリューベンを推した言い出しっぺなので、彼にやらせる
のは無理だろう。

リューベンが断り続けるのも埒があかないし、面倒だと感じたので、しばし躊躇いながらも小隊長を引き受けた。

無論、グルフンクは嘔みついてきた。

が、正式に多数決をとってリューベンに九票入ると渋々、実に渋々ながら取りあえずは引き下がった。

やけに引きがよかったので、後に聞いてみたのだが、曰く

『君がやるのは気に入らないさ。ああ、認めないよ。だが、僕は軍人であるべきだ。上官の命令に従わないような情弱な軍人ではないんだよ！覚えておきたまえ！！』

と、その上官に偉そうに返してきた。

リューベンは、『思ったよりもこの青年は悪いヤツではないんじゃないかな？』と、思い始めていた。

案外単純なものである。

まあ色々手間取りはしたが、やっと出発に到る。

第三演習小隊改め、ジェテラード小隊は、進軍を開始する。

一路、目指す目的地はガリアとの国境を側に持つ地、ゲルマニア東部直轄領・深き森生い茂る、ヴァシユタイン地方であった

この先で、彼らは『脅威』と遭遇することになる

行軍三日目。

行軍とは言っても十二人が体力を鍛えるために馬を昼夜走らせた、強行軍だ。

宿営予定地であるヴァシユタイン地方の山村についた頃には、既に皆疲労困憊だった。

この演習は十日にわたりヴァシユタイン地方に逗留し、一人十体をノルマとしての討伐を行う。

別に一人でやる必要はない。

人数を活用し、手早く100体ほど狩ればクリアのミッションだ。

ここいらの森にはこれと言った猛獣もおらず、亜人も大量発生しているわけではないので危険度は低いはずだ。でなければいくら軍人を目指しているとは言え学生にはやらせない。

リユーベンは周りを見回し、取りあえず小隊長としての責務を果たすことにした。

周りで一息吐いていた皆に号令し、集める。

「各自、ご苦労。ここまでは問題ない。しかし、演習はこれからが本番だ。万全を期すため、今日は此処に野営、明日から討伐に臨むものとする。そこに山村があるが、村人達には極力接触するな。無用な威圧感を与えるだけだ。・・・では、いいな？皆、これから野営の準備をしてくれ」

こんなものか、と、あらかた言い渡す。

村人と接触するなど言うのは、貴族が十二人もいきなり来たら向こうに迷惑がかりすぎると判断したためである。

リユーベンの指示を聞き各自すべきことをしだす。
グルフユンクも未だ渋々だが素直に従う。

軍人を目指しているだけあり、皆それなりの分はわかまえているようだ。

これが出世して増長すると使えないクズばかりになるのだが、下っ端のうち、しかも学生なのだから素直なものである。

取りあえず今晚の目処が立ち、野営の準備をする皆を端眼にリユーベンは村長あたりに説明しに行こうと足を向ける。

「おお、貴族様！この度はこのような寒村にどういったご用で・・・

「？」

村で一番大きな屋敷（あくまでも村レベルだが）を訪ね、出てきた村長は探るように訪ねてくる。

まあ普段は貴族なんが寄り付きもしないのだから、至って当たり前な対応ではある。

「・・・いや、我々は王都軍学校の学生でな。今回は軍学校の演習が目的だ。ここいらの亜人を討伐しにきたただけだ」

事情を話すと村長は安心し、顔を綻ばせる。

「おお！そうだったのですか！近頃は亜人の被害もめっきり減りましたが、昔は多くの者が襲われましてな。討伐して下さるとは有り難い限りですじゃー！」

「村の周りに逗留するだけだからな、村を荒らしたりはせん。安心してるといい」

「い、いえいえ！そんな恐れ多い・・・」

恐縮する村長に、リューベンは先ほどの村長の言葉に気になったことがあり、訪ねてみた。

「・・・村長、一つ聞きたいのだが」

「？なんでございませう？」

「先ほど『最近はめつきり減った』と言っていたな……？何か、あったのか？」

その問いに村長は少し考え、答えた。

「いえ、特に何もしてはおりんですが……五年ほど前からどうも被害が減りましてな。それまでは恐ろしくて森に入れなんだけど、静かになればなったで用心して近寄れんかったのです」

「フム……賢明な判断ではあるな」

リユーベンは森に何かが起きたのかと考える。

国から軍が派遣され討伐されたという話も聞かない。そうならば村長が言うはずだ。

しかも亜人種、ここいらではオーク鬼が主流であり、それらは3メイル近い体格に巨大な軀を持つ凶暴な種族だ。

そう簡単に森一つのオーク鬼共を黙らせる方法があるとは思えない。

しかし

（まあ考え出したらきりがない、か。忘れないように気に留めとくか……）

村長に一言礼を言い野営地に戻るリユーベン。

貴族様に何もせんのは申し訳ない、と、村長から押しつけられたワインのダース箱を三箱ほどレビテーションで浮かしながら、歩いてゆく。

その心には漠然とした引つ掛かりが残っていた

「ふむ、ブライアン。中々にみな手際が良いな」

「まあ、慣れたものだからね！つて、あれ？リユーベン、何だいそれは？」

「これか？そこの村の村長に話を付けてきた時に押しつけられた

」

そこまで言ったときに過剰に反応するヤツが居た。

「貴様！ジェデラード！！僕らには接触するなと言っておきながら一人だけ何処へ行ってたんだい！？いい御身分だなあ！！？」

リユーベンはこの三日で、学校での密度を超える付き合いとなった。グルフユンクの扱い方を心得てきていた。

「……村の周りで貴族が十何人も屯していたら村人達が落ち着かないだろう？それ故問題はないと話を付けてきたんだが……確かに何も言わずに言った私が悪かったな。済まなかった、グルフユンク」

素直に謝るリユーベンに、グルフユンクは得意げにしながらもそれ

以上は言い募ってこない。

彼もこの三日で疲れているのだろう。
リユーベンだつて今にも休みたいのだからそうに違いない。

隣の熊は全く披露の素振りを見せていないのだが。

相変わらずの化け物体力の持ち主だ。

野営を張り終え、夕食をとつたらすぐに休み、明日に備えるべきだ。

だが用意してきた食料は保存食であり、味気ない。

これでは疲れも抜けないだろう。

幸いリユーベンの後ろには3ダースものワインがある。

質が悪くとも酒は酒であり、労いのためと明日への士気高揚の為に
皆に配ってやることにした。

「皆！先程村に言つて話を付けてきた。村人達に邪魔されないよう
にな。その時に、貴族を放つては置けないという殊勝な村長がワイ
ンを譲渡してくれた。本来なら酒は控えるべきだが、厚意に甘んじ
て今宵はこれを皆に回そう。これで軀を癒し明日に備えてくれ！く
れぐれも言っておくが、飲み過ぎるな、よ？」

言つた途端隊員達がワツと喜びの声を上げる。

一人一本の安いワインとはいえ、やはり皆嬉しいようで、場の空気

も盛り上がった。

「ふう……さて、ブライアン。私は疲れたからもう寝ようと思うんだが……」

「ん！いいよ、まあ、僕の方が体力もある！それに君は小隊長殿で疲れているだろうしね？後は任せて休んできなよ？」

「……推し上げた本人に言われるとは……まあ、有り難い。甘んじて受けさせてもらおうか、な……それでは……」

そう言い残しリユーベンはフラフラと天幕へと入ってゆく。

どうやら3日間の慣れない小隊長役で一際疲れが貯まっていたようだ。

ここに来ての小休止で一気に気が抜けたのか、いつの間にか副官扱いとなっていたブライアンに今夜は任せることにしたらしい。

ブライアンはもう眠りに就いたであろう、年下の親友が居る天幕を見やる。

彼はブライアンの様に溢れる体力もなく隊で一番年下であるのに、此処に来るまでまるで疲れを表に出さなかった。

周りでは年上の仲間達がへ口へ口になっているのだ。

指揮官として、部下に己の無様を見せてはいけない。そうすれば隊

の緊張が緩んでしまうから。
だからこそ部隊の頭が毅然としていれば、それが年下だろうがその
隊は自然と引き締まる。
それが組織だ。

リューベンはそれを解っていてしっかりと役目を果たしているよう
だ。

なんだかんだ言って、因縁のあるグルフUNKを巧いこと御してい
たり、
しっかりと、自分の役割を期待以上にやり遂げる親友が、ブライア
ンは好ましくて仕方がなかった。

「しかしまあ、明日からが本番だけだね、リューベン・・・まあ、
君なら特に問題ないだろうね？」

ブライアンは酒を飲んだり寝に入ったりしている隊員達をみながら、
此処にいない親友に話しかける。

カラカラと、彼特有の明るい笑いは絶やされることはない。

彼もまた、リューベンにとって『この世界で』既に欠かせな
い親友なのだった。

ふと

何処からか狼の遠吠えが聞こえていた

続く

第十一話 討伐演習にて（後書き）

今回名前しか出なかった隊員達は、次回以降で何とか使い切りたいです・・・

まあ多すぎるので半分ぐらいしか出番ないでしょうが（オイ

第十二話 独牙強襲にて（前書き）

おざなりな戦闘描写・・・いかんせん書きたいことが書き切れたのが、不安です

が、やりたいことはやりました

第十二話 独牙強襲にて

光射さない暗き森の中。

生い茂る木々をかき分け、ジェテラード小隊の面々は黙々と目的地を目指していた。

やがて、誰かが声を上げた

「あ、アレだ！見えたぞ！」

眼前には一つの洞窟が存在していた

第十二話 独牙強襲にて

時は少し遡る

リユーベン達は道無き道をひた進んでいた。

本来の目的たる亜人討伐のために、早朝に野営地点を発ち、既に三時間は歩き詰めだった。

その間、リューベンとはある懸念を抱き、すぐ後ろを歩く親友に話しかける。

「……ブライアン、ここまで静かなのは、何か、ある……注意しておいてくれ」

「僕もそう思ったところさ、ここは、少しばかりオカシいね……了解だ！隊長殿」

そう、『静謐』に過ぎるのだ。

森の中とは本来多数の生き物がひしめき合っ、言わば『生命』の溢れる場所である。

そんな所であるから、生命の息づく音が聞こえて来るものだ。

しかし、この森は何かが『異常』だ。

異常なまでに生命の息吹が感じられないのだ。

『静かすぎて耳が痛い』ぐらいと言える。

どうやら野生派で、山歩きも得意な親友も同じように思っていたらしく、すぐに言いたいことは伝わった。

後ろは彼がそれとなく警戒してくれるだろう。
ならば　　自分は前方から注意を逸らさないまでだ。

と、一人の隊員が声を掛けてきた。

「・・・ジエデラード君、隊列が乱れてきた。皆、そろそろ注意力が散漫になっているみたいだ」

リューベンのすぐ前を歩く彼　　ノリンズは、リューベンに一声掛けさせ、隊を引き締めると言っているらしい。

薄い翠髪の短髪に糸目の穏やかそうな、見た目通りに他人の感情の機微に聡い気を遣える男だ。

リューベンよりも三歳年上である。
成績も、リューベンより少し下ぐらいであるが、彼は人の上に立つような目立つ男ではなかった。

リューベンとしては別に彼が小隊長で良かったんじゃないかと思いましたが、
ブライアン同様彼は引き受けてくれそうには無い。

「・・・ああ、ミスタ・ノリンズ、その様だな」

リューベンはノリンズから目を離し、少しダラケた感のある仲間達に響くように、しかし声を抑えながら号令を出す。

「全隊、気を緩めるな・・・！ここが危険地帯であることは間違いない・・・！一人の油断が隊全体を危機に陥れる。各自、渴を入れ直せ！！」

リユーベンの言葉に慌てて背筋を伸ばす年長者達。

元から気を抜いていなかった者達はリユーベン、ブライアン、ノリンズを抜いても三人ほどしかない。

まだ接敵もしていないのにと、不安が募った。

するとノリンズが笑いながらこちらを向く。

「ハハ、流石だねジェデラード隊長。・・・しかし、静かだね・・・皆も、この静けさに無意識の内に不安になっているみたいだ」

リユーベンは、何故彼ほどの男が取り立てて目立たないのか解らなかつた。

「ああ、だからこそ、少しは浮き足立つのも致し方ないだろうな・・・

しかしミスタ・ノリンズ？君はやはり人の感情を読むのが巧い。君こそ指揮官に向いているだろうに・・・」

その言葉にノリンズは糸目を少し開けながら、ハハツ、と笑った。

「そうだね、この隊は縁の深い友人も多いわけじゃなかったし、指揮官訓練も兼ねて初めは僕が引き受けてもいいかと思っただが

・・・君がいたからね、ジェデラード君？僕も火のラインだし、同

じラインであるなら君の方が適任さ」

三歳年上の部下は何を持って適任と言ったのか、
リューベンには解らなかったが口は挟まず続きを聞く。

「それに、僕は指揮官位なんてホントは向いてないさ。自分で言うのもなんだけどね？僕はどちらかという副官向きなんだよ。

あ！それに、僕のことは呼び捨てでかまわないよ？今は君の部下だからね、上官殿？」

「そう、か・・・解った、ノリンズ」

リューベンは、気負いなく笑うこの青年がそう言うのならそうなのだろう、と、妙な説得力に納得していた。

確かに、彼のような細やかな人間は、固い上官と奔放な部下を繋ぐ副官のような仕事にはもってこいの人材だろう。

(・・・何にしる優秀じゃないか)

今は前に向き直り、行軍を続ける先達の背中を見ながら、そう思った。

更に歩き続けること一時間

時は冒頭へと戻る。

「あ、アレだ！見えたぞ！」

今日の目的地である洞窟 オーク鬼の住処を発見したのだ。

リューベンは一度隊列を止め、皆に言葉を掛ける。

「……皆、ここが今日の目的地である、オーク共の巣窟だ。これより討伐に移る。全隊、戦闘準備！」

「」「応！」「」

いざ戦闘と相成り、皆の空気も引き締まる。

リューベンは十二人を更に三隊に分け、四人一組の分隊で担当を分けることとした。

巢から標的共を炙り出す初動隊 この分隊長はノリンスである。

彼ならば落ち着いて皆に指揮できるだろう。

そして、出てきた標的を定めた位置に誘い込み足止めする陽動隊

これはリューベンの入る隊で行う。

タイミングがシビアであるため、全隊の総括をしながら合図を出すためである。

最後に、足の止まったオーク達を魔法で一気に殲滅する止めの部隊なのだが・・・

「任せたまえよ！僕にこそ相応しい役割だ！解ってるじゃあないかジエテラード！！僕の風魔法、とくと見るがいい！！ハツハハハハ！！！」

「んん・・・任せたぞ、グルフונク・・・」

（大丈夫かよ・・・まあ、一応トライアングルだし、止めぐらいならこなすだろ・・・うん）

高笑いをあげながら所定の位置に向かう止め役の分隊長　グルフונクに、そこはかかない不安を感じた。

しかし、彼もやっていいことと悪いことの区別は付いているだろうと、この旅を通して薄々解ったし、あまり抑えつけても反発するだろうと思い、目立つ役をくれてやったのだ。

チームプレイであるため、過剰な大技は使わないように言い含めたが、渋々了承していた。

ちなみに、この小隊にはトライアングルメイジは三人。

ブライアン、グルフונク、それともう一人　それについては後で語るが　　だけであり、残りの九人はリユーベン含め、皆ラインメイジだ。

各分隊に一人づつ振り分けて、一応バランスを考えた編成となっている。

ふと、初動部隊のノリンスからハンドシグナルが送られてくる。

各員が配置についたようだ。

（ さて、始めようか・・・ ）

「作戦開始！！」

こうして討伐演習の初日は始まった

ドスドスドスドス・・・

『プギイーン！！...』

森の中に鈍重な足音と、獣じみた叫び声が幾多と重なり合いながら、鳴り響く。

「・・・よし、出たぞ！エンニッヒ！ブライアン！足場を落とせ！」

「イエッサ！」

「了解だよー！」

ズドン、と、地面が陥没した。

洞窟の外で待ちかまえていた陽動部隊は、ブライアン、エンニツヒと言う二人の土メイジにより大穴を作成していた。

初動隊に炙り出されたオーク鬼の群は、見えているだけでも二十五匹　こちらの人員の倍以上の数だ。

洞窟前の広場は既にオークで一杯の状態となっている。

しかし、リユーベンは焦ることなく指示を出す。

二人の作り出した穴に続々と落ちていくオーク。

「落ちたな、次だ！ロビスマン！」

「了解っ！」

ロビスマンと呼ばれた生徒によりオーク共の真上に水球が作られた。

その直後、穴を開け終えたブライアンが水球を油に錬金する。

『！！？？ブキイイイ！』

・・・一人トリップしている奴がいたが、概ね予定通り。

ドゴオッソ！

彼らの魔法の内の一つに油が引火し、穴の中から火柱が上がる。

「『エアカッター』！『エアカッター』！『エアカッター』！『エアカッター』！これおれでえ、終いだよオ！『ウインドブレイク』ウウウウ！」

未だ風を送り続ける奴のお陰で火勢は衰えるどころか、勢いを増すばかりだ。

『ブギイイイイイエエエ・・・！！！？』

オーク共の断末魔が聞こえ、今回の作戦はこれでクリアだと解る。

未だ轟々と火は燃えさかり、
暗い森の中、その火柱が辺り一面を赤く染め上げた。

「フハハハハハ！見たかね！？この素晴らしき風の恩恵を！！！」

「わかった・・・ああ、わかったグルフユンク。ご苦労だった・・・」

「

テンションの高いグルフUNKをあしらいながら、リューベンは巢穴の洞窟を確認する。

先程ので殺し尽くしたようで、どうやら中にはもう残っていないようだ。

これで、この場の安全が確認できたと、リューベンは一息吐いた。

と、洞窟の方から初動隊の面々が帰ってきた。

「巧くいったみたいだね、ジェテラード君」

「ああ、ノリンズ。そちらも巧くやってくれたようだ。ご苦労だった。この調子で行けば、残り2、3も巢を潰せば演習も終わるだろう。」

「いやいや、僕は特に何もしてないさ。ブリューゲルが一人でやってくれました」

「・・・」

「おや、ブリューゲル？いつの間？」

ふとノリンズの背後から近づいてきたのは、件の男
ブリューゲルだった。

ブリューゲルは、初動隊に配置されていた三人目のトライアングルメイジであり、属性は『火』である。

二つ名を『紫煙』と言う。

煙草でも吸ってるのかと言いたい名だが、彼は至って真面目な男だ。

トライアングルである事を誇る以前に、極度の無口な男であり、声をほとんど聞いたことがない。

それに、無表情もデフォルトで装備しているため、リューベンには時々彼の考えが全く読めない時があった。

「……」

「ハハ、お疲れさまブリューゲル。さつきは助かったよ」

「……」

「え？ああ、洞窟ならマルケスが埋めておいてくれたよ。また棲みつかれても厄介だしね。ねえ、ジエデラード君？」

急に話を振られ、リューベンは少し焦りながらも返答する。

「……アン？あ、ああ、そうだな。適切だと思う、が……」

「……」

「ハハハ、そんなに心配かい？まあ、それは帰ってからの楽しみだね？」

何事かの会話を終えたらしく、ブリューゲルは皆の所へと向かって歩いていった・・・の、だが

(えー・・・??)

リューベンの呆れたような、戸惑った顔に気づいたのか、ノリンズが話しかけてくる。

「おや？どうかしたのかい、ジエテラード君？そろそろ隊をまとめないと」「あ、ああ、解っているが・・・彼は、何と聞いていたんだ？」

「彼？ああ、ブリューゲルかい？いやね、演習で十日も寮を空けるだろう？」

それでこの森の中になると、部屋に残してきたサボテンとかいう東方由来の植物を思い出したらしくて、心配になってきたらしいんだよ

「サボテン・・・」

まったく変わった奴だね、と、ハハハと笑っているノリンズ

(あの会話にそんな情報量が・・・何でコイツ通じてんだよ・・・?)

アンタも大概に変わってるだろう。とは、何となく言えなかった。

隊をまとめるため、リューベンは副隊長であるブライアンの元へ移動した。

彼は焼かれたオーク共の死体に土を被せ、穴を埋めているところだった。

「・・・なあ、ブライアン」

「あれ？リューベン、どうかしたのかい？こっちはまだ終わってないけど」

「ひどく今更なんだが・・・」

「？」

「私の周りには、変人ばかりいないか・・・？」

ブライアンは杖を振る作業を止め、リューベンに向き直る。その顔には呆れが浮かんでいる。

「本当に何を今更だね？大体、君自身が十分変人だと思うよ？」

「……それはないだろう」

「え?! 自覚無いのかい?」

リユーベンはジトリと親友を睨む。

が、当の彼は彼で、リユーベンの無自覚さに対して呆れていた。

「まあ……いい、か。それが終わり次第隊を纏めて帰陣しよう。
今日はここまででいいだろう」

「……はあ、そうだね」

二人は、ひどく脱力感に苛まれつつも、指示を出そうと動き出す。

こうして、なんかグダグダな感じで一日目は終わったのであった

「みんなも小慣れてきたようだね、この森に。とつやら杞憂だったかな?」

「……ああ、そうだな。そうであればいいが……」

あれから三日経ち、演習も四日目となっていた。

この演習は十日を目処にしているので、

王都までの往復に6日、

討伐に4日を予定としていた。

つまり明日から帰還するわけで、今日が討伐の最終日となるわけである。

リューベンとブライアンが話していることは、初日に感じたこの森の『異常』についてである。

彼らはこの三日、周囲に気を配るのを忘れはしなかった。

だが、昨日、一昨日と討伐を続け、オーク鬼の巣を2、3殲滅したが、

これと言った問題は発生しなかった。

ただ、気になることは少しばかりあった。

「……しかし、ブライアン。昨日崩した二つ目の巣、あれをどう思っっ、」

「ああ、あれか……確かに、少しおかしかったね」

昨日 三日目にもなると、ジエテラード小隊の面々は少し討伐に慣れてきていた。
それが緩みに繋がらないのであれば、別に悪いことではない。
この演習の目的である、『経験を積む』ということが出来ている証である。

昨日の討伐では、一日に二つの巣を落とした。

人員に被害が出るでもなく、問題なく事は済んだのだが、二人には気がかりがあったのだ。

「やはり、オーク鬼の数、か・・・」

リユーベンは思わず言葉をこぼす。

昨日の二つ目の巣には、オーク鬼が少なかったのだ。

一般的な巣であれば、初日のように20〜30匹のオークが群をなしている筈だ。

しかし、件の巣には僅か10匹あまりしかいなかった。

それだけならば、群の個別差として誤差だとも言えただろうが・・・

「それに、奴らの負っていた傷が気になるな・・・」

「あそこに居た殆どが大怪我してたみたいだからね・・・」

「恐らくアレは噛み傷の類だろう・・・」

そう、10匹全てのオークが傷を負っていたのだ。
それも今にも死にそうな大怪我ばかり。

隊の何人かは『楽でいいじゃないか』と、喜んでいたようだが、
人はしっかりと違和感を感じていた。

恐らく群の数が少ないのと、その傷は関係しているのだろう

つまり、この森にはオークの群すらも傷つける『何か』が潜
んでいる・・・

(久々に嫌々な、予感がするんですけど・・・)

「・・・まあ、何にせよ今日で終わりだ。何事もないように祈ろう。
・・・」

こみ上げる不安を抑えながら、彼らは目的地を目指し森を歩く・・・

しかし、リューベンは『悪い予感ばかり当たる』という自己

分析を、忘れていた

「……な、なんだよ、コレ……!?!?」

それは、誰がこぼした言葉だろうか。

ジエデラード小队の面々は、皆眼前の惨状に絶句していた。

「……ジエデラード君……これは……」

「……」

普段の落ち着きが嘘のように、顔を青ざめさせたノリンスがリュウベンに問う。

だが、当のリュウベンも今までないぐらいに混乱していた。いや、少しばかり予想はしていたのだ。

だが、コレは予想を遙かに上回っていた。

(……マズい、マズいマズいマズい……!?!?! 『異常』ってのはコレかっ!?!?)

彼らは目的地　　オークの巣穴に到着していた。

そこで待ち受けていたのは　　文字通りの『血の海』だった。

引き裂かれ、噛み切られ、砕かれ、ブチマケられ、穿たれ、喰い荒らされ、潰され、引き千切られ、喰い千切られ、抉られ、押し潰され、引き擦られ、卸された　　無数のオークの死体があった。

数にして60程だろうか。

殆どが原形を留めておらず、判断し難い。

「ひい!？」

「うつぶ・・・!？」

あまりの壮絶な光景に、怯え、吐き気を催す者もいる。

彼らだって、昨日までこれらを殺してきたのだ。

だが、それらは焼かれ、埋められ、凍らされ処理された。

それらに比べ、この光景はあまりにも『血生臭かった』。

リユーベンは早鐘を打つ心臓を抑えながら、隊員に呼びかける。

「総員集まれ！……ここは、明らかに『異常』だ……！速やかに撤収する！隊列を組み直せ！！」

その声は固まっていた皆に行き渡った。

皆異常をひしひしとかんじたのだろう。

この言葉に反発する者は居なかった。

グルフユンクすら、顔を青くさせながら黙々と従っている。

「……リユーベン、杞憂じゃ済まなかったみたいだね」

「……ああ、実に、厄介だ、な」

いつもの大らかな空気を完全に消したブライアンが、リユーベンの後ろに付く。

二人とも　　いや、隊の全員が、早くこの場から離れたかった。

本能的に危機を感じ取っていた。

ガサリ……

「！！！！」

森の一角がざわついた。

「なんだ・・・？」

「今、なんかすごいたんじゃ・・・」

「お、お前、見てこいよ!？」

「な、いや!お前が」

途端にざわめき出す隊員達。

リューベンは鎮めようと声を上げようとして

「静かにしたまえッ!!!」

「「「!」」」

ざわめきは、別の声に遮られる。

「まったく・・・皆落ち着きたまえよ?貴族たるもの、憤みが大切だよ?」

リューベンに先んじて声を上げた　　グルフュンクは言う。

「見たまえ、ただの風だろう。何も居ない、全く、風は素晴らしいが、悪戯好きで困るねえ?まあ、そこが風の魅力でもあるが」

グルフュンクの的外れな演説が皆に聞こえ渡る。

どうやら、皆呆気にとられたようで、既に場は落ち着いていた。半ば強がりみたいなものだろうが、確かにグルフユンクは皆を鎮めて見せたのだ。

(へえ、案外やるなあ・・・やっぱりそこまで悪い奴じゃあ、ないか・・・?)

リユーベンは、今が危機的状態だと理解していながらも、グルフユンクの評価を改め直す。

と、視界の端に、森の一端を睨みつけるように押し黙るブリユーゲルを見た。

普段から無表情な彼が、珍しく厳しい顔でとある一点を睨んでいる。

(・・・どうしたんだろう?何かあるのか・・・)

「さて、どうやらジェラード隊長殿は帰還を命令されたようだね?確かにこんな場所にもいい気はしないよ。仕方がない、皆、帰るとし」

「グルフユンク!!」

押し黙っていたブリユーゲルが、今まで聞いたことのないような大声で、

朗々と語り続けるグルフユンクの名を叫ぶ。

「なんだね・・・ヒエ、ウガッ!？」

「!?!?!」

「な、何!？」

グルフユンクをはじめ、多くの者が、彼の後ろに立つ『黒い影』に気が付いた。

その『黒い影』は振り向きおののいたグルフユンクを殴り飛ばすと、血の海の中央に躍り出た。

「グルルルア・・・」

『黒い影』はその場に立ち尽くし、低く唸り声をあげる。

やがて皆、その『黒い影』がどういう『モノ』あるか理解し、再び恐慌状態に陥る。

「う、うわああああ!？」

「グルフユンク!？おい、大丈夫か!?!？」

「ひい、た、助けてくれえ!!」

「なんで『こんな奴』がここに・・・!?」

リユーベンは舌打ちした。だが、余裕なんてモノは全くと言っていいほど吹き飛んだ。

心臓も既に、これ以上ないほどの拍動を打っている。

やけに静かな森

村長の言葉の理由

オークの群に残された噛み傷

そして、オークを惨殺するほどの『強者』・・・

全てが眼前の『モノ』に繋がった。

察したとおり、『異常』とは『コレ』のことだった。

(なんて運が悪イんだよ・・・!?まさか、こんなところで・・・)

「ワーウルフ(人狼)・・・!!」

眼前に立つ『モノ』　ワーウルフは、
リユーベンの声に反応したかの如く、ギラリ、と
血塗れの犬歯をむき出しにした。

『アオオオオオウン!!』

ビリビリと、空気を震わす雄叫びをあげるワーウルフ。

血の海に立ち尽くすその姿は　彼らにとっての
『脅威』そのものだった

ハッ、と、誰が一番先に動き出しただろうか。

「か、適う相手じゃない!!逃げろオオーー!!?」

「そ、そうだ、殺されるウウー!!?」

「待てっ!!?!迂闊に動くな!!!」

リユーベンは一瞬とは言え固まっていた己を叱責する。

指揮官たるもの、戦場で呆けるなどもつてのほかだ。現に、恐慌に陥った隊員の一人が怯え、逃げ出す。

そして、三人ばかりがそれに追隨して森の中へと走り去っていった。

別に逃げることは構わない。

確かに伝説級ともなる亜人種『ワーウルフ（人狼）』など、学生風情の手に負える相手ではないからだ。

だが

（大声出すな！！奴を刺激してんじゃねえよこのアホウ！！？）

無論、彼も怒鳴り散らしたいのを押し留め、我慢する。

強者との闘争、それも野生の幻獣などから逃げるのに、喚き散らして相手を刺激するなどもつての他だった。

そして 既に奴を刺激してしまった。

逃げ出した者達の残した代償は、残った8人に降りかかってくるのだ 圧倒的な『暴虐』という形となって

（クソッ！どうする！？グズグズしてたらいい餌だ・・・！？）

リユーベンは逃げ去った奴らは放置して、目の前の危機を乗り切る

方法を必死に思索する。

ここで皆して背中を見せて逃げ出せば、森の中は奴の独壇場であり、各個喰い殺されていくだけだろう。

四人は助かるかもしれないが、
四人は死ぬ。

そんなことは出来なかった。

(考える！考える！考える！奴を振り切るには……！?)

と、その時。

「……クッ!？」

ワーウルフとリューベンの『眼が合った』。

それに触発されるようにワーウルフは動き出す。

血の海をの隙間を軽快に跳ねながら、一直線にリューベンに向かってくる。

リューベンは『危険だ』解っていても、先程の視線に射すくめられたのか、
体を動かすことが出来なかった。しかし、それに対して反応する人間が二人居た。

「リユーベン!!」

「オオオオオ!!!!」

ブライアンとブリューゲルだった。

ブライアンはリユーベンの名を呼びながら、
ブリューゲルはやはり彼らしくない雄叫びを上げながら、
しかし二人とも同じようにワーウルフの前に身を踊らせた。

リユーベンは二人の行動にハッ、となり、
また、体の動きを戻すことが出来た。

(クソッ!また俺は・・・!!)

同じ失態を繰り返し、自己嫌悪に陥るリユーベン。

だが、今はそれどころではない。

すぐさま対応するため、先んじて動いた二人に指示を出す。

「二人とも!助かった!

奴を近づけさせるな!懐に入られたら殺とられるぞ!!」

逃げ出さず、残っている他の者達は皆完全に萎縮しきっている。

殴り飛ばされたグルフUNKは、どうやら気絶しているだけらしい。

そのことに一旦安心し、意識を前に引き戻す。

(こっちの手札は俺と、この二人だけ・・・だが、乗り切るしかない!!)

幸い、リユーベンの両側に立つ二人は、仲間内でも最も頼れる二人だ。

自分が足を引つ張らない限り、うまくやれば撃退できるかもしれない。
リユーベンはそう思うこととした。

「ブライアン！足留めする!!」『槍』を頼んだ！ブリューゲルは時間を稼いでくれ！」

「了解っ！」

「・・・」コクリ

かたやハキハキと、かたや無言で頷き、肯定する。

ブライアンはリユーベンの言葉を受け、付近の岩から先の尖った石柱を削り出す。

ワールフを囲むように、六つほど精製されたそれに、リユーベン

は魔法を上乗せする。

「『ウォーター・サークル』!!」

リューベンの鉄杖から放たれた水の円環は、『槍』の一つ一つを繋いでいく。

そして、それらはまるでプロレスのリングのようにワーウルフを囲んだ。

これは、ブライアンとリューベンがこの二年の間に作り上げた『牢』の魔法だ。

ブライアンの土牢だと精製に時間がかかり、リューベンの水牢は強度が足りない。

ブライアンの最速レベルで出せる『ストーン・ランス』を、ラインメイジのリューベンでも作れる『ウォーター・サークル』で結び、固定する。

リューベンが水牢を作ると、ライン分の魔力しかないので全体の強度が脆くなるが、

この方法だと槍を繋ぐことだけに力を注げばいいため、水環の強度は上がる。

これは、二人の作り出した、『速く』『堅く』を目指した『合体魔法』と言えた。

研磨された石柱に水が絡み付き、キラキラと光って見えることから、

ブライアンが洒落て付けた名を

「グルルアア!？」

「・・・決まったようだね『ジュエル・プリズン（宝石の牢）』！
! やったかい？」

石柱牢に囲まれ、動きを阻害されたワーウルフはしきりに身をよじり、
魔法が成功したと見て、ブライアンは油断することなく、しかし一旦安堵した。

（おい、ブライアン・・・それなんてフラグだよ）

ブライアンの死亡フラグ発言に少し焦りながらも、そう考えるだけの余裕を取り戻したりユーベン。

「ハア・・・油断するなよ、ブライアン」

「ああ、わかってるさ！ブリューゲルも時間稼ぎありがとう!！」

「・・・」コクリ

案外とアツサリ無力化でき、リユーベンは少し拍子抜けした。
場の空気は未だ張りつめながらも、すこし緩みを見せる　　が、
しかし

バキイイイン！

「ゲルウアアアア！！」

「！！！！」

「なっ！？」

「マズツ・・・！！？」

ワーウルフは、その体を拘束していた石柱を噛み砕き、牢から逃れた。

『伝説級』の力は、リューベン達の予想を遙かに上回っていた。

「グオツ！？」

「ブライアン！！！！？」

ワーウルフは起き上がり様にブライアンへと、鋭い蹴撃を叩き込み怯ませた。

そして次に、速すぎる魔法の無力化と蹴り飛ばされた親友に動揺し、動きを止めてしまったリューベンにその爪をもって切りかかった。

「ッ！！ガアッ、クソッ！！！！？」

軍学校での肉体訓練のお陰か、リユーベンはこの奇襲に反応できた。ガキリ、と、リユーベンは鉄杖を咄嗟に前に突きだし、爪から身を守る。

が

「ガアアルアアー!!」

「っ!!うわっ ツギ!!!?」

「ぐ、ゲホツ・・・リユーベン!?!」

「ッ!!」

強力を誇る腕により、リユーベンは掴まれた杖ごと放り投げられ、オークの巣になっている洞窟の岩場に叩きつけられる。

トライアングルの二人は、その行動の剰りの早さに見ていることしかできなかった。

ワーウルフは吹き飛んだリユーベンへと距離を詰め、背中を強打し悶え苦しむの首に爪をかけ、体の上にのし掛かった。

「ぎいつ、ツ、ハアツ、ハツ、クソツ・・・!」

リユーベンは何とか逃げようと足掻くが、がっちりと押さえられており、身動きが取れなかった。

(ヤバイヤバイヤバイヤバイ!? 舐めてた!? 油断した!!! このまま喰われる・・・? 嫌だ・・・!!)
クソ! こんなところで死んでたまるか!! まだ嫁も貰ってねーんだよ!! アニエスだって待ってんだ!! それに原作乗り切るまで死ぬるかよ!!! アア!? クソクソクソツ!!!)

諦めてたまるものか、と

リユーベンは必死に足掻いた。

ワーウルフの腕を引っかき、足をバタつかせ、対面など気にせず必死に抜け出そうとした。

と、彼の眼とワーウルフの眼とが再びかち合った。

(　　っ、え?なんだ、コイツ・・・?)

ワーウルフの眼には、決して今まさに獲物を食らおうとする獣が持ち得ない感情　『寂しさ』と、呼べるものが見えた。

(・・・いや、まさかコイツ・・・)

リユーベンは、その矛盾した、不思議な瞳に見入っていた

その刹那

ドゴオオン！

「グルアツ！！」

「ぐがつ！？」

爆炎がワーウルフに直撃した。

リユーベンはゲホゲホと解放された咽をさすりながら、何が起きたか理解した。

炎の来た方向を見れば、身の丈　　1　5メートル程の長杖を構えながら駆け寄るブリユーゲルが見える。

彼が助けてくれたようだ。

（　　ゲホツ、ゴホツ・・・助かった・・・ツ！有り難うブリユーゲル！！）

リユーベンは先程の『眼』のことは一旦頭から追い出し、状況を打開するために動き出す。

だが、吹き飛ばされ絞め殺されかけたダメージは思ったより大きいらしく、今にも意識が途切れそうになるも、体に鞭を打ち立ち上がる。

ワーウルフは一度三人から距離を取ったようで、再びこちらに飛びかかるうと機を凶っている。

(今がチャンスだ・・・！今しかない・・・！どっする、どっすれば・・・ん？そうか！)

ふと、リューベンは今さっきまで押しつけられていた地面を見やっ
た。

水のメイジである彼だからこそ、微量ながらその『音』を聞き取れた。

目の前では今にもワーウルフが襲いかからんとしている。

リューベンは意を決し、残る力を振り絞り声を上げた。

「ブライアンツ！！『足場』を落とせ！！！！」

「な、何だって！？何をいって」

「いいから！速くしろ！私を信じるブライアンツ　！！！！」

ブライアンはいきなり叫び出すリューベンに戸惑ったようだが、意を決したように杖を振る。

その瞬間、ワーウルフは弾けるように地面を蹴り、飛びかかってきた。

「ええい！信じたよりユーベン！！」

『アース・ブレイク』 ！！

トライアングルメイジたるブライアンが、全力で地面を砕く。

と

ボツゴオオオオンン・・・！！！！

森の一部であるはずだった地面は崩れ落ち、真っ暗な空洞へと吸い込まれていった。

「コッツ！！！！」

思わぬ事態に、ワーウルフも、今までの経緯を見ているしかできなかった小隊の面々も、

やった張本人であるブライアンすら、驚きに眼を見張り

そして、なすすべなく落ちていくしかできなかった。

「君を信じた僕が悪かったのかいリユーベエー！ー！？」

「・・・」フルフル

「グルオオオオン・・・！！？」

親友に文句を言いながら、無言で諦めたように首を振りながら、遠吠えしながら と

各々違うリアクションを見せながら、落ちていく者達を見ながら、元凶たるリユーベンは

（あ、みんなは逃がせばよかったな・・・悪いことしたかなあ）

次第に薄れゆく意識の中で、自覚があるのかないのか解らないことを考えていた。

そして、ジェテラード小隊の八人とワーウルフは、地下空洞へと消えていった・・・

続く

第十二話 独牙強襲にて（後書き）

まだまだ続く、この流れ

書きたいことは頭の中にありますが、
筆はかどらない不思議

第十三話 迷子小隊にて（前書き）

前回からかなり時間がたってしまいました・・・

大したこと無い内容なのにかなりの難産

なんででしょうか・・・

第十三話 迷子小隊にて

むかしむかし

韻竜達が空を舞い、

始祖の御子達が世を治めていた頃

そこに一匹の狼がいました

その狼は人を喰らい、鬼を喰らい、竜を喰らい

やがて一匹の人狼となりました

人狼はますます食べるのをやめません

男を喰らい、女を喰らい、メイジを喰らいました

王様達は放つてはおけぬと、たくさん騎士、たくさんメイジに
その人狼を討たせに向かわせました

しかし、誰一人として帰ってきません

みんな、人狼に食べられてしまったのです

ハルケギニアの東の果て、火山の麓に繁る魔界、
ヴァシユタインの深い森にその人狼はいました

宵闇のような黒い体

朝焼けのような灰色の眼

そして、すべてを引き裂く爪と牙

彼の者の名はアラーノフ

『哮る魔狼』アラーノフ

そう、よばれていました

ゲルマニア伝承

『ゲルマニア魔狼伝説』

より抜粋

第十三話 迷子小隊にて

ピチヨン　　ピチヨン・・・

「ウ、ア・・・？こ、こは・・・」

リユーベンは耳に入る水滴の音に意識を浮上させた。

体を起こして周りを見ると、どうやら自分は苔むした平たい岩の上に寝かされていたようだ。

そんなリユーベンを見て、ブライアンが駆け寄ってくる。

「リユーベン！目を覚ましたのかい！良かった！体は大丈夫かい？」

「・・・ああ、ブライアン。大丈夫、有り難う。ここは・・・『下』だな？」

ブライアンは体のことも早々に切り上げ、状況の把握に努める親友

に少し呆れた。

「リューベン・・・そうだよ。まあ、君が指示したんだしね？流石に分かってやったんだろう？」

「ああ、まあ、な・・・」

現在彼らが居る場所は、地下空洞だ。

どこからか明かりが入っているらしく、ほんのりと辺りが見回せる。広さは50メートル程だろうか。

中央にはそれなりの大きさの地下水流があった。

先程の地盤崩落によりここに落ちてきたらしい。

いや、『逃げてきた』のだ。

リューベンは、ワーウルフに組み伏せられたときに、微かに地下を流れる水流の音を感じた。

そこに空洞がある　と。

それこそが、ワーウルフから逃げるために、リューベンが『足場を崩せ』と言った理由だった。

「しかし、ビックリするじゃないか！結果的に助かったから良かったけど？でももう少し心の準備ってものが・・・」

「ああ、悪かった、悪かったよブライアン。だが、仕方なかったんだよ」

「いや、分かってるけどね。言っただけだったから、気にしないでよ!」

「・・・はあ」

緊迫感のない会話をしながら、二人はいつもの気安い空気を取り戻していた。

「私は、どれほど寝ていた?」

「君がかい?ここに落ちてきてまだ三時間ほどだね。外はもう夕方近いかもしれないけど、みんな疲れていたからね。休憩しながら君が起きるのを待ってたんだよ」

「フム、三時間、か・・・そう言えば、他の皆は無事だったのか・・・?」

「ああ、そうだね」

リューベンがふと気になり、ブライアンに尋ねる。

と

「・・・」

「おーうい、起きたのかジエテラード！」

「戻ってきたみたいだよ」

リユーベンは声の方向に目を向ける。

洞窟の奥ほどから赤と灰の二人の青年がこちらに歩いてきた。

「ブリューゲル、エンニツヒ・・・」

「・・・」コクリ

「やっと目え醒ましやがったか！心配したぜ、隊長殿？」

二人　赤髪の青年ブリューゲルと灰髪の青年エンニツヒは、目を覚ましたリユーベンを見てひとまず安心したようだ。

「二人、だけか？」

「え？ああ、いや、他の奴らならそこいらに居るはずだ。それと、ホラ、そこにも一人」

「ン？」

リユーベンはエンニツヒに指された方向を見る。

「ぐ、うんぬ・・・」

「・・・無事だったんだな」

「ハハハ、彼の悪運は強いみたいだね！」

そこには、顔面を腫らし、気障つたらしい美形が台無しになったグルフユンクが、うなされながら眠りこけていた。

顔面の腫れはワールフにやられた時のものだろうが、それを冷やすように氷が当てられていた。

仲間の水か風のメイジの誰かに氷を作って貰ったのだろう。

その奥にも三人ほどの隊員達が座り込んでいた。

その内二人が軽く負傷したようで、残りの一人（水メイジだった。おそらくグルフユンクの氷も彼が作ってくれたのだろう）に見て貰っていた様だ。

「あの場で巻き込まれた者のはみんなここにいるよ。いや、運が良かったね？水脈に落ちていたら、流されてバラバラになっていたところさ！」

ブライアンは不幸中の幸いだね、と、ばかりに頷いている。

リューベンは人数を数え、あることに気づく。

「八人・・・逃げたのは、四人、か」

あの時森の中へと走り去った仲間が四人。

この場にいない顔ぶれを思い出す・・・

その中の一人に思考を巡らすと、リューベンは静かに瞠目した。

「　　そうか、ノリンズも、逃げた、か」

リューベンには、逃げたことをとやかく言うつもりはなかった。

確かにあの場面では一学生ならば逃げ出してしまっただろう。

ただ、あの年上の冷静な部下もその一人でしかなかったということに驚きを覚えた。

彼はどこかが違うんじゃないか、と、リューベンは勝手に期待していたのだろう。

（・・・いや、今は、置いておこう・・・）

そんな詮無いことを考える自分を戒める。

今考えるべきはこれからについてだ。

リューベンは目を開き、現状の打破　　つまり、小隊の帰還を第

一に考えるため、口を開く。

「……さて、悪いが皆、集まってくれ。これからの行動を煮詰めよう」

斯くして、彼らは地下洞窟からの脱出を図る為に動き出す

リユーベンが寝かされていた平たい岩を囲むように、ジエデラード小隊の面々は顔を付き合らしブリーフィングを開始する。

「ではまず、誰も怪我はないか聞いておこう。作戦行動を続けられない者はいるか？」

リユーベンの問いに、サーリエが手を挙げ答える。

先ほど治療を受けていた二人の内の一人で、どうやら足をやられたらしく、もう一人は軽く捻っただけであったので治ったが、少し傷の深かった彼は水の秘薬も無いため完全に治せなかったとか。

移動には一人補助に回す必要があり、リユーベンはそれを踏まえて続ける。

先程エンニツヒが叩き起こしたグルフユンクは、まだ顔が痛むのか、ブスツとしながらも今はまだ口を挟まない。

「それでは二人を運ぶ人間が必要だな。兎も角、現状はどこまで掴んでいる？」

リユーベンが皆に尋ねると、まずエンニツヒが答えた。

「さつきまでブリューゲルとそこいらを探索してたんだがよ、ここいらは火山地帯みてーでな、かなり入り組んでやがった。下手に歩けば迷うな」

「そうなのか？」

「ああ、ここに落ちてからの三時間、半分ぐらいは探索に当てたがよ、あんまし奥に行きすぎると下手すりゃ直ぐに迷子だ。まあ、明るいつてのがせめてもの救いか？」

「そうだね。みんなが揃っているのもね、休憩の為もあったけど、あまり皆バラバラに動くと收拾がつかなさそうだったから、元気のあった二人に偵察を頼んでいたんだよ」

まあ、結果は芳しくなかったようだけどね？と、言いながら、ブライアンが言葉をつないだ。

偵察に出た一人、ブリューゲルもその横で頷き、同意を示している。

余談だが、このブリューゲル、かなり『無口』である。

リユーベンのそれが口下手から来る口数の少なさだったのに対し、彼の其れは本質からして無言を貫いている。

今のように大概は頷きを持って意思表示する、筋金入りといえる寡黙さなのだ。

リユーベン自身は学校でそこまで会話したことがないと思っていたが、逆に彼と会話したことの有る人間こそが希有な存在だった。

閑話休題

「……ふむ、やはりヴァシユタインの森の地下は『そう』なのか。・俄には信じがたいが、あのワーウルフはやはり『アレ』なのだろくな」

リユーベンは思い当たることがあり、ぽつりと呟く。

ブライアンはそれを聞き逃すことなく拾い、リユーベンに確認した。

「……リユーベン、まさか『東の狼男』のことを言ってるのかい？おとぎ話だろう？あれは」

ブライアンにも思い当たることがあり、口に出してみたが、やはりおとぎ話でしかないと考えていた。

しかし、リユーベンは否定せず、持論を語る。

「……いや、解らんぞ、その話は確かに子供に聞かせるおとぎ話だが……『ゲルマニア伝承』に基づいた話だと聞く。東の森というのが、この地だったということもある……」

それを聞いた隊員たちはざわついた。

ここに出た『狼男』のおとぎ話は、ゲルマニア人ならば誰でも知っているような有名なものだ。

それは『ゲルマニア伝承』に書かれている『ゲルマニア魔狼伝説』に基づくと言われており、そんな伝説の体現が襲ってくるなどと言われれば、浮き足だっても仕方がなかった。

リユーベンは皆の反応に、無駄な話をしてしまったかと内心自分を叱責し、話を戻す。

「……話が逸れたな。安心しろ、別に奴とやり合うわけじゃない。我々の目的は首都への帰還だ。伝説某など放っておこう。奴も地下を歩く我々を襲ってこないだろう……さて、済まなかった。話を戻そう」

リユーベンは皆を落ち着かせ、話を戻す。

すると、一人の隊員が声を上げた。

「しかし、どうやって上に上がるんだ！？落ちてきた穴はもう崩れてふさがったし！下手に動けないんだらう！？」

リユーベンは、その心配ももつともだと思った。

だが、其れについては考えがある。

「・・・ああ、そうだな。どの様に上に上がるか、だが・・・幸い、ここには優秀なメイジが数人居る」

リユーベンの答えに質問をした隊員はまだ解らないような、疑問の顔を浮かべる。

リユーベンは説明を続けた。

「ここには水の流れがあり、周りは大地であり、風も通っている・・・特に、風を読むことは朝飯前だらう、グルフユンク？」

リユーベンのいきなりの問いに、顔の痛みに気をやっていたグルフユンクは慌てつつ答える。

「え？僕か！・・・ああ！そうとも、トライアングルたる僕にかければ『風の抜ける道』など手に取るようにわかるよ！」

グルフユンクの言にやっと理解した顔をする隊員。

その隊員に、リユーベンは声を掛ける。

「ロビスマン、君も私も水メイジだ。ならば、水の流れがあるのならば、ここは私達の活躍の場でもあるだろう?」

その言葉に、ロビスマンと呼ばれた隊員は改めてそう思い至ったように首肯した。

リューベンはその様子に一度頷くと、再び皆に目を向け脱出に際しての意見を求めた。

切羽詰まった状況なのに、頭のどこかでは『いい経験になる』と達観した自分が居るのが不思議だった。

「逃げた奴らが救援呼んでくれるんじゃないか?」

「・・・いや、救援が来るまでこんな土の下に居たくないだろ。第一いつ来るかもわからないだし」

「それにしてもゴレイヌスめえ・・・!!僕を見捨てて逃げるとは言い度胸だよ・・・!」

「今は置いとけよビザール・・・」

「そろそろ腹が減ってきたな・・・そこんどこも何とかしないとさ」

喧々囂々と議論が交わされ(あまり関係ないことに憤っている男もいるが)、粗方出された意見を、リューベンは聞き、纏め、プランに組み込む。

上意下達の指示だけではなく、自ら打開策に思考を回させることで皆の不安を紛らわすための、リューベンの意図だった。

数分の意見奏上の後、リューベンは小隊長として行動方針を示すことにした。「さて、これより我ら小隊は脱出を図るわけだが。風向、反響を利用して出口を探すことは可能だ。足場の悪さは土メイジ諸君により都度改善して貰いたい。先頭は風のエキスパートであるゲルフンク、殿はブライアンに任せる。サーリエは、ユーストン、君がレビテーションで運んでやってくれ。周りの者もフォローを忘れるな。皆、一列縦隊を崩さず、周囲に気を配ることを忘れないように」

フウ、と、此处で一旦一息つき、しかしリューベンは言葉を紡ぐ。

「我々は遭難ということになる。だが、こんな所で無駄死にするのは実に遺憾だ。なればこそ、総員、ここを抜けるまで気を抜くな。生きて戻るぞ！」

「『心ツ！』」

皆、その瞳には確かな熱が宿っていた。

疲れた体に湯を入れ、ジエテラード小隊は一つとなって動き出す

地下空洞を進むこと三時間・・・

『まったく・・・どこまで続いているんだいこのあ^ホくに^{セン}ゆ^シびげら！
』？』

『だ、大丈夫か！？グルフユンク！？』

暗い足下にグルフユンクが転んだり、

キーキー、パタパタ

『・・・』ピクリ

『え？どうしたんだブリューゲル・・・って！？どこ行くんだよブ
リューゲルウウウ！？』

『・・・』フラフラ

ブリューゲルがコウモリを察知してフラフラと追いかけたり、

『しかし、この水脈。本当に外に繋がっているのかね？どうなんだ

い、ロボスマン』

『いや、まだ何とも・・・』

『頼りないねえ。これだからラインは・・・おや？今なにか居て《
バツシャアア！》うわらばっ！？』

『ちよっ、グルフユンク！？・・・ああ、スキュラが居たみたいだ・
・・・』

『・・・このっ、水魔風情がコケにしおって《バツシャアアアン！
！》ふにゆげらっ！！？』

グルフユンクが水脈に潜んで居たスキュラに水をブチ掛けら
れたり、

『くそっ、水浸しじゃないか！！？ええい腹の立つ・・・《ゲニユ
ワリ》ふべえっ！！？』

『また転んだのかいグルフユンク・・・ってくさっ！？臭いよ、君
！？』

『なんでこんなところに・・・』

グルフユンクがなにかよくわからない獣の糞を踏んづけたり、
等々・・・

色々あったが、彼らは薄暗く足場の悪い道程にも慣れはじめていた。

殿にブライアンが、そのすぐ前をサーリエを運ぶユーストンが歩き、その前をリューベン、エンニツヒ、ブリューゲル、ロビスマン、グルフユンクの順に歩いていった。

ヒタリヒタリ、と、水滴が滴る中、リューベンは隊列の中央付近を歩いていった。そこに、その前　　昨日まではノリンズが居た位置を歩いていたエンニツヒが声をかける。

「なあジエデラード、その、悪かった」

「・・・？いきなりどうした、エンニツヒ？」

「いや、上でよ。アレに襲われたとき足がすくんじまってよ・・・情けねえ」

リューベンがワーウルフに奇襲されたときに、とっさに動けなかったことを負い目に感じているのだろう。

どこか気まずげに謝罪するエンニツヒ。

確かにリューベンとブライアン、ブリューゲルを除いた面々はそれぞれあまりの急展開に立ち竦んでいただけだった。

だが、リューベンとしてはそれもやむなしだと思っている。

「・・・仕方ないさ、アレは本来なら衛士隊にだって手に余る。それに、あの時は私も冷静さを失っていた。皆に指示一つ出せなかったからな」

それでは隊長失格だ、と、リユーベンは言い流す。

しかしエンニツヒとしては納得行かないらしく、いまいち渋面のままだった。

「や、そりゃあそーなんだが・・・まあ、こっちとしても、ホラ、年上の威厳と言っただな・・・」

そのまま、うつむ・・・と唸っている。

リユーベンは、彼にしては珍しい苦笑を浮かべるしか出来なかった。

こんなことを言っている彼　エンニツヒは、実はそれ程駄目なメイジ、略して駄目イジではない。

実技は上の下、座学は中の上、精神面が若干打たれ弱いというぐらゐの弱点しかない、そこそこ優秀な土のラインメイジである。

ブライアンという同じ分野での強者が側にいるため、この小隊内でもあまり目立つ存在ではないが、

オーク掃討時に落とし穴を作成するなど、地味ながら活躍はしてい

た。

ブライアンが規格外過ぎるといふ問題もあるが

しかし、領地を持たない一介の下級貴族の師弟、それも16歳の青年でしかなく、やはりワーウルフに畏縮するのも無理からぬ話だった。

リューベンは、この話は続けても無駄だろうと思ひ、煙に巻くことにした。

それに、エンニツヒがただ畏縮していただけでないこともしっかりとその目で見ていたのだから。

「・・・ならば私は隊長としての威厳が無かったな。やはり、若造には荷が重かったみたいだ・・・」

「い、いやいや、お前さんはしっかり戦ってたじゃねーか！うん、十分すげーさ・・・」

「そうか？君こそ十分凄いきさ。あの崩落の中、気絶していたグルフユンクを確保していたらどう？」

「えー？ああ、まあ、うん、一応幼なじみだからなあ・・・」

「あの状況で他者に気をやれる者こそが強い者さ」

「そう、か？　そうかねー・・・？　イヤハハ、照れるね！！」

ニヘラ、と破顔するエンニツヒ。

そう、彼は足場が崩落する時の混乱の中でいち早く我に返り、無防備に気絶していたグルフUNKを引き寄せて一緒にレビテーションを掛けたのだ。

リューベンが意識を失う直前に、彼はその光景を視界に捉えていたのである。

（案外丸め込みやすい・・・）

既に気にすることを止めたような部下を前に、

リューベンは、親友に認定されている『案外失礼な男』の称号に恥じぬような考えを抱いていた。

話題の換え時だと察し、リューベンはふと気になったことを聞いてみた。

「・・・しかし、幼なじみと言ったか・・・？　あの、グルフUNKと？」

余りにも意外そうな言い方に、今度はエンニツヒが苦笑して答えた。

「ッハハ、いや、まあな。ウチはさ、領地もない下級貴族だろ？代々グルフユンク家の家臣みたいな位置づけだったんだよ。で、その四男と年も近いし、遊び相手つつー感じでさ。かれこれ五歳ぐらゐからの付き合いだからなあ・・・まあ腐れ縁って奴さあ」

隊員同士の意外な繋がりによりューベンは少し驚いた。

確かに、グルフユンク伯爵家はそれなりの家格を持つ名家であり、属臣の一つや二つあってもおかしくない。

だが、高飛車なグルフユンクと明け透けなエンニツヒが幼なじみと言うのが不思議でならなかった。

「まあ、軍学校じゃあ殆ど連まなくなつたからなあ・・・ホラ、なんか取り巻き居ただろ？アイツ」

余談ではあるが、

グルフユンクの取り巻き　　真っ先に逃走したゴレイヌスであるが、

逃走したことを知ったグルフユンクは怒り心頭であったため、今後、彼が取り巻きに戻ることはなかったと言っておく。

「・・・ああ、あの侍らしていた奴らか。確かに君が学校でグルフユンクと居る場面は余り見ないな・・・」

「まあ、アイツもあんな性格だからよ。敵は作りやすいんだよなあ」

全くしょうがねーよなあ？と、カラカラと笑うエンニツヒ。彼からしたら、グルフュンクは年上ながら手の掛かる幼なじみなのだろう。

「ふむ、グルフュンクも人を見る目がないな・・・」

『こんなに近くに真の友人足り得る人間が居るのに』と、言外に含ませたりューベンの言葉だった。

「隊長！！」

と、談笑　あくまで周りに気を配りながらではあるが　し
ていたリューベンを呼ぶ声が挙がった。

「どうした・・・？」

隊列の前から二番目　水メイジのロビスマンの声だ。

何か気になることがあるれば直ぐにリューベンに報告するようにつ

てあり、
少し緊張を含んだような声はその重要性を物語る。

「グルフユンクが・・・」

そこに割り込む声があった。

「ジエデラード！！この辺りから風の動きが変わっているよ！！この先に必ず出口があるね！フハハ、見たか！風は僕に味方する！！」

その言葉に隊員達が沸いた。

「よし！もう出られるのか！」

「ふう〜、疲れたよ」

「なんだ、案外あっさりと・・・」

口々に安堵する面々。

グルフユンクの半分は要らないことながら、半分は聞き逃せない報告に、リユーベンも張っていた気分が少し弛んだ。

「そうか・・・よし、皆、まだ気を抜くには早い。しっかりと進もう。」

戒めの言葉を発し、そのまま行進を続ける。

グルフユンクの言葉を信じるならあと数十分も歩けば『外』に繋が

る場所があるのだろう。

隊列の雰囲気も軽くなり、皆気を引き締めなおして黙々と歩を進める。

だが

(・・・しかし・・・なんだ？また、嫌な予感が・・・)

チリチリとした独特の感覚が、リューベンに悪い予想を促していた。

(ここまではやけにあっさり行った・・・『今まで』の経験からしたら、最後に『バカでかい落とし穴』が有りそうなんだよなあ・・・)

288

意気揚々と先導するグルフUNKを傍目に、リューベンは皆に聞こえないように深く溜息を吐いた。

彼の人生の中で、『嫌な予感』の的中率が未だ100%だということに、彼は気づいていない・・・

エンニツヒが声を潜め小さく呟いた。

「……なあ、ビザールよう……これが、『出口』……か？」

あれから進むこと一時間。小隊の面々は確かに『外に通じる穴』に到達したのだが……

「う、うるさい！―どんな場所かなんて判るはずもないだろう！？」

「おまつ！―？声がでけえよ！？」

エンニツヒとグルフユンクの掛け合いをスルーして、皆は一様に固まっていた。

確かに、ここに来るまでに兆候はあった。

しかし、出口が有ると考えていた皆はあえて見ない振り、または本当に気がついていなかったりしたのだ。

そこで誰かが『別の道を探そう』と、提案していたとしても、勢いづいた皆は止まらなかっただろうが……

彼らはそれなりに広がった空間に出ていた。

高さ6メートルほど登った位置に大きな穴があいており、既に日が暮

れているのだろう、爛々と輝く星々が覗き見える。

それだけでなく

地面には食い散らかした様な骨
明らかにオークのそれ
が散らばっていたり、

獣独特の据えた匂いがこもっていたり、

一見してふかふかとしている木の葉や毛皮の寝床があった。

明らかに『巢』である。

巢の右端に小さな通路があり、地下洞窟に繋がっていたのだろう。
彼らはそこからこの場に辿り着いたわけだし、
そんな小さな風をも感じ取ったグルフュンクは確かに優秀だ。

が、

(最悪だ・・・)

リユーベンは頭を抱えなくなった。

やけに精度抜群な自らの『嫌な予感センサー』を、
当たったと誇るべきか、

何故外れないのだと罵るべきか、
それとも仕方ないと達観するべきなのか、実に迷うところである。

皆、この巢が『誰』の住処であるのかは理解していた。

今朝の出来事や、行軍前の会話、そこから察しはついている。

パニックになっていないのは、幸いにもその『家主』が不在だから
だろう。

もしはち合わせていたら、いくら『二度目』とはいえ混乱していた
筈だ。

だが、いつ帰ってくるやもわからない。

と、後ろからブライアンが近づいてくる。

やはり少し声を潜めながら、話しかけてきた。

「リューベン、早いところ上上がった方がよくないかい？」

「・・・ああ。今の内に」

だが

アオオオオオオン・・・

「「「「!?!?」」」」

一同戦慄

遠吠えが洞窟内に響き渡り、皆音の出所に目を向けた。

言い争っていたグルフンクとエンニツヒも既に押し黙り、青ざめて『上』を見る。

『家主』が帰還した

「・・・ああ、クソ、また会ったな、狼男・・・ッ!!」

リユーベンは行動が遅れたことに舌打ちしつつ、同じく上を見る。見上げた場所、外へと続く穴の縁。

そこには『家主』 漆黒のワーウルフが悠然と佇んでいた。

まるで『仇敵』を睨むが如く、若きメイジ達を見下ろしながら

リューベンの受難はまだ終わらない・・・

続く

第十三話 迷子小隊にて（後書き）

次回、ワーウルフ編完結

の、予定

第十四話 逃争戦線にて（前書き）

なんか長いことほったらかしで申し訳有りませんでした

皆さん前話の内容なんて忘却の彼方ですよ

ほんと、ふざけた人間ですいません

第十四話 逃争戦線にて

その黒い魔獣は現れた。

我らを狩る牙として。

私に言えることは少ないだろう。しかし、これだけは語り継いでおきたい。

出会ったならば、

逃げろ。

決して後ろを振り返らずに。

狂わんばかりに走り続ける。

立ち向かうならば、

命を捨てる。

決死で挑め。

必死に至れ。

それでも尚、私は君たちの命を保証できない。

ゲルマニア歴史文献

『探検家：ウィル・フォーゲン卿の手記』より

第十四話 逃争戦線にて

その洞窟に、動く者は居なかった。

本能的に、彼らは察知していたのだ。

『動けば死ぬ』と。

小隊長であるリユーベンも例外ではなく、ビリビリとした殺気に下手に動けないでいた。

先の遭遇の時とは桁が違う。

おそらく、巢を荒らされた怒り、本来の戦場 三次元の機動を可能にする洞窟内 での戦いにおける闘争心など、様々な感情によりそれは形成されているのだろう。

(「い、こえエエ……いや、逃げないと……」)

身にまとわりつくような殺気の重圧からは意識をそらし、リユーベ

ンは小隊員達を見渡す。

皆足が竦んでおり、今回は不用意に走り出すようなバカは居なかった。

男十人集まってこの体たらくもどうかと思うが、この場合は幸いだつた。

ちらりと視線をやれば、やはりブライアン、ブリューゲルの二人は視線を此方によこしていた。

地上での遭遇時もそうだったが、実に頼りになる隊員達だ。

二人なら学校を卒業と同時に即戦力となれるだろうな、と、リユーベンは頭の隅で思った。

(・・・そんなことはどうでもいい・・・二人にや頼りっぱなしだが、この際とことんアテにしてやるう)

リユーベンは後ろ手にサツと指折りブライアンに向けて形を作る。

予め決めていたハンドシグナル。

他の隊員達は真剣に覚えていなかったのだが、ブライアンならば大丈夫だろう。

なんせ二人で考えたのだし。

案の定、ブライアンは頷いてくれる。

角度的に見えなかっただろうブリューゲルにも、彼を經由して伝えてくれただろう。

流石と言つべきか、抜かりない。

(よっし……)

この場は戦いに向いていない。
しかし逃げる出口は敵の後ろ。
フライで飛んで逃げようにも、上から叩き落とされるのがオチだろ
う。

ならば、道は一つだけ。

先程通り抜けてきた道を逆戻りするしかない。

幸い少し戻れば縦横共に数十メートルの空洞（グルフンクが水をか
けられた水流もそこにあった）があるので、戦うにしてもなんとか
そこまで退がらないといけない。

つまり、撤退戦である。

(やったことは、ないんだも……やるしか、ないときた、チク
ショー)

だが、やらないといけないのが、隊長の辛いところだ。

覚悟は……ちよっぴり不安だが、まあ、決めた。

ブツブツと内心ではボヤきながらも、リユーベンは『敵』の目を引くために、一歩前へ踏み出した。

カツン

「・・・？」

「コッコツ！？」

静止した空間に、一歩、足音が響く。

ワーウルフは急に動いた人間を訝しみながら、固まっていた面々もビクリと体を振るわせながら、そちらに目を向ける。

足音の主　リユーベンはワーウルフに目を合わせ、しかし呑まれることなく睨み合う。

この行動はある種の賭だった。

リユーベンが動いた瞬間に襲いかかられ、次の瞬間には骸となっていた可能性もあった。

そして、気迫に飲まれ、目を逸らしていたならば、現実にそうなっていた筈だ。

しかし、今回のリユーベンは幸運だった。

「縦列、速やかに空洞迄後退せよ。後ろは気にするな、即時行動に移れ！」

低く、地を這うような声音から、それでいてその場にいる全員の耳に、その声は通った。

その声は、ざわめく心の透き間に、驚くほど染み渡った。

「「「Ja^{ヤッ}!!!!」」」

初めに足を動かしたのは誰だったか。

隊員達は、命令に従った。今までの狼狽が嘘のように。

意外にも、先頭を駆けたのはグルフUNK、それに続いてエンニツヒ。

リユーベンとしては、またしても貴族の矜持云々で駄々をこねるかとも思ったのだが、ここは素直に従ってくれて、助かった。

グルフUNKは、ブライアンなどはまた違った意味で他人の意識を集めるため、彼が率先して動くことで他の隊員達にも『流れ』ができた。

これで第一の問題、『隊の立て直し』への布石は繋いだ。

そして、ここからが本番

「来るかッ!!」

時間を取り戻した空間において、眼前の獣がただボーツとしている道理はない。

現在の立ち位置は外に近い順から、ワーウルフ、リューベン、ブライアン、撤退しだした隊員達、の順だ。

一歩押し進んだリューベンは、それだけワーウルフに近い。

指揮官自らが前にでている現状は誉められたものではないが、仕方がない。

それに、リューベンもむざむざとやられる理由は無いらしい、まだ死にたくもない。

「アースランスッ!!」

地を蹴り飛びかかる寸前のワーウルフめがけ、後ろからリューベンの前に一足で駆け出たブライアンが杖を振る。

ワーウルフは身をよじり跳ぶ方向を転換した。

今までそれが居たところに、金属製のスパイクが生える。

こんな攻撃が当たるとは誰も考えていない。

牽制の一打により、ワーウルフは警戒を強めながらも、闘争心に陰

りは見えない。

ブライアンはこちらを睨みつける獣に應えるように、ただワーウルフを注視していた。

一方、リユーベンはこの時点で一旦退がった。彼自身にワーウルフと張れるような強靱な肉体はないし、その肉体の持ち主である親友の邪魔になるからだ。

ワーウルフは再び体を引き絞り、今度はブライアンを獲物と定め矢の如く飛びかかってくる。

「オオオツ!!」

ガキリ、と、ブライアンは持ち前の膂力でワーウルフの爪を受け止める。

一撃、また一撃とワーウルフの爪撃は続くが、ブライアンも負けじと鉄杖を用いてそれを捌く。

やがて獣の一撃を杖の根本で打ち据えると、鏝競り合いの形となる。

接触時に火花が飛び散り、薄暗い洞窟内を照らすと。その時、ワーウルフの嗅覚が背後の存在を察知した。

「ウル・カーノ・・・」スモーク（煙幕）『!!』

そこでは、すこし距離をとったブリューゲルが身の丈ほどの杖を掲げ、魔法を放たんとしている。小声かつ高速で詠まれた魔法は獣の察知を遅らせ、そして杖の先からワーウルフ目掛け一筋の白い帯が延びる。

「グウガツ!!?」

火の玉ならば跳んで避けたワーウルフだったが、飛んできたものは形を成していなかった。

それは白煙であった。

それも火のトライアングルであるブリューゲルがしっかりと魔力を練り込み、刺激性の高い性質を得ている、催涙ガスのような代物だ。

そんなものを食らえば五感の鋭い獣は狼狽する。

幻獣とはいえ獣には変わりなく、火を使う種類も居ることはいるが、今回はその類ではない。

凶暴な獣に火で対処するのは古代よりの人の知恵である。

ワーウルフは、鋭敏に過ぎる嗅覚が徒となり、一寸動きが乱れる。

「がら空き、だッ!!」

「グルオオオ!?!」

鼻を突く刺激にワーウルフがたたらを踏んだ隙を逃さず、ブライアンが獣の後頭部に強烈な蹴りを見舞う。

「ッゼア！！」

そこで休むことなく杖を振り、無詠唱で出せる簡単な石柱を数本錬成。

それは獣の左足を掠めるが、紙一重で避けられたため、傷とも言えない小さな傷しか作らなかった。

「ちいつ、つと、ぐお！？」

ワーウルフは蹴りの衝撃など無かったかのように石柱を避けると、避け際に振り抜いた右足でブライアンを蹴り飛ばす。

ブライアンといえど魔獣の脚力を受け止めきれず、5メートルほど飛ばされる。

ワーウルフはそれに追従し追撃を仕掛けんとする。

「ッ、又ンッ！ツぐ、うがあッ！！？」

「ガルアアアッ！！」

ブライアンは跳ね起きる。咄嗟に杖をかざし迎撃するも、勢いの付

いた爪撃は止まらず、二の腕に一撃を貫く。

と

獣の頭がガクンと下がった。

「シィッ!」

距離を詰めたブリューゲルが突き出した杖が、獣の頭があった位置を貫く。

と同時に、詠唱されていた炎の槍　　フレイムランスが三本、獣を狙う。

並の相手ならば一撃目を避け、崩れた体勢となり、避けられず炎に焼かれるしかない連続技である。

しかし眼前の獣は歴れつきとした人外魔境。

するりと半身をずらし、それらを避ける。

それは無駄を排された挙動であり、迫り来る炎槍に怯む様子はなかった。

「ッ!？」

「くっ!？ブリューゲル!!」

危機を察しブリューゲルは半歩後退。

カウンター気味に振り切られた腕が、ブリューゲルのマントを切り裂く。

その一撃では止まらず、ワーウルフはブリューゲルの杖を持つ手を蹴り上げる。

あまりの衝撃に吹き飛んだ杖を省みることなく、ブリューゲルは蹴り上げた体勢のままのワーウルフの腹を狙い、蹴りを繰り返す。

「フッ!!」

「ルオ、ガアッ!!」

「ッが　!？」

だがやはりその一撃すら難なく避けられる。

ブリューゲルはお返しと言わんばかりに胸を蹴り飛ばされ、背中から地に叩きつけられた。

「ッ、ア……!!」

ギシギシと全身の骨が軋み、ブリューゲルは歯を食いしばる。

「ん、ぬう、オオオオオリヤ！」

倒れ伏すブリューゲルを援護すべく、ブライアンは渾身の錬金により今度は鉄の槍を錬成。

豪速を以て背を向ける獣を狙うが、ワーウルフは後ろを見ることすらせず、ヒラリと跳んでかわした。

スタリと着地し、彼らの立ち位置は振り出しに戻った。

「ハアッ、ハッ、なんて、奴だ……!!」

「ツア、ハッ……グッ……!!」

敵に隙は見せてもらえないと、すぐさま二人は杖を構える。

傷口を押さえつつ体勢を立て直すブライアンと、叩きつけられた衝撃が抜けず、肩を上下させるブリューゲル。

獣は、始めに降りたった位置に立ち戻り、依然としてこちらに敵意をとばしている。

睥睨するその瞳に冷や汗を流しながらも、次の衝突に備えブライアンは息を整える。

「やっぱり、一、撃が、重い、ね・・・ハア、ハア・・・」

一瞬の攻防、時間にしてみれば二分も経っていない。それでなお、トリアングルの実力者二人が息を切らし、獣はほぼ無傷。

誰の目にも優劣は明らかだ。

これは、断じて彼らが弱いわけではない。

むしろ、ワーウルフ相手に白兵戦を挑んで一瞬でも保つメイジは希有である。

彼らの戦い方が、常人とは逸した『魔法戦士』と呼べるものに近いこともあり、学生の身でここまで戦えるのは破格の実力と言える。

しかし、ここは獣のホームグラウンド。

限定された洞窟という閉鎖空間である。

彼らの持ち味である火と土の大出力の魔法は、使うに適さなかった。

（早くしてくれないか、リユーベン・・・！）

ならば、『大出力』を出せない、貧弱な『ライン』では？

「・・・？」

ワーウルフは気づく。

辺りに白いもやが立ちこめだしていることに。

またしても煙幕を張ったのかとブリューゲルを睨みつけるが、彼は息を切らせているばかりでしかない。

ならば何故？

その下手人は洞窟の入り口に陣取っていた。

「待たせた、二人とも 『ミスト（霧）』・・・」

リューベンはそう言って目を細め、その視線はワーウルフを捉えて離さない。

発生したその霧は、不自然に場に停滞した。

ワーウルフを囲むように、纏わりつくように、指向性を持って動いていた。

「やっとう図かつ！！ブリューゲル！」

「ム・・・！！」

視線を交わすや否や、すぐさま反転。

霧が広がると同時に二人は獣に背を向け脱兎の如く走り出す。

目指すは入り口。

霧に気を取られたとはいえ、ワーウルフは五体満足で健在である。

「！！グルアアアッ！！」

この程度で獣が止まる？ 否！

ワーウルフは無様に背を見せた人間達にかける慈悲など無いと、一足で踏切り、爪を振りかぶる。

凶撃が、二人を切り裂くべく繰り出される。

野生の猛獣に背を向けること、其れすなわち死に通じるが・・・

彼らにそれ《死》は訪れなかった。

「!!!?ルオツ!?!」

フォン、と、空を裂く音が響く。

ワーウルフの爪は、『二人をすり抜けて』空を切った。

「・・・!???」

確かに人間の背は『見えていた』。

たった今さっきまで目の前にいたのだから、見間違えるわけもない。

ワーウルフが疑問と驚愕を覚え、キョロキョロと当たりを見渡せば、今し方突っ込んだ方向から明後日の向きに、彼らの背が見える。

今度は外すまい!

一連の事態に、何か違和感を感じるも、ワーウルフは次こそはと『見えている』影に向かって飛びかかった

「・・・延々とやっている、狼男」

攻防の地から大空洞への通路。
そこを疾走する三人の少年達がいた。

「いやあ、うまくいったね！リューベン！」

「ああ、ご苦労二人とも」

「・・・」

『無事に逃げ切った』リューベン達である。

彼らは仲間達の撤退する時を稼ぐため、少しばかりの時間稼ぎに徹していたのだ。

今は後退して合流すべく、全力疾走中である。

「それにしてもバツチリ決まったもんだね、あの魔法。まああれだけ練習していたしね」

「特訓の甲斐有り、だ。さしずめ『ミラージュ（霧幻）』、と言ったところか」

「今回はちょうど場所もよかったじゃないか。いや、不幸中の幸いという奴かな？」

「君とブリュウゲルのお陰と言うところが大きいかな」

「・・・」

「あ、今照れたね？ちょっと解ってきたよ、君の表情。っと、錬金と！」

ブライアンの杖が振られ、今通ってきた通路を石壁で塞いで行く。

体勢が整わない内に追撃されると、厄介極まりないことはリュウベーンにも解ることだ。

薄暗い通路をひたすらに駆けながら、しかし三人は先程までとは一転、わいわいと和んでいた。

何故こんなに簡単に逃げ切れたのか？

それは、先の霧のトリックである。

単純に、ワーウルフを視覚で騙したのだ。

布石はブライアンの最初の石柱錬金から始まった。

石柱の錬金、白兵戦による意識の固定。
そうして細かな詠唱を続けるリューベンから注意を逸らす。

そこで隙を見せたならば、ブリューゲルの『スモーク』である。
この術は目くらましの様に見えて、その実本質は少し違う。

先述したとおり、高濃度に込められた精神力が威力過多を発生させ、
刺激煙となって『獣の鼻』を麻痺させた。

そう、この一手で封じたのは、狼を相手取るのもっとも厄介な鋭
敏な嗅覚であった。

そして仕上げに、リューベンが仕掛けた『ミスト』の魔法。

これは高難易度に見えて、水分子を軽く操るだけのドットスペルで
ある。

これだけでは鼻を封じたとは言え、目くらましにもならなかっただ
ろう。

『ミスト』自体に効力は求めていない、ここから更に一手打つ。

『ミスト』をスクリーンに見立て、二人の『影』を投影したのだ。

風のドットスペルによる偏光操作。

現代ならば中学生で習うような知識、『光の屈折』。この概念自体
は、メガネのレンズなどが存在することからも解るが、ハルケギニ
アには存在していた。

より深い知識を持ちイメージを固めやすかったリューベンにとって
は、得意ではない風魔法であってもこの現象を起こすことは可能だ

ったのだ。

後は簡単。

鼻が利かなくなり、白い霧が立ちこめ混乱するワーウルフの目の前に、無様に逃げる人間の『影』があれば……？

ひたすらに追い回すだけだ。

ご丁寧に、存分に精神力を込めたため（そのせいで詠唱が長引いたが）、術者が離れてもしばらくは持続する仕様だ。

気付かれたとしても、距離は大分離れた上、ブライアン謹製の石壁が数枚、足止めを果たしてくれる。

この投影魔法 『ミラーージュ（霧幻）』 によって彼らはいとも簡単に離脱に成功したのだった。

虚無の魔法『イリュージョン（幻影）』を彷彿とさせるこの魔法。

いくらリューベンに知識があつたとは言え、ラインスペルでこれを再現する辺りに異常性があるのだが、それに気付く者は未だ少なかった。

本人曰く、『やってみたら何とかできるもんだな』、である。

世の学者達をなめ腐っているとしたか思えないが、ここはファンタジ
ー世界。

非常識こそがまかり通るのだ。

深く考えては負けである

走り出して十数分がたった頃だろうか。

皆が居るはずの大空洞までは歩いて一時間ほど。

しかも一度目は隊列を組み慎重に行軍していたので時間がかかった
のだ。

三人という身軽さで走れば、もっと早く着くのは道理なわけで・・・

「ジエデラード！！？無事だったんか！」

「ああ、つむ。問題ない。そちらも委細無かったかエンニツヒ？」

リューベン達三人が通路から走り出てくると、奥の方で隊列をまとめていたエンニツヒが駆け寄ってくる。

その顔は、信じられない物を見たとても言いたげだ。

それを無視したリューベンに問われ、彼ははつとしたように答える。

「あ、ああ、こっちは大丈夫だ。みんな何とか立て直したけどよ．．．」

「それは重畳。さて、奴の足が止まったわけではない。直ぐに行動を開始する．．．どうした？」

「．．．いや、やっぱスゲーな、お前さん」

十人あまりのメイジ達が怯むような化け物から、たった三人で逃げ切り、あまつさえ足止めしたというのに。

そんなことすら苦にもならない（ように見えるだけで、内面は疲れ切っている）年下のメイジに、エンニツヒはただただ感嘆するばかりだった。

「（こいつ何言ってるんだ？）．．．まあ、いい。今は出口を探そう」

そんなエンニツヒを訝しむが、リューベンは外にでるために隊員達に渴を入れることにした。

「待たせた、諸君。さて、出発しようか」

大空洞は広く、ジエデラード小隊の面々はそこでしっかりと隊列を組んでいた。

不安げではあるものの、誰一人自分勝手な行動はしていない。

命の危機を感じ、皆が協調を覚えているのだろう。

一人を除いて。

「ジエデラード！生きて帰ってきたのかい！！君が帰らぬ人となっていたら僕が責任を持って隊を率いていたのだが・・・いや、良かったよ、無事なようで！」

グルフユンクは前に立ち出発を促すリューベンに、こんなことを言う。

まあ実際にワーウルフにやられていたらそうするのも必要だったろうが、別にわざわざ言わなくてもイイのに、と、リューベンは内心で苦笑する。

先ほどの撤退で見せた率先性は、案外にリーダーに向いていると思
ったが、こういうところでハズしてくるのが彼の持ち味なのだろう
か？

リユーベンは静かに声を出す。

「グルフユンク」

「な、何だね!?!」

「先頭は任せた。やはり、風の道を探る必要がある。君の実力、頼
りにして構わないか……?」

他ならぬ『ジエテラード』からそう言われ、グルフユンクはぎよっ
とするもすぐにニンマリと顔を歪めた。

「あつたりまえだよ!!こんな地下道など、僕にかかれれば隅々ま
で看破されて当然だ!ああ、容易いさ!」

「うむ、宜しく、トライアングル殿」

「ふふーんっ!まっかせたまえ!!」

彼らの会話に、

ニコニコと静観していたブライアンも、
興味なさげに佇んでいたブリューゲルも、
幼なじみの姿に額を押さえたエンニツヒも、
見ているだけだった他の小隊員達も、

同じ思いを胸に抱いた。

アイツ、いつかコロツと騙されるんじゃないか？

と・・・

「・・・ブライアン」

「うん。まだ『大丈夫』みたいだよ」

「そうか・・・よし、皆！後少しだ！気を抜くな！」

「」「」「Ja!!」「」「」

リューベン達はアレから二時間ほど歩いていた。

殿を勤めるブライアンが後方からの奇襲を警戒しながら慎重に進む

中、

宣言通り風を探ってスイスイと道を探り当てて行くグルフユンク。

どうやら彼は褒めて伸びるタイプのようだ。

何はともあれ、ジェテラード小隊はそんな彼の活躍で出口を発見したのだった。

時刻は既に夜も更けた。

あれ以降ワーウルフとの遭遇はなかったが、小隊の面々の疲労はピクに達していたと言ってもいいだろう。

「いやはや、やっと外だね。実に一日ぶりだが、どっと疲れたよ」

「・・・まあ、アレの相手をしたんだ。疲れもするさ」

「まさかあんなモノが居るなんて聞いてなかったからね。教官殿は下調べをしたんだろうか？」

「存外適当だからな、我が校風は」

リユーベンはブライアンの話に耳を傾けた。

彼も大概に疲れていたのであるが、やはり肉弾戦闘をこなし魔法もそれなりに使ったブライアンの方が、疲労は大きいだろう。

「・・・ただね」

「……ああ、まだ、終わらんだろうな」

二人の懸念はやはり彼の獣だった。
足止めなんて一時的なものだ。

人狼に掛ければ石の壁なぞすぐに砕かれてしまうだろう。
そうでなくては伝説にはならない。

「まあ、あの個体が伝説かどうかは解らないけど。まだ若いんだろ
うね、アレは」

「……解るのか？」

いきなりの推察に、リューベンは軽く驚く。
が、今更だなと思ひ直す。この親友の規格外ぶりには慣れたつもり
だった。

ブライアンは自らの考えを述べる。

「気づかなかったかい？僕が戦ってこうして生きてるんだから、そ
れが証拠だよ」

「……ふむ。確かに後ろで詠唱していた私は視界に入っていなか
ったようだった。戦い慣れていない、か」

「そういうこと。人間と戦うのは初めて にしては魔法の回避は
していたね。初見ではなかったらしいが、まあ殆どが亜人やらの相

手だったんだろう」

「アレで本能のままにか・・・恐ろしいものだ」

「ホントに、もう来て欲しくはないね」

二人して苦笑する。

そしてフラグは建てられた。

リユーベンはこんな死亡フラグを無意識に建ててしまう男である。悪い予感などには敏感なのに、今一鈍感なところが、ここで発揮されてしまったわけである。

だがそれで正しいのかもしれない。

彼は既に『ゼロの使い魔』という『物語』を知る大学生ではなく、『ハルケギニア』に生きる貴族・リユーベンなのだから。

先のことなど、解るはずもないのが本来あるべき姿だろう・・・

閑話休題

「ジェテラード！風が変わった、近いぞ！」

「グルフユンクの言う通りだよ。これは・・・水が流れ込む音だ！」

つまりはそれが響くだけの広い空間があり、外へと繋がっているらしい。

グルフUNKとロビスマンの答えに、皆は次こそやっとかと安堵の息をつく。

思えば地下に落とされてから何時間だろうか。

一度目の希望は災害に叩き壊されたため、その安心も一人である。

「水があるならば、出口も然りか。よし、皆あと少しだ。半日ぶりの外だ、残り少し気合いを入れる！」

「「「おおっ！」「」「」

負傷した仲間と、その彼を担ぐ運搬係だった二人は、三人揃って元気に声を上げる。

他の面々に至っては既に足早で、道を進んでいた。

解らなくもないと苦笑するブライアンと、何気に前を行っているブリューゲル。

「この様子だと、外までは保ちそうだね」

「うむ、出てしまえば、あとは全力を持って逃げるだけだからな」

今度こそ杞憂だったと、リューベンも彼らに負けず、張っていた神経をゆるめさせた。

確かに、水音は近い

リューベン達が進むにつれ、水音は大きく、通路の傾斜は上へ上へと急になっていった。

やはりこの先に地上への出口がある。

期待に足を弾ませて歩き続ければ、やがて幻想的な鍾乳洞が姿を現す。

鍾乳石独特の凹凸に彩られた石壁には、数々の横穴が空き、そこから風が漏れているようだ。

「これは・・・」

「ほう、中々綺麗なものだな」

外が暗くなりつつあり、どこからか採光していた洞窟内にも暗がり広がりはじめ。

しかし、残った光が天井などにキラキラと反射する様は、暗闇への不安を加味しても壮観だった。

それに加え、水音の正体も判明する。

「中々の広さの鍾乳洞に、右手には

滝かあ」

「滝壺が見えないのが危ないな……ここまで来て落ちるなど、洒落にならん。まあこの洞窟の奥底まで流れ込んでいるんだろっ」

「『瀑布』か……誰かの二つ名に有りそうだね？君が派手好きなら、ピッタリだったよ」

「生憎、私には既に二つ名があるからな。トリステインにでも行けば居るんじゃないか？アソコは水の国だ」

それは巨大な滝だった。

リユーベン達がその空間に辿り着けたのは、滝の中腹辺りにある脇道が滝に沿って外へ繋がる崖道へと続いていたからだ。

つまり彼らは脇道から出てきたのであり、広大な空洞に反響した水音が隙間を抜けグルフンク達に伝わったというわけだ。

顔を上げれば水の流入口は十分な広さがあり、そこを伝って行けば外に出られるのは確実だ。

既に夜の帳は落ち掛けていたが、明確な外界への道に、皆のテンションは高まっていた。

「だあー！やっと外かあ！」

「半日ぶりか……なんか何ヶ月もサマヨってた気分だ」

「はは、何をバカな」

「そうだよフランクリン。恐怖を抱きすぎてとうとう頭がおかしくなったのかい？」

「んなわきゃあ・・・！おいビザール！今、名前呼んだよな？うわあ、なんか久しぶりに聞いたわあ・・・」

「あ、いや！これは別にだな！？他意はない！昔の癖だ！！」

「ハハハ、いや、やっぱそっちのが俺は馴染んでるしなあ」

和気藹々と和やかな空気が流れ始める一行だったが、リユーベンも特に注意はしない。

ここまで来れば大丈夫。

ブライアンやブリューゲルと言った実力者達もほうとした表情を見せていたし、リユーベンもそう考えた。

「さて、ユーストン。君は前を行ってくれ。間違えてサーリエを滝に落とすなよ？」

「おい、本気で止めてくれよ！？」

「だ、大丈夫だとも！」

ハハハと軽く笑いながら、後ろを歩いていた二人を促す。負傷した仲間を気遣いからかう余裕すらもリユーベンには生まれていなかった。

まあそれもあまり表情は変わらず苦笑じみたものであったが、堅物な隊長が発した冗句に隊員達も珍しい物を見たと言った様相だ。

これら即ち、油断。

その一言に尽きた。

それは外へ目が行っていたために気付かなかったのか。

弛緩した空気が気付かせなかったのか。

はたまた、『壁を蹴る』音を瀑布の轟音がかき消したのか。

理由は多々ある。

しかし、リューベンが視界の端を過ぎった黒い影に気がついた時には、既に手遅れだった。

「 ツッ！！？」

ブァツと何かが空を舞う音が、不思議と滝にかき消されずにリューベンの耳に入る。

突如躍り出た黒い影 ワーウルフは、リューベン達の隊列を横から突く形でそこへ舞い降りた。

リユーベンの体から一気に嫌な汗が吹き出て、精神が臨戦態勢となる。

見えてしまったが最後、リユーベンの知覚する世界がやけに遅く感じた。

(油断したっ! ? くそっ! 一体どこから・・・っ! ?)

ここは鍾乳洞であり、火山地帯特有の横穴がいくつも開いている。

ワーウルフはそこを通り、ブライアンに察知されることなく彼らにたどり着いたのだった。

(ちいっ! ?)

声無く襲い来るワーウルフに、周りの隊員達は未だ気づいていない者も居た。

殿を行っていたブライアンはリユーベンに遅れること数秒にして気づいたが、殿故に前方へは対処が遅れる。

そしてワーウルフは、リユーベンの目の前のサーリエとユーストンにその凶爪を今まさに振り下ろさんとして

(考えてる暇は無いつ! !)

リユーベンの体は、気が付けば動いていた。

「避けるオツ! !」

「えっ？」

「あ……」

ドンツ、と二人を前方に突き飛ばす。

ドオツツ！

と同時に、リユーベンの真横から来た衝撃が彼にブチ当たる。

「ガツ、ハ……!?!？」

加速の付いた獣の斬爪はリユーベンの左肩に食い込み、そこから焼け付くような痛みを彼に与える。

衝撃に投げ出された一人と一匹の体が宙を舞う。

ここに至り衝撃音で全員が事態に気づいたが、時既に遅し。

リユーベンとワーウルフの体は絡み合い、奈落の滝壺へと落下していくところだった。

リユーベンが痛みの中で目線を隊員達に投げかければ、目を見開き
普段ではあり得ないほどに青ざめたブライアンの瞳と、かち合った。

「 走れッッ！！！」

その瞬間、最後の力とばかりに声を振り絞って叫び、命令を下す。

『 自分は見捨てて早く外へ向かえ』

そう、言った。

すぐさま持ち直し、ギリ、と歯を食いしばったブライアンは唇から
滴る血にも厭わず号令を出す。

隊長が身を挺して下した命令を、実行するために。

「 早くっ！！総員外へ走れエッ！！！」

その声に反応し、呆然とした者達を押しやり駆けだして行く隊員達
を傍目に、リユーベンはひとまず安心し

洞窟の深淵へと逆戻り、あるいは更に更に深くへと、落ちていった

続
く

第十四話 逃争戦線にて（後書き）

次で、直接対決できたら。
ワーウルフの変も終われるわけで

第十五話 一人一匹にて（前書き）

アレ？おかしいな

なんか変な妄想が入ったせいで話が終わらないぞ？

先んじて謝ります。

すいません、ワーウルフ編はまだ続きます

第十五話 一人一匹にて

(もう俺のばかん)

リユーベンは自然落下しながら考えていた。

(あー・・・何で逃げろつつつたんだろ？助けられ、だろそこは・・・
つうか俺ってなんで庇ったんだ？英雄願望なんて俺にもあったのか・・・
我ながら意外だあ)

肩に食い込む痛みと、三度目のこんにちはとなる眼前の　　とい
うか密着した黒い獣、ワーウルフの存在も相まって、今の状況が非
現実的に思えていた。

(まあ、仕方ないかあ・・・俺隊長さんだし・・・ハア。ガリア戦
役どころか、こんな真つ暗闇で死ぬのか、俺)

ヒューヒューと体を撫でて行く風と、ずいぶんと深くまで落ちてい
るにも関わらず流れ続ける滝の飛沫の感触、そして自らの血と獣の
体温を感じながら、リユーベンは段々と意識が薄れて行くのを感じ
た。

死を目前としているにも関わらず、何故か彼の心は穏やかだった。

この高さから落ちれば、底の見えない地下の岩盤にぶち当たって死ぬのは確実だ。

(転落死かぁ・・・クソ、鬱だ。ああ、あーあ、最後にアニエスに会いたかったな・・・そーいや、ワーウルフ温和しいなあ？・・・まあ、いいや。この高さなら、コイツも、死ぬ、だ、ろ・・・ザマ、アｗｗｗｗ・・・)

そして彼の意識は、その体と同じように闇の底へと沈んでいった

「何故ジエデラードを見捨てたアツ!？」

「止めるビザール!！」

「黙っているフランク!！答えるブルックリン! 貴様は奴の親友じゃなかったのかね!！」

「・・・」

「答えると言っている!！」

「落ち着けてんだビザール!！ブライアンも何とか言っただれよ!！」

無事に洞窟から抜け出した面々は、穴へと流れ込む川の畔で言い争っていた。

リューベンが落ちていった事実が一番反応したのは、意外にもグルフUNKであり、彼は撤退を指示したブライアンへと詰め寄っていた。

しかしブライアンは唇を噛みしめ目を閉じるばかりで、答えることはなかった。

周りにいたブリューゲルや、リューベンに助けられたサーリ工達も、沈痛な面もちを隠せなかった。

最後の最後、最後の油断で、仲間を一人失ってしまったのだ。

死んだとは限らないが底も見えない縦穴を、しかもワーウルフに肩を切り裂かれて落ちていった。

誰が見ても、生還は絶望的だろう。

軍人志望とはいえ学生である彼らには、この残酷な現実世界の厳しさを突きつけられるものだった。

冷静にグルフUNKをとりなすエンニツヒだって、決して冷静なわけがない。

彼とて、リューベンに起こった悲劇に内心は動揺に揺れている。

ただ、彼も、黙り込んでいる面々も、そしてグルフUNKも、ブラ

イアンも、皆疲れ切っているのだ。

演習の最終日に起こった一連の事件は、精神の幼い彼らを心身ともに疲弊させた。

と、ブライアンが口を開いた。

「命令だ。隊長の命令だった。僕たちはそれに従ったまでだ」

「命令……？目の前で仲間が死にそうになったのに！？命令だからと見捨てるのか！！」

「それが、軍人だろう、グルフユンク」

いつものカラカラとした声ではなく、苦渋を含んだ沈痛な声に、グルフユンクのように抗議しようとしたエンニツヒも声を掛けるのを躊躇う。

だがグルフユンクはお構いなしに、彼なりの持論を持ち上げる。

「軍人であり貴族なればこそ！！戦場で仲間を見捨てるなんて真似は許せるか！！僕はジェラードなんて嫌いだ！だが！奴は隊長で年下だった！！そんな奴だけ放って逃げ出すなんて、僕たちは負け犬じゃないかっ！！」

「ビザール……」

頑なに対立するリューベンを、本人の居ないところで尊重するような発言をするグルフUNKに、聞いていた面々は少し驚いた。

彼とて、誉れ有るゲルマニア軍人の息子なのだ。

リューベンがいつか感じたように、根っこから腐っているわけではない。

少し増長していただけで、エンニツヒが知るビザール・フォン・グルフUNKとは、こういう男だった。

エンニツヒは幼なじみが少し素直になったことに、場違いながらも感心した。

そして、その切っ掛けが仲間の死だということを考えると胸が痛くなつた。

ブライアンはグルフUNKに言われるがままに聞いていたが、閉じていた目を開くと、ギリ、と歯を食いしばりながらも口を開く。

「あの状況で、一番助けを乞いたかつたのリューベンだ。それでも彼は隊長として皆を逃がした。解るか？リューベンが一番どうすればいいのか解っていたんだ！！そんな彼が下した命令を、無視するなんて出来るわけ無いだろう！！」

ブライアンの叫ぶような言葉に、グルフUNKはまだ言いたそうなおことがありながらも、チツと舌打ちをして、背を向ける。

辺りに沈黙が広がり、夜の闇が更に深まった。

獣除けとしてブリューゲルが放った焚き火の音だけが、パチパチとその場に響く。

ブライアンとて内心は後悔に満ちあふれている。

親友を見捨てて良かったのか？

良いわけがない。命令なんて、ただの言い訳だ。

何故もう少し早く気づかなかったのか。

トライアングルの実力なんて、何の役にも立たないのか。

親友一人助けられないのか・・・

今からリューベンを助けにいこうにも、既に辺りは真っ暗であり、光を失った洞窟内は、人を拒絶する深淵の冥府だろう。

そんな場所に疲れきった隊を更に分けて踏み入れれば、ミイラ取りがミイラになるのは目に見えている。

そして地上に残る面々も夜の森は亜人や野獣といった危険に満ちているため、安全とは言えない。

隊の存続を考えるなら、リューベンを助けに行くのは全くの愚策としか言いようがないのだ。

ブライアンは、いつの間にか副官のようなことをしていた自分の立

場として、そんな愚は犯せなかった。

押し黙った面々の中、エンニツヒは俯きながらもポツリと漏らす。

「・・・情けねえなあ、俺たち」

それは、此処にいる皆の心を代弁した一言だった・・・

第十六話 一人一匹にて

「ウ、オオオオオ！貴様は神にでもなったつもりか！リユーベン・カイス・フォン・ジエラードオ！」

「ハハハハ！小娘が！拾ってやった恩すら忘れて牙をむくか！？アニエスよ！貴様には私自身の手で引導を渡してやるう！」

「私は、私たちは負けない！！」

空中に浮かぶ巨大戦艦にて、大魔王リユーベンは高笑いをしていた。

それに対するは、黒き狼にまたがり、両手の魔剣を振るう勇者王アニエス。

かつての師匠であり、愛する主人でもあったリユーベンに、アニエスは躊躇いを捨て剣を向ける。

『くらつてくれたばれ！ダークネスウォーターストリームウー！』

『こんなもの！喰らいつくせデルフー！』

『あいよおー！』

迫り来るリユーベンの究極魔法。

しかしアニエスは怯まず、右手の魔剣を空へとかざす。

かざされた魔剣、魔法殺しのデルFRINGERが、究極魔法を喰らいきる。

何事もなかったかのように、黒狼はアニエスを乗せリユーベンへと距離を詰める。

『ちよございなあー！ならばこれでどうだ！？エターナルフォース
アイシクルー！』

リユーベンは次々と氷の槍を作り出し、大砲のように打ち出してゆく。

さながらそれは壁の如く。天が降ってくるように、アニエスには見える。

だが

『それがあ、どうしたあっ！！やるぞ地下水！！』

『了解だぜ！！』

勇者王は臆さない。

左手に持つ魔の短剣、地下水による必殺魔法、勇者のみが使える、
ライトニングクラウドの上位技

『ギガデ ン！！！』

ガシャアアア！！

炸裂する雷撃は、氷の嵐を吹き飛ばす。
本来魔法が使えないはずのアニエスだったが、絆の力と魔剣の協力のもと、見事に魔法を操った。

『な、なにいつ！』

『これが！貴様がバカにした！人間の力だあつ！！』

ズバアアアツ！

リユーベンの放った残りの弾幕を切り払い、アニエスは黒狼を駆る。

ただ、ただかつての平和をハルケギニアに取り戻すために！！

『跳べ！相棒！！』

『ワオオーーーン！！』

アニエスに伝えるように、黒狼は一鳴きし、宙を舞う。

そして、アニエスはたどり着く。

『小癩なあああ！！』

『うおおおおおあ！！』

ズバアアアツン！

一瞬の交錯。

刹那の攻防。

『ガ、ツハア！！』

『ハア、ハア・・・やった、やったぞ！みんな！！』

勇者王アニエスの斬撃は、見事リューベンを袈裟切りに切り裂いた。ドシャアと崩れるかつての主の姿に、勝利を得たにも関わらずアニエスは悲痛な顔をしている。

そんな彼女に、息も絶え絶えなりューベンは笑みをこぼす。

『ハ、ハハハ、ガフツ・・・私に勝ったと、言うのに、随分な、ゴホツ、顔だな、アニエス・・・』

『リューベン、様・・・！！』

『フツッ、その、呼び名、も、懐かしい・・・よくぞここまで強く
なった・・・さすがは、私、の騎士だ』
いもつと

『・・・ツ！！リューベン様、私は・・・』

『誇れ、アニエス。お前の、勝ちだ・・・！！』

優しくほほえむその姿は、かつて憧れた主の姿そのもので、アリエスは溢れる涙が止まらなかった。

『・・・はい、はいっ！私は！貴方に会えたことを、貴方の妹であれたことを、誇りに思います・・・！！』

倒れるリューベンにそう告げてやれば、彼は憑き物が落ちたような表情で緩やかにほほえむ。

『ああ、安心した。じゃあな、アリエス。私は、ここでさらばだ。・・・これで、やっと、君に、会え、る・・・』

そして、リューベンは静かに力つきた。

『ツ、っ、ウア、あ、あああ・・・！』

『ここまでよく頑張ったな、相棒』

『そうさ嬢ちゃん。誇れ！天国のコイツが安心できるようになー！』

『クオーン！』

嗚咽を漏らすアリエスに、仲間達は優しく声を掛ける。

『みんな・・・ああ、そうだ。そうだった。私は勇者王アニエス！』
すつくと立ち上がりマントを翻すと、アニエスは空中戦艦の縁に立つ。

そこで、世界中でこの戦いを見守っていた人々に、勇者として勝ち鴉をあげる。

『魔王は、魔王は倒した！！みんな！世界は！救われたん！』

ワアアアアア・・・！！

剣をかざす勇者の雄々しき姿に、民衆は歓喜し、人々は自由を喜んだ。

世界の人々は声をそろえ口々にほめたたえる。

『万歳！勇者アニエス万歳！！』

皆の歓声を受けながら、アニエスは空を仰ぎ見る。
そして、静かに、別れを告げた。

『リユーベン様、私は、明日へ向かいます・・・!』

しかし、その平和は長く続かなかった。

『フッフ、リユーベンを倒したか』

第一の敵、

暗黒聖人クロムウエル

『だが奴は我ら大魔王の中でも最弱! 奴ごときで調子に乗られてもな』

第二の敵、

『髭魔神』ペド＝ワルド

『ほほほ、身の程知らずの人間は皆奴隷にしましょうか! 超魔王様もお喜びになるわ?』

第三の敵、

『虚乳鬼女』ツングレメガネ

『小娘がいきがりよる。クカカカカ、こんな世界など滅ぼしてやるう!』

そして最大の敵、
『超魔王』ジヨゼツフ

突如現れた新たなる敵。
立ちほだかる真の黒幕。
黒雲が立ちこめ、光が戻ったはずのハルケギニアには、また滅びの
危機が訪れる。

先を上回る大魔王達の侵攻に人々は絶望にくれ、嘆き悲しんだ。

だが忘れるなかれ。

勇者王は決して諦めない。諦めるのは、誰でもできる。
だが、前を向き、明日を切り開くのは彼女の使命！

片手にデルフを

片手に地下水を

そして黒狼を従えて

勇者王は立ち上がる！

『さあ征くぞ魔王共 魔力の貯蔵は十分か!』

アニエスの戦いは、まだまだ終わらない!!

完ッ!!

『勇者王アニエスちゃん』のご愛読ありがとうございました

紫蘇 ぶりみる先生の次回作にご期待ください

・
・
・

「俺死んどるウウーッ!!?」

ガバツと言う擬音が似合う勢いで、リューベンは目を覚ました。

「つうかアニエスが!アニエスが勇者王!?!どこのサイボーグだよ

！！？つうかワールフ飼慣らしとる！！あの娘はもの 姫かよ！？つうか何で俺は魔王に成り上がったんだ！？あと厨二！！俺の魔法厨二すぎる！！イタタタタ！？心が痛い！しかもまだ魔王いっぱいいたし！！完全に打ち切りだし！！作者ぶりみるだし！！フザケてんのか！？何故こうなったし！？誰か説明しろし！？」

ガアアアと猛りながら、突っ込みどころ満載の夢に自ら突っ込みを入れていくリューベン。

普段使わない言葉遣い、脳内でしか使わない口調になっているが本人も気づいていない。

それほどまでに、あの夢は意味不明だった。

自身の脳の産物なのに、自身でも驚愕の内容だったのだ。

なんだあの三流英雄譚は？

リューベンは自分の頭の中が空恐ろしくなり、取りあえず気が済むまで叫びまくってから 現状に気が付いた。

「あ……？生きてる、のか？」

少し落ち着き、普段の『霧雨』の口調に戻ったが、内心の混乱はまだ収まっていなかった。

「……は……ッツ！」

意識がはつきりすれば、急激な痛みが襲ってくる。

原因は、先程抉られた肩の傷と、そこからぶら下がっている左腕。肘辺りでおかしな方向に曲がっており、完全に折れていた。

鈍い痛みが胴体にも感じられ、肋骨が罅なり折れるなりしているらしい。

そこかしこを負傷しているようだが幸いなことに吐血などはなく、内蔵は無事なようだ。

（ッ、イタタタタ！？怪我がヒデエ！？……や、でもあの高さから落ちて、何で生きてるんだ、俺は？）

痛みに顔をしかめながらも、改めて辺りを見回すと、そこは砂浜のような場所だった。

滝から流れる水で作られた小さな地底湖に、さらさらと砂が寄せては返している。

暗闇のはずなのに仄かに明るいのは、発光性質を持つコケが天井や壁に群生しているかららしい。

リューベンが予想したような堅い堅い岩盤ではなく、滝によって運ばれた砂や、水に削られた粉のような砂利が堆積してできた自然の神秘と呼べる空間だった。

「樹海の底にこんな場所があったとは……」

気分は某風の谷の姫様である。

しかし辺りには屹立した棘のような岩や突きだした石柱なども多々見受けられ、そこに当たっていたら今頃呑気に夢なんて見れていなかっただろうことも解る。

どうやらスプラッター一步手前を切り抜けたらしい。

（あぶねええー！運いい！運いいよ俺！？いや、でも落ちた時点で運最悪だろ？厄日か、厄日なのか？大殺界なのか！？）

しかしやはり運が良いのだろうと思ひ直す。

あの高さから落ちて骨折程度で済んでいるのがその証拠だろう。

リユーベンは、自身が治療のできる水メイズで良かったと心から思った。

幸い、持ち合わせのポジションは落下時に紛失することなく無事だったので骨折程度なら殆ど良くなるはずだ。

運良く杖も手放してはおらず、しっかり腰のホルダーに収まっていた。

実に運が良い。

（しかし、それにしても怪我が少ない……なんでだ？……取り敢えず、止血ぐらいするか）

疑問は置いておき、ひとまず応急処置を先にしてしまうことにする。立ち上がるとまだ痛むので、水に半身浸かりながらもズルズルと身を引きずって体を陸地にあげる。

そこでリューベンには先ほどの疑問の答えを見つけた。

（なるほど・・・コイツがクッションになったのか）

そこには血塗れで横たわるワールフの姿があった。

僅かだが息の音が聞こえているため死んではいないようだが、虫の息と言うところか。

動かさず威嚇もしないところを見れば、気を失っているのだろう。

いくら水面とはいえ、高度から落ちればそれは鉄にもまさる壁となる。

頑強なワールフだからこそ血塗れで済んでいるわけで、もしもリューベンが下ならばペシャンコになっていただろう。

そう考えれば、このワールフはリューベンの恩人とも呼べるわけだが・・・

） いや、コイツのせいでこうなったんだからな。ザマアWWW・・・

自業自得だ。

そう思うことにして治療に専念する。

ワーウルフから少し離れたところにドツカリと腰をおろし、道具袋として腰に提げたポーチを漁る。

濡れてはいるが無事だった応急キット（ハルケギニア自体にはこの概念はなく、リユーベンがもしものためにこっそり用意していた。まさにそのもしもが起きたわけだが）から包帯などを取り出し、着々と治療をしていく。

「……よし」

数分後、止血などを終えさせて次は魔法治療だと思い立ち、ポーションを取り出すが……

ちらりと視線をずらす。

そこにはやはり、先ほどよりも弱ったように見えるワーウルフ。

「んー……」

リユーベンは悩む。

先も言ったようにアレはアレの自業自得だ。

自分が躊躇うことなど何一つ無いはずだが……

(目の前で死なれるのは、なんか・・・)

「寝覚めが悪い、な」

リユーベンは右手で杖を持ち直すと、ワーウルフへと近寄っていった。

「これでよし、と」

持ち合わせた水の秘薬をすべてワーウルフに使い、『ヒールング治療』の魔法を掛けるリユーベン。

ラインレベルのメイジとはいえ秘薬で底上げた治療ならば、元来生命力の強い獣になればよく効くはずだ。
包帯も巻いてやり、節々の出血も押さえてやる。

現にワーウルフは治療前よりも穏やかな息づかいになり、すやすやと眠っていた。

(なあんでこんな事してんだろなあ・・・イテテ)

リユーベンは使い切ったポーションの瓶を眺めながら、ぼつっと考えていた。

自分は未だ最低限の処置だけであり、左腕の骨折や肩の裂傷は完治とは程遠くまだ痛みもあるし、肋骨も軋んだままだ。

ワーウルフが仲間だったというなら、優先度的にも先に治療するのは納得できる。

だが、あれは敵なのだ。

リユーベン達に牙を剥いてきた明確なる敵。

殺しはすれど治療までしてやる必要は無いのだが

そこでふと考えた。

（あー、コイツからすれば俺たちの方が外敵か）

そう、ワーウルフの縄張りに踏み入り荒らしていたのはリユーベン達だ。

森に入る前に近隣の村長から聞いた話では人に害を為したとか言う話はなかった。

つまり、ワーウルフは縄張りで餌を飼っていたところたまたまやって来た余所者に警戒しただけであり、こちらに非があるのではないか？

奴からすればやっと追い払えたと思えば自分の巢に踏み入れられていたのだ。

(そりゃ怒るわな)

最後の追撃も自身の安全を確保するために、縄張りを荒らす不届き者達を追い払うため押しだと考えれば、納得がいく。

ワーウルフにとっても予想外なのは、一撃をくれてやった相手つまりリューベンに爪が深く食い込んだため、自身も逃げ損ない穴に落ちたことだろうか。

こうして考えれば、ワーウルフからすると全く持って迷惑な話ではないか？

リューベンはどことなく罪悪感が沸いてきて、眠る黒狼を端目に見る。

「・・・悪いことをしたな」

野生動物の虐待とかで訴えられないだろうか？

そんなくだらないことを考えながらも仕上げとばかりに自身の左腕を固定し、包帯が切れたためにマントで三角巾のようにして腕を吊る。

ギシツと結べば、多少響くが問題ないだろう。

「フウ……」

する事はなくなったので一息つけば、リューベンは急な疲労を感じた。

それも当然だろう。

この日の出来事は彼の人生でも三指に入るハードなものだった。

それなりに血も流していたし、水に浸かっていたことで体温も下がっている。

安心を感じると、今まで麻痺していた疲れと眠気が一挙にリューベンを襲った。

(眠い……俺れも適当に寝るか)

ワウルフから少し離れてごろりと横になれば、すぐさま瞼が落ちてくる。

うとうとと微睡む頭の片隅で、リューベンはとあることに気づく。

(アイツ起きたら、俺襲われるんじゃないか……?ま、いいか……)

・寝よう)

それなりに危険なことを察知したのだが、働かない頭は考えることを放棄する。

(オヤ、スミ・・・)

そしてリューベンはこの日二度目にして初めて自ら意識を落とした。

「・・・」

「スー、グー・・・ん、グウ・・・スー・・・」

リューベンが眠ってより数時間後。

外の時間では既に深夜。

地下深くでひっそりと、ワーウルフは目を覚ます。

ワーウルフは落下の時点で意識はあり、這々の体で陸へと体を押し上げたのだ。その時には、獣の本能でこのまま放っておけば自分は

死ぬと解っていたのだが・・・

自身の体を確かめれば、不覚にて負った傷は大半が塞がり、小さな傷が残るのみ。

そばで寝息をたてていた治療を施したと思われる人間は、獣がこの日追い払った人間共の一人だった。

寝息に混じり時折漏れる呻き声は、彼も傷を負っていることを示しており、ワーウルフの敏感な鼻も微かな血のおいを嗅ぎ取った。

「スー、スウ・・・ウム、グウ・・・」

何故敵であるはずの自分の傷を治し、彼自身の傷は治していないのか？

何故敵である自分の側で隙だらけの姿を見せているのか？

ワーウルフには解らなかった。

だが、このまま人間にトドメを刺すという気にもならなかった。

「うん・・・」

人間が、痛みに眉をしかめながら、寒さに体を震わせた。

洞窟の地下は万年気温が低く、血を無くした人間は青白い冷え切っ

た顔になっている。

「・・・グルア」

のっそりと体を動かし、横たわる人間を覆うようにワーウルフは寝転んだ。

その体温を感じたのか、フサフサとした黒い体毛の柔らかさを感じたのか、人間は先ほどまでよりも少し穏やかな表情になる。

それを見届けると、ワーウルフも頭を落とし静かに目を閉じるのだった。

一人と一匹は、静かに眠り続ける

「ハア、ハア、ハア・・・クソッ！逃げちまったけどどうするんだよ!?!」

「だけどあんな化けモンに俺たちがかなうわけ無いだろ!」

「だ、だけどよ・・・!？」

場面は変わり、とある街道にて。

彼らは、ワーウルフとの第一遭遇な際して仲間を置いて逃げた隊員達だった。

襲撃から半日逃げ続け、彼らは森を抜けた後も途中の村で馬を強奪して街道まで出たのだった。

彼らの行動も命を守るためには悪手ではない。

だが、仲間を見捨てたという恐怖感が、今更ながら彼らを襲っていた。

半日も逃げておきながらなんと無責任な、と思うかもしれない。

しかし、人間とは得てしてそういうものであり、自身の命の保証が為されれば、今度はそれ以外が気になりだすものだ。

彼らを襲うのは仲間を見捨てた罪悪感ではなく、『仲間を見捨てるような人間だと周りに思われたくない』という身勝手な心配であった。

だが、彼らの中で、一人だけ落ち着き払った青年がいた。

「まずは落ち着こう、みんな」

「だ、だがノリンズ！このままじゃ俺たちは・・・！？」

薄緑の髪に細い目のその青年　ノリンズはまるで問題ないとばかりに緩い表情を崩さない。

それどころか、その顔には軽く笑みすら張り付けている。

「なにも『問題はない』。僕たちは『逃げた』んじゃないよ。『判断の遅かった隊長に代わり、先んじて応援を呼びに戻った』んだ。

ね、何も問題はない」

「そ、そうか！そうだな！」

「ああ、俺たちはあえて仲間達の為に撤退したんだ！！」

「じ、じゃあ、早いとこ学校に戻って先生を呼びに行かなきゃ・・・！」

ノリンズの言葉に次々と屁理屈を並べだした面々を見て、ノリンズは更に笑みを深める。

「ああ、『みんなの為に』急ごうか・・・」

勢いづいて馬足を進める彼らを余所に、ノリンズはひっそいとほくそ笑む。

そこには、リユーベンと話していた時のような誠実さはなかった。

（悪いねジエデラード君……だから言っただろう？僕は、『副官向き』なんだ。だから、隊長に代わって為すべきことを為してるだけさ……フフフ）

馬の手綱を操りながら、ジエデラード小隊であるはずの四人は首都へと駆ける

続く

第十五話 一人一匹にて(後書き)

次回はリユーベンやっと地上へ

外伝ノ一 「少女とお遣い」(前書き)

外伝です

本編でなくてすみません

少し整合性を合わせるのに難航しておりまして、だいぶん前に仕上げたこちらを投稿いたします

外伝ノ一 「少女とお遣い」

これはとある少女の物語

これはとある少女の辿る道

外伝之一話 少女とお遣い

ゲルマニア帝都ヴィンドボナに建ち並ぶ、中流階級向けの高級住宅街。

その中のある一軒、その庭に、少女と老人が二人佇んでいた。

少女の名はアニエス。

リユーベン・カイス・フォン・ジエテラードという貴族の手により、本来の歴史から外れ行く少女である。

老人の名はウエンブラム。アニエスの奉公する屋敷の主人であり、彼女の戦闘の師でもある。

そんな二人が庭にて立ち会っていれば、自ずとその目的は知れた。

「それでは遅い！目で見る前に音を感じる！」

「ハッ、ハッ…！はいつ…！」

行われるのは毎日の日課と化した戦闘訓練。

ウエンブラムがアニエスを狙い、緩やかながらも拳打を放つ。

十にも満たぬ娘ながら、アニエスは果敢に体を動かしそれらを避けていた。

これは彼女が望んだことでもあり、辛くともそれは彼女の選択故である。

「がっ……！？」

「注意力が散漫だ！それではメイジの相手なぞ夢のまた夢だぞ…！」

「ッ、はいつ…！」

速度が落ち、生まれた死角から、すり抜けた拳がアニエスの肩に突き刺さる。

一寸怯むも、しかし叱咤されすぐにまた眼前に意識を集中させる。

これはただただ回避動作を繰り返す鍛錬だった。

アニエスの目的のためには、第一に圧倒的不利なメイジ戦を意識せねばならない。

そうでなくとも、非力な女の身では、攻撃を受け止めるよりも避けた方が効率的だからである。

目的の達成に何年かかるかは解らないが、幼い頃より足腰を鍛え、

反応速度を鍛えることに不都合はない。

体の出来きっていない今、彼女の修行は、これが主となっていた。

「よし。今日はこれまでだ。先ほどの言葉忘れないように」

「はいっ！ありがとうございます！！」

本日のノルマを終え、ウエンブラムは屋敷へと戻って行く。
その背に向かって深々と頭を下げ、姿が見えなくなると、アニエスは乱れた息を整え汗を拭った。

「はっ、はっ、ふう……よし」

そして使用人の部屋へと戻り、午後からの仕事に取り組む。

これが、アニエスがこの屋敷に来てから三年間の毎日だった。

とある日の朝方、アニエスはウエンブラムに呼び出された。

早朝の仕事を終え、一息ついたところを家主に呼ばれ、何かへまをやったかと案じながら行ってみれば……

「え……お遣い、ですか？」

「うむ、息子が遠出しておるのは知っているな？」

「はい」

ウエンブラムの息子、インドリユーは一昨年軍学校を卒業した（リユーベンとは入れ違い）が、素質がないと言って軍属にはならず、帝都の貴族御用達の商会がある町や村へと渡りを付け、買い付ける仕事をしていた。

貴族ながらも下級であり、土地を持たないウエンブラム家では殆ど平民と同じような生活スタイルとなっており、貴族年金に頼るだけではないかと、インドリユー自身がその業務を見つけてきたのだ。

どうやら商売・経営面に彼の才は突出していたらしく、ウエンブラム曰く『つくづく親に似ない息子だ』とのことだった。

閑話休題

その彼は、現在東へ三日ほど行った町へ新興のワイン畑の下見に行っていた。

「で、だ。あいつめ、それにかまけてもう一つの用をすっかり忘れておったのだよ」

「もう一つですか？」

「うむ、あやつが向かった村の正反対になるのだが、西にしばらく行ったところに私の古い知り合いがおってな。そちらにも文を持た

せて遣らすつもりだったのだが、どうにも忘れて行きよってな」

まったくあの間抜けめ、と、息子に掛けるには些か手厳しいことを
呟き、ウェンブラムは続ける。

「そこでお前だ」

「…はあ。でも、私なんかではお役目を果たせないかと……」

彼女の言うことは尤もだ。数えて十歳、現在九歳の少女の一人歩き
など、比較的治安が良い帝都付近とは言え危険が過ぎるだろう。

破落戸（しんがた）にしる亜人（あにん）にしる、彼らにとっては子供など『いい獲物』で
しかない。

そんなことはウェンブラムも理解しているといった風に、うむ、と
一つ頷いた。

「勿論、一人では行かせんよ。道程自体には他の者に向かわせるが、
お主もそれに同行しなさい」

「？」

どういうことかと、首をひねるアニエス。

それならば彼女は別に要らないのではないか？という思考が頭に浮
かぶ。

そんな表情を読みとつたらしく、ウェンブラムはホッホッと笑った。

「ああ、丁度いい機会だからな。一度『外』を見てきなさい。なに、

お主はリユーベン様から預かっているのだからな、これぐらいは構わんさ」

確かに彼女の目指す道は平坦ではない。

そのためにも今の内から世間を知っておくことも重要であるだろう。

ということとは

(わざわざ私のために機会をくださったんだ……)

思えばこの屋敷に来てから二年と少し、アニエスはヴィンドボナから外へは出ていない。

修業と奉公、時節の際にリユーベンと共にジエデラード領に行きもしたが、それでもジエデラードの屋敷にしか行っていない。

見聞を広めるには良い機会だ。

主家筋の子息からの預かり者とはいえ、たかが平民の小娘に気を遣ってくれる師匠に、アニエスは暖かいモノを感じた。

好孝爺らしく笑うウエンブラムに感謝の念を送りながら、彼女は礼を取る。

「わかりました、行ってまいります」

「む、よろしい。『移動にかかる時間』は往復で一週間ほどだろう。まあそう肩肘を張るな、あくまでお前は供なのだからな」

「はいっ！」

元気よく返事をして退室の礼をすると、アニエスは旅の供となる使用人の一人に挨拶に向かうのだった。

アニエスが出て行った後、部屋に残ったウエンブラムはあごを撫でながら一人ごちる。

その顔には、嬉しいことになるだろう、と言わんばかりのニヤツいた笑みが浮かんでいる。

「フム、『移動』だけならば一週間だが……『アヤツ』にかかると、その倍は掛かるかの。まあ、楽しみに待つとるよ」

ホツホツホツ、と、意地の悪い笑い声が室内を満たしていた

二日後、時刻は未だ朝霧立ちこめる早朝ながら、アニエスはしつかりとした面持ちで屋敷の門前に向かっていった。

昨日一日で旅装を整え、仕事の方も片づけている。

執事から話は回っていたようで、使用人達はそんなアニエスに『いってらっしゃい』『気をつけてな』と声を掛け、送り出してくれた。

今日はまず町の方まで出てから、そこで乗り合い馬車を拾う手筈になっている。お遣いと言っても緊急性は低いとかで、ゆつたり一週間かけて行く予定だった。

「（早めに行かなきゃ……えと、あー）おはようございますー！キー

スさん！」

「お？やあ、おはよ、アニエス。準備は出来たかい？」

門の前には既に、旅の連れ合いとなる使用人である青年が立っていた。

名はキース。

茶髪を短く刈り込んだ、体格の良い若者だ。

アニエスとも顔なじみであり、気のいい青年と言える人物だった。

あくまで素人レベルだが腕も立つらしく、確かに彼ならば子守も必要なこのお遣いを任されるなど、アニエスは納得していた。

「遅くなつてすみません！」

「いやいや、俺も今来たところさね。じゃ、早速だが行こうか」

「はい！」

そうして二人は出発した。

馬車駅まで行く道すがら、『小さいとは言えレディは待たせられんよな』、など恋愛にオープンなゲルマニアの男らしいセリフを吐くキース。

こういった言動から軽そうな風に見られるが、彼とて良い人揃いのウェンブラム家で働いているのだ。

根はマジメだと知っている。

初めこそ戸惑うことはあったが、今では慣れたものだ。

「キースさん、どこの村まで行くんですか？」

「ありゃ？旦那様から聞いてなかったのか？」

「はい、ついて行けとしか言われませんでした」

彼はアニエスの言葉に意外そうな顔を見せるも、すぐに納得したようだ。

「んん、旦那様ならしそくだよな。うん、ここから三日半ぐらいで着くところだよ。山の麓にあるハイラーって村だ」

「キースさんは行ったことおありになるんですか？」

「うん、何回かな。まあそんな特筆するモンはなかったかな？普通の村だったよ」

「へえ……………」

そう言われると無意識に残念な気持ちにもなるが、それでも自身にとって初めての旅である。色々見て損はないと考え直す。

アニエスは、ダングルテールに暮らしていたときは普通の少女だった。

普通の、どこにでもいる村娘。

だからこそ、幼い彼女を村の外に出す大人達は居なかった。リューベンに会ってからの移動は専ら貴族用に仕立てられた馬車であり、平民としての旅はこれが初めてだったのだ。

村には特に何も無いというのは不思議な話ではない。彼女の故郷にだってこれと言ったものはなかったから、どこの村もそんなものなのだと思いが当たった。

むしろ、トリスティンのタルブなどのように、地方の寒村に特産品がある方が珍しいのである。

「おや？初めての旅でそんなところはご不満だったか？」

「い、いえ！そういうわけじゃ……！！」

「ハハツ、わかってんよ。アニエスはそんな娘じゃないよな。うん、ま、旅するつても良い体験だと思っときな」

キースの言う通りだった。アニエスにとって大事なことは、『旅をする』という経験自体である。

つまるところ、旅路にこそ意味があった。

「はい、いつかは一人で旅できるように色々覚えます」

「そついやアニエスには夢があるんだっけか？女の子の一人旅は危なそうだけどなあ。ま、ぼちぼち頑張りな」

「……はい」

ぽふぽふと頭を叩くキースに反し、アニエスは少し俯いた。

同僚であり、可愛がってくれている彼らには、自分の復讐のことに
ついてなど話していない。

話せなかった。

自身の正しいとは言えない生き方。

それを知られても意味はなかったし、何故かどうしてもはばかられたのだ。

復讐を『正しくないかも知れない』と考えている時点で、彼女の中の何かが変わりつつあるのだが、アニエス自身も自覚はしていなかった。

押し黙ったアニエスを怪訝に思うも、キースは特に言及しなかった。

そして歩くこと数十分。

早起きな商売人達は既に働き出し、町に活気があふれ出した頃、二人は馬車駅へとたどり着いた。

「ようし、着いたぜ。さて、じゃあ西行きの探してくるわ。ちょっと待っててくれな」

「あ、はい」

キースは同じ方面へ向かう客達を探し、受付の方へ向かう。ここにあるのは乗り合い馬車であり、同じ方向へ行く者同士が折半で運賃を支払い、安く旅をするために重宝されていた。

アニエスはキョロキョロと周りを見渡す。

今まで近くを通ることはあったが、ここを利用するのは初めてである。

先ほどの沈んだ気持ちを振り払うためにも、そしてふつつと沸き上がる好奇心を満たすためにも観察を始めたのだった。

それから数分経ったころ、自身を呼ぶ声にそちらを向けば、キースが手を振っていた。

「おい、アニエス！見つかったぞう！」

「はい！今行きます！」

トタタと小走りで向かえば、そんなに焦らなくていいぜ？と苦笑するキース。

しかしただでさえお荷物なのだから迷惑は掛けられない。

「よし、コイツだよ、乗りな」

「はい！あ、他の方々はいらしたんですか？」

「ああ、三人ほど見つかった。まあこれだと普通の値段くらいだな」

「普通はどれぐらいなんですか？」

「ん？こんなモンだよ。あんまり多いと安いけどむさ苦しいからなあ。ハハハ、ま、女の子ばかりなら極楽だけど？」

「小さい子相手に何てこと話してんだ兄さん……」

キースの言葉を聞きつけたらしい御者が声を掛けてきた。

確かに、十歳やそこらの娘にわざわざ話す内容でもないだろうが、キースとしてはいつものことだ。

「ハツハツ、この子は案外大人だぜ？慣れてるよな、アニエス？」

「え？！え、あ、はい？」

思わぬ言葉に、語尾が上がるアニエス。

そんな彼女を見て、御者はため息を一つ。

「ハア……まあ、早く乗ってくれ。もう少しで出るよ」

「了解つとーさ、乗るぞ」

「はい！」

こんな調子で、彼らは旅立つのだった。

ガラガラと馬車は街道に行く。

今回アニエス達が乗り込んだ馬車には彼女ら二人と御者を含め、計六人が乗っている。

旅は道連れ何とやらと言ったもので、社交的かつ雰囲気を作ること
に長けたキースのお陰か、はたまた小さい子供だからと優しい目で
見られたのか、アニエスは他の乗客達とも仲良くやれていた。

彼らは三人とも男で、見るからに商人といった風体。実際に話せば
やはり商人で、三人で組んで商いをしているとか。

彼らとの話はなかなかに役立つ物も多く、あらゆる地を回り商品を
仕入れる彼らの話題の引き出しは豊富だった。
さすがは商人、話術と情報を武器にしている人種なだけはある。

道中これと言った問題もなく、一日毎に駅で宿を取り、そしてまた
馬車を走らせる。

こうして二日と半日が過ぎた。

「さつて、俺らはここいらで降りるぜ。」

「え？何もありませんよ？」

朝から馬車を走らせ、日が南東高めに昇った辺りで、おもむろにキ
ースが切り出した。

商人達と話していたアニエスは虚を突かれたが、それを受け窓から
外を見る。

しかしそこにはまだまだ街道が続いているだけだった。

「何だ、君らはハイラーに行くのかね？」

商人の一人がアニエス達に訪ねる。

アニエスは、そういえば詳しい行き先は話していなかったな、と思
い当たった。『何で解ったんですか？』と言いそうな顔をした少女
に、別の商人が口を開いた。

「お嬢さん、ここから少し行った先に分かれ道があるんだよ。そこ
を右に行けばハイラー、左に行けばこの馬車の進むルートさ。つま
り、ここいらで降りるってことはハイラー行きの人間ってわけだ」

「そついうこと！ちなみに左に行きゃあ、ゲルマニアの西の端っこ
の方まで行っちまうんだよ」

「そうなんですか」

聞けばハイラーとは山の麓に在るだけあって、すこし奥まった場所
に位置するらしい。

半ばミステリーツアー状態のアニエスにとっては、小出しにされて
いく情報を楽しむようになってきていた。

ガタリ

と、馬車が揺れ、車輪が止まったことがわかった。

「っと、言ったら着いたらしいな。では、皆さん！俺らは一足先
に失礼しますよ。それではこっからも良い旅を」

「私たちはまだ先に行くからね。縁があったら私たちの店にも来てくれないかな？少しは勉強するよ？」

「嬢ちゃんも達者でな」

「はい！色々お話聞かせていただいております！」

ぺこりと頭を下げるアニエスに、思わず笑みを浮かべながらも三人の商人達は別れの言葉を告げた。
アニエスは、こういった人達との出会いや別れにも価値があるのだな、と学んだという。

御者に運賃を払うため馬車を降りようとすれば、思い出したように商人が切り出す。

「そつだ、キース君」

「はい？」

「代金はしつかり数えたまえよ？」

暗に『手前で降りようが一銭も負からんぞ。てめえの分はきつかり払いな』と言っていた。

「ハ、ハハ。うん、大丈夫大丈夫……」

「うむ、うむ。では、達者でね。ああ、私達の店はヴィンドボナのウンテル・リンデン街を入れて直ぐだ。機会が在れば、是非ご利用を」

別れ際の爽やかな笑顔のままのたまう商人に、キースも頬を少しひきつらせ答えた。

さすが商人。

抜け目もなければちゃっかり宣伝もする。

商魂も逞しいらしい。

ア二エス9歳、そんな理ことわりを学んだ日であった。

「さて、ちつとばかり歩くぜ」

ガラガラと去って行く馬車に手を振り見送ると、キースは荷物を手に取り歩き出す。

隣の先達に倣いやはりひらひらと手を振っていたア二エスも彼の後に従えば、眼前には今までよりも幾分か細い道があった。

「こっちの道は小さいですね」

「ああ、あんまり馬車の出入りもないし。現に乗り合いじゃあ村まで行かんしな」

「それって不便じゃないですか？町から物とか運ぶのに」

「んー、まあ、通れないほど狭いつてわけでもないが、たいがい馬喰ばくろだから。走らせんのも難儀なんだよね」

キースは足下の道を指差しながらそう言った。

馬喰とは、馬で進むのが困難な道、荒れた道と言うことだ。

アニエスも下を見れば、確かに大きな石や礫が多数転がっていた。新しい轍の跡も見受けられず、ここ最近にこの道を利用した馬車の少なさを推し量れた。

「整備とかしないんでしょうか？」

「そりゃあここのご領主様の仕事だからね。何とも言えんわ」

村人達が上奏して、聞き入れられれば土のメイジが派遣され、改善されることもあるそうだ。

しかし、大体的場合、たかが村一つのためにメイジ達を動かす領主は多くない。貧乏な貴族であればあるほど、その傾向は強い。（あれ？）

ふと、アニエスはそこで一つのことを思い出す。

「あの……以前にリユーベン様のお屋敷にお供させてもらったとき、たしかこの位の道も通った気がします。でも」

『そんなに揺れただろうか？』

何が言いたいか察したキースは、あー、と声を出した。

「ジエデラード領は、ありゃスゴいからな。何度か行っただが、荒れた道が殆ど無いんだ。普通はこういう寒村みたいなところは、どこもこんな感じなんだが」

「やっぱり伯爵家ってお金持ちなんですね」

アニエスは、リユーベンに会うまでは貴族など皆同じだという認識だった。

『魔法を使う』『偉い人種』なのだ。

しかし、ヴィンドボナの屋敷で暮らす内にその中でも序列があることを知った。細かいことまではわからないが、爵位の優劣ぐらいならば解る。

そして主であるリユーベンの生家、ジエデラード家は伯爵位。

軍部で名を馳せているとも聞いたことがあり、お金持ちなのだろうと推測した。

しかしキースはそんな彼女の言葉に突っ込む。

「うん、確かに伯爵家だから金持ちだろうけど。道路補修とかはなんでも伯爵じゃなくてご子息、リユーベン様が主導したって聞いたぜ」

「！リユーベン様が!?!」

「ああ、確か四、五年前かな？政を学ぶ一貫で内政に関わられたらしいんだが、その時に発案されたんだってさ。なんでも『劣悪な道は民の生活に直結する。直ぐに改善すべきだ』とか仰ったとか。それが伯爵の耳に入って、あまりにも推すもんだから実施されたんだと。あ、コレあその領に住んでるダチから聞いたんだよ」

「リユーベン様が……………」

「いや、四、五年前つつつたら11歳ぐらいだろ？ すごいな。さすがは旦那様の仕える主家筋の方だ…………… って、アニエス？」

「……………」

キースの話は、彼女に衝撃を与えた。

しかし、それだけでなく、納得もできた。

(リユーベン様…………… やっぱり)

自らの慕う主。

自らを何もない場所から、救い上げてくれた方。

自らが、許されるなら忠誠を誓いたい方。

そんな彼が、『民のために』考えている。

言われてしまえば当たり前だろう。

貴族とは斯く在らん、そう体现されているかのような彼女の主だ。

彼にとって、民とは守るべき対象であるのだろう。

アニエスは、メイジには良い印象をあまり抱いていない。

彼女の経緯を考えれば当たり前のことと言える。

むしろ憎しみすら抱いている。

現に、復讐という選択肢を彼女は選んだ。

だが

『貴族』とは、『魔法が使えるから』貴族なのではない。

『弱き民を思えてこそ』上に立つ『貴族』と呼べるのだろう。

幼い心ながらに、そんなことを思う。

アニエスは今の主に出会えたことが、より誇らしく思えた。

「あれー？アニエス？何笑ってんの？アニエース？」

その気持ちがアニエスの表情に柔らかく、嬉しげな笑みを形作り、急に黙りこみ笑みを浮かべだした小さな連れに、キースが困惑していた。

だが次の瞬間には、
ピコーン！と。
キースの脳裏に、まるでライトの魔法が発動したかのような光が灯る。

「はっはあ〜ん、そついやアニエスはリューベン様大好きだったよなあ」

「つうえ?!」

ドッキンコ！と擬音が着かんばかりに肩を跳ね上げたアニエス。
キースは自分の想像通りの反応に、微笑ましい物を見る目を向ける。

「うんうん。なんだかんだでアニエスも乙女かあ。いや、主君の息に恋する奉公人の娘。恋に燃え上がるゲルマニア人としては、よ
り燃えるシチュエーションじゃあないの！」

「恋っ！？いや、違う！違います！？恋とか好きとかじゃ、いや、
お慕いしてますけど………！？」

アタフタと言い連ねる少女。
キースは思った。

『9歳の娘が顔を赤くして半分パニックしている様は中々にイイ物だ』
、と。

別に彼がロリンなのではない。
ただ可愛い物は愛でたい夕子ただけだ。

(うん、わかりやすいなあ)

わやわやと喧しく歩き続けていれば、ふと、道が開けていた。

言い訳(?)を繰り返していたアニエスと、それを受け流していた
キースはそれに気づく。

「ほら、もう着くぞ」

そう言ってやれば、アニエスはとりあえず落ち着いたようでまた静
かになった。その顔は、未だ赤らんでおり、からかわれたことへの
不満が垣間見える。

「拗ねるな拗ねるな」

「拗ねてません……」

「クツクツクツ、スマンスマン」

「……………」

アニエスは、隣で誠意無い謝罪を繰り返した青年を白い目で見た。しかしこれ以上何かを言っても逆にあしらわれるだけだろうし、不承不承ながらも口をつぐみ歩くことに集中した。

「……………早くいきましよう」

「あ、オイオイ、待ちなつての……………まったく」

足早に前に行くアニエスにキースはやはり苦笑するも、その歩みに追いつくべく小走りになる。

村の入り口は、あと50マイルにまで迫っていた。

「ここがハイラー……………」

「やっぱり期待してたのか？なんもないだろ」

「そう、ですね」

村の中央を通る、比較的太い通りを歩きながら、アニエスは村内を見渡す。

一見ただけで小さな村であるのわかり、『寒村』という言葉がぴったりと当てはまる。

ハイラーは人口数十人の小さな村だ。

世帯数も多いわけでもなく、ハルケギニアならばどこにでもあるように第二産業を生業としている村。

キースがあらかじめ言っていたように、面白い物があるわけではなかった。

ただ今回はお遣いで来たわけで。

「キースさん」

「おう、どした？」

「そういえば、旦那様のご友人とはどんな方なんでしょうか？」

「ああ、友人つつても平民の爺さんさ。かなり変わったお方でなあ」

「……！！平民なんですか？」

貴族であるウエンブラムが友人と呼ぶのなら、当然貴族であると思っていた。

しかしそれが平民だと聞かされ、アニエスは驚く。

アニエスの反応もよく理解できる、そう言うようにキースは頷く。

「ああ、驚くだろ？まあ、お前も内の旦那様の御気性は知ってるだろ。昔に兵士やってた頃の戦友、だそうだけ」

「戦友……………」

ウエンブラムはジエデラード伯とも縁があり、リユーベンの魔法の師を任されるほどに信頼関係があった。だが、本来の彼の身分は決して高いものではなく、帝国軍人としての立ち位置は少し優秀な下士官に過ぎなかった。

そのため平民兵達の直接の上司に当たり、平民との距離感は近い物だった。

戦場で培われる絆という物は、時に身分を超越する。だからこそウエンブラムはアニエスにも目をかけてくれるし、平民を友人と呼べるのだらう。

「キースさんはその方をご存知なんですか？」

「うん。何回かこうして遣いに遣られてるからな。向こうも覚えてらっしゃるんじゃないか？……………多分」

「多分て……………あれ？こつちでいいんですか？」

キースの不確かな物言いが気になるも、アニエスは辺りを見て気づいた。

歩いている内にどうやら村の端の方まで来てしまったらしく、中央付近に集まった家屋の建ち並びから外れてきていた。

数分歩いただけで両端を行き来してしまうとは、どうやらこの村は想像したよりも小規模らしい。

このまま進んで行ってしまえば村から外れ、眼前にある山へと突き進むことになるだらう。

そう疑問を呈したアニエスに、キースは言った。

「言つたる？ 変わり者なんだよ、あの人は」

ニヤリと笑えば、キースは山へと続く細道をずんずんと歩き出していった。

「ノックしてもおしもくし？ ランドルフさんいらっしやいまあゝすかあゝ？」

「……何してるんですか？」

「見て解らないか？ ふざけてるんだよ」

いきなり弛みに弛んだ声を発し出す年長者に向けられたアニエスの白けた視線にも臆することなく、キースは古ぼけた扉をコツコツと叩く。

山道に入って数分ばかり歩けば、荒ら屋と言ってもおかしくないよな出で立ちの建物があった。

人が住んでいるのかと疑いそうになるが、ここがその友人とやらの住まいなのだろう。

家屋の周りには割られた薪や農器具が見受けられ、確かに人の気配が感じ取れた。

「あつれ？ 留守かな？」

「キースさんがいらぬことするから出て来ないじゃないですか」

「いやいや、毎回こんな感じだぜ？」

「真面目にやりましょうよ……………」

そんな会話をしつつ三分待ったが、人が出てくる気配は全くない。反応のない様子に二人してどうしたものかと考えるが、ただ留守だと考えるキースと、それを諫めるアニエス。

しかしそう言うアニエスではあったが、留守ならばどうしようもない。

「村の方に行かれてるんじゃないですか？」

「いやあ、さつき見た限りでは村にや居なかったな……………狩りにでも出てんのかねえ？」

うーむ、と悩むポーズを取るキースを横目に、アニエスは一旦村に戻ったらどうかと提案した。

「うん、そうするかね」

さて踵を返そうか、としたとき

「誰でえ？」

二人が背を向けた扉の向こうから、低く、しわがれた声が聞こえた。

「……………」

「おつ、居たのか！ランドルフさん、俺だ、キースだ。旦那様の遣いで来たんだ」

「ああ、オメエか。あんなフザケたことしやがるのは、オメエぐれえなもんだ」

声の主に対しキースがそう答えれば、その言葉が返り、扉が開いた。

中から出てきたのは老人だった。

剣呑な視線を二人に投げかける、禿げ上がった頭の男。

老人と、そう呼べる年齢にも関わらず、180セントを越えるだるう体格と巖のような容貌によって、彼から老体という気風は感じられなかった。

アニエスは老人の纏う雰囲気は一瞬息を呑むも、あまりまじまじと見ては失礼だと考え、隣のキースへと視線を移した。

当のキースは老人と手慣れたようなやりとりを繰り広げている。

「ランドルフさん、居たんなら開けてくださいよね。三分も待ちましたよ」

「アア？俺に文句垂れるたあ偉くなったもんだなこの漬垂れ（はなたれ）が」

「タハハ、酷いですね。同年代じゃ俺は真面目な方ですよ」

「オメエでまともなら、俺あ最近の若いモンにやあ絶望しか覚えねえな」

「ハハハ……まあ、それは置いて。これをどうぞ」

「そついやあ旦那からの手紙だったか？どれ……」

キースは懐に手を入れ、したためられた手紙を取り出した。

老人　ランドルフは差し出されたそれを受け取ると、封を解き中を改めた。

ハルケギニアでは平民の識字率は決して高いとはいえないが、曲がりなりに若い頃に国軍の兵として働いていた彼は、文字が読めるようだ。

「ふん……」

ランドルフは読み進めていく内に一つ頷き、ちらりとアニエスに視線をやった。それに含まれているのは誰何するような、見定めているようなもので、小さなむずがゆさを感じ、アニエスは身をたじろがせた。

キースもその視線に気づいたのか、笑いながらアニエスを紹介する。

「ああ、この子な、二年ぐらい前に入った新入りの下働きの子なんだ。中々かわいいだろ？」

「ア、アニエスと申します！」

仮にも主人の友人に引き合わされるのに、こんなフランクなことでもいいのかと思いはしたが、どうやら毎度この態度らしいので、アニエスはもう気にしないことにした。

「成る程……このガキをねえ……」

(……?)

ふむふむ、と合点の行ったような老人の呟きにアニエスは疑問を感じた。

「さて、実は用はこれだけなんだよ。早々と申し訳ないが、俺たちは帰りますわ」

主からの預かり物が手を離れたためか、肩の荷が下りたような顔でキースは言う。

三日かけてきた割には、手紙一枚渡して終わり。

随分とあっけなかったが、まあお遣いなのだしこんな物だろう、と、アニエスはキースの言葉に従い帰り支度を始める。

といっても、降ろしていた荷物を背負うだけなのだが。

「ああ、帰るんならそいつあ置いてけや」

ふと投げかけられた言葉に、二人は老人の方へ視線を移す。

「え？そいつって……」

ランドルフの目はキース自身を指してはいない。

つまり、消去法からすると、そいつというのが誰かは一目瞭然だった。

「私、ですか……？」

「ランドルフさん、いくら老いてなおお盛んだからって、こんな子供はダメだって……」

「バアカヤロイ、なに寝言抜かしてやがる。ウェンブラムの旦那の指示だ」

「旦那様の？」

読んでみな、とばかりに手紙を差し出され、キースは少し躊躇した。あくまで使い走りである彼は、主人の手紙など見ない方が為になると知っていたからだ。

しかし、当のランドルフは苛立ち紛れに手紙を押しつけたため、キースは仕方なくその文へと目を通した。

「なにになにい………？」

『親愛なる我が古き戦友、ランドルフへ』

そんな書き出しから始まった内容を、キースは読むにつれ頬がひきつるのが分かった。

「………こりゃあ、ちよいと酷だろ」

「ちよいとで済ましてやる義理はねえがな」

顔を青ざめさせて呟くキースは、ランドルフの返事に更に顔を青ざ

めさせ、事態の推移を眺めるばかりだったアニエスに哀れみに満ちた視線を送る。

「 ?なん、ですか? 」

「 ……いや、悪い、アニエス。確かに、旦那様からの命令だからさ。俺にはどうにもできねーや 強く、生きるよ!!じゃあな! 」

「 は? 」

まさに死に別れる直前のような不吉な言葉だけを残し、キースは走って村の方へと去っていった。

「 ちよつ、キースさん! 」

「 おっと、待ちねえ、ガキ 」

「 なつ!? 」

キースの後を追おうと扉に手をかければ、首根っこをランドルフに掴まれ、捕獲された。

何をするのかとキツと睨めば、老人は楽しげににやにや嗤いながら、アニエスへ先ほどの手紙を差し出した。

しぶしぶながら、読む意外の選択肢は、アニエスには無かった。

小さな手で手紙を受け取ると、そこに羅列された文章に目を通し次第に驚愕に目を見開いた。

手紙の内容は、こういうものだった。

「前略／さて、本題となるのだが、率直に言いたい。そちらに送った娘を鍛えてやってほしい。名はアニエスという。本人の意思は問わず、文句は聞かんと行ってやってくれ。ただ、主家筋からの預かり子でな、死なない程度に殺してやってくれ。期限は来年の春まで、一年以内。それ以内なら、どれだけ長くなってもかまわん、存分に技を、対メイジの技術を教えてやってはもらえないか？」

ここまでで、アニエスには衝撃だった。

つまりは、お遣いは一転して、アニエスの為に用意された武者修行の口実だったのか。

それはキースもあんな顔になるだろう、そう、アニエスは思った。

手紙を読み終えたと判断したらしきランドルフは、アニエスからそれを取り上げると、皺の刻まれた顔に更に深く笑みを刻んだ。

「つつうわけだ。解ったか？ テメエの命は俺が預かるってわけだ。生憎、ガキは好きじゃねえんだが、旦那には借りもある。みっちり鍛えてやるから、感謝しろよお……………」

「は、はひ……………」

余りに凶悪な、悪人面から繰り出された悪人ゼリフに、アニエスは竦み上がった。

いくら憎悪で刃を研ぐ復讐の剣を指しているように、今の彼女は9歳の女の子だ。無理もなかった。

「まあ、近頃暇だったからなあ。これも一興だな。一年、一年だ。一年丸々つかって、テメエに技を叩き込む。メイジを殺したいとは

大層吹きやがるな？まあ、テメエが耐えられる限りは技を徹底的に鍛えてやる。女で貧弱でチビでガキなのは仕方ねえ。後々テメエで何とかしろ」

嬉々として育成方針を語り出すランドルフは、第三者が見れば、完全なスパルタ教官の顔をしていた。

その日

元ゲルマニア軍第七陸戦大隊突撃歩兵長、

『魔法殺しのランドルフ』と、そう呼ばれた老兵に

アニエスは、出会った。

時はアニエスの主、リューベン・カイス・フォン・ジエデラードが軍学校三年。特別演習に参加していた時期だった。

ここから一年間。

アニエスが十歳になり、リューベンが卒業するその日まで、彼女は首都ヴィンドボナの地を踏むことはなかった。

歴戦の老兵により、彼女は無手での戦いを、その概念を、その戦術を、その身に叩き込まれることになる。

伝説の忠犬誕生まで、残り十数年

続
く

外伝ノ一 「少女とお遣い」 (後書き)

続くのか？

第十六話 人狼斯語にて

長い、長い夜が明けた。

夜の森を動くのは危険だと、川の畔で一夜をあかしたジエデラード小隊の面々。洞窟の底に消えた黒狼意外にも、原野の森は危険に満ち満ちているのだから。その甲斐あつてか、幸いにして、あれほどの脅威に遭遇することはなかった。

交代で火の番をして無事に朝を迎えた彼らは、しかし重苦しい雰囲気に包まれていた。

「これから、どうするんだ・・・？」

怪我をしていた隊員、サーリエが不安そうに誰にともなく尋ねる。

皆の視線はそれに答えられる者を探し、自然と、ブライアンに集まった。

ブライアンはただひたすらに薄暗い洞窟を睨みつけ、微動だにしない。

「・・・なあ、ブライアン。どうすんだ？」

焦れたエンニツヒが改めて問えば、ブライアンはくるりと洞窟に背を向け皆に向き直った。

その瞳には、何かをやり遂げるといふ決意が籠もっていた。

「 即時帝都へ帰還。ワーウルフ出現に際して応援を要請しに行く」

「 っな！？ジェテラードはどうするんだ！！」

ブライアンの非情とも言える案に対し、エンニツヒは非難の声を上げる。

ブライアンはそれを目で制し、話を続ける。

「リューベンを助けるにしても、ワーウルフが生きていた場合の対処にしても、僕ら学生だけでは手に余る。ここは教官方に報告してすぐさま騎士隊から手練れを派遣してもらおうのが最善策だ」

正論であり、エンニツヒや他の隊員達にも否定はできない。

昨晩は吠えていたグルフUNKも、反論はないのかしかめっ面のままに話を聞いていた。

「 が、僕は、リューベンを助けに行きたい」

続くブライアンの言葉に、皆息を呑んだ。

「 良いのかな？軍人としてそれは愚手なのだろう？」

グルフUNKがそう問えば、ブライアンは彼本来の快活な笑みを持つて、口をゆがませる。

「 生憎、僕はこの隊の『副官』でもなんでもない。隊長がいなくて

の隊では、ただの一兵士だ。だから僕は一兵士の暴走で、隊長を救出に向かう」

ブライアンとて親友を助けたくて仕方がなかった。

昨晩はああした決断を下したが、本来ならばすぐにでも洞窟に飛び込みたかった。

だが洞窟は真つ暗闇で、精神力も減り疲労もたまっていた昨晩の状態では手の打ちようがなかったのだ。

だが、今ならいける。

一晩の休息で、万全ではないが体力精神力ともに回復した。

親友を助けたい気持ちにも陰りはない。

だからこそ、ブライアンは皆に告げる。

「君達は、今すぐ、全速力で首都に向かって応援を呼んできてほしい。途中で野営地に戻って馬を確保。それを使って休みなく走り詰めれば、二日とかからずに着くはずだ。ここからは僕の暴走だからね、隊のことはみんなに任せていいかな？」

ニツと歯を見せて笑うブライアンに、隊員達は狼狽しながらもそうするべきかと思ってしまった。

ブライアンはこの中でも指折りの実力者であり、彼ならば単独の行動もこなせるのではないか？

そんな風に思い始める。

「ふざけるなよ」

だが、それに異を唱える男が一人。

「グルフユンク・・・」

「ふざけるなよブルックリン！君だけの暴走だと！？昨晚とは手の平を返した物言いだな！軍人としてと一席打ったアレはなんだったんだ！！ふざけるな！」

憤慨露わに哮るグルフユンクに、ブライアンはしかし静かな声音で答えを返す。ブライアンの鳶色の瞳が、グルフユンクの青い眼としっかりとぶつかり合う。

「確かに僕は軍人として失格だと言われるね。こんな行動、ふざけているかもしれない。だが僕は、『仕方がない』で親友を見捨てられるほど、まだ人間出来てはいないんだ。だから僕はリユーベンを助けに行く」

そう、言い切った。

睨み合う二人に、見守っていたエンニツヒ達は両者の顔をおろおろと交互に見返し、唯一ブリューゲルだけが静かに、不動のままに佇んでいた。

「解った、そこまで言うなら僕も行ってやる！」

「え？」

「はっ？オイ、ちょっとビザール」

「な、何を」

グルフUNKはビシリと杖を抜き取り、ブライアンに向けて構える。すわ決闘の始まりか。

一見喧嘩を売っているようにしか見えないが、彼の顔は至って真面目だった。

「僕もジエデラードの捜索に加わってやろうと言っただ！感謝したまえ！気流乱れる洞窟内ならば風のトライアングルたる僕の力は素晴らしい本領を発揮する！！」

「いや、そうだけど・・・君、リューベンのこと嫌いなんじゃないか？
つたのかい？」

雄々しく叫ぶグルフUNKに、ブライアンは不思議そうに尋ねる。

確かに、仇敵とばかりに嫌う相手のために、誇りを大切にするグルフUNKが軍人失格の汚名を着てまで助けに向かうだろうか？

普通ならば、あり得ないと考えるだろう。

ブライアンもそう思ってたが、グルフUNKはこともなげに答える。

「うるさい！僕は奴を助けに行くんじゃない！！無様に野垂れ死んだ奴を一番に見つけてあざ笑いに行くんだ！！だから探しに行くだけだ！決して奴の心配などしてないあいつ！！」

もしもここにリューベンが居たならば、彼は内心でこう叫んだらう。

『ツンデレ乙』、そして

『男のツンデレはキモいだけだZEE!!』と・・・

「ハ、ハハハ」

あまりの物言いに、ブライアンも乾いた笑いが抑えられなかった。

「兎に角！僕も行く！！一兵士のブルックリンに止められる謂われはない！！」

言質を取られた形になり、参ったなと頭をかくブライアン。

彼としては、“一応”トライアングルの実力者であるグルフユンクは、皆とともに行って欲しかった。

まさか無いとは思うが、帰路道中に危険が無いとも限らない。それに結局はブライアンのワガママなのだから、付き合わせるのは悪いと思ったのだ。

だからこそ、グルフユンクに考え直して欲しかったのだが・・・

視界の真ん中で、「やめとけビザール！」「うるさいフランク！」
と言い合う件の人物を見て、思う。

(やっぱり無理、かな？頑固そうだしなあグルフユンク・・・)

不意に、ブライアンの肩にポフンと手が置かれた。

その手の主が誰かとそちらを見れば、『諦める』と目で語るブリュールゲルがそこにいた。

「ハハ、やっぱり、無理だと思ukai?」

苦笑してみれば、当然だろうと返すうなずきが一つ。

ブライアンはハアと息をつき、気を取り直してグルフュンクに向き直った。

「よし、じゃあ行こうかグルフュンク!!!リユーベンを助けに!」

「僕に指図するんじゃないー兵士が!!!それと僕は助けに行くわけじゃあないからなあー!!!」

ブライアンの言葉に反応すると、グルフュンクはズンズンと歩を進め洞窟内へと向かってゆく。

「あー、もー、勝手にしろい」

幼なじみのあまりの言動に、説得に失敗したエンニツヒは軽く頭痛を覚えたようで、投げ遣りに、肩を竦めた。

「じゃあみんな、後は、よろしく頼んだよ?」

ブライアンが隊員達に声を掛け、踵を返すようにグルフュンクの後を追う。

雰囲気は、すっかりと普段のそれに戻っていた。しかし、その裏で、一つ思うことがあった。

(もしも、もし“そう”なっていたとしたら・・・)

友の亡骸を、かの冷たい地の底に捨て置くことはできない。

あくまでも親友として、ブライアンはリューベンを迎えに行く決意していた。

たとえ愚行と謗られようが、ここを曲げてはならなかった。それは、どうしようもない意地だった。

ふと、最後に、唯一残った実力者・ブリューゲルへと言葉を掛ける。

「じゃあね、

みんなを頼んだ、ブリューゲル」

「ああ、任せろ」

返された返事にニコリと笑みを返すと、今度こそブライアンは迷うことなく洞窟へと入っていった。

その場に残されたのは六人の青年達。

一人を除いた彼らの心情は、皆、同じことを頭の中に思い描いていた。

(((((ブ、ブリューゲルが、喋った・・・!)))

第十六話 人狼斯語にて

「スー、スウ・・・んア？」

リユーベンがパチリと目を開けば、視界の端々にもふもふとした黒い毛並みが写る。

意識をそちらにやれば、生物的な暖かさと、確かな命の鼓動。

覚醒したばかりの頭はひどく気怠く、まだまだ痛む体を起こすのは億劫だとばかりに緩やかな暖かさを甘受していた。

（ああ、なんだコレ。あつたけえなあ・・・）

そのまましばらくぼうつとしていたリユーベンだったが、その温もりがなんなのか、徐々に気がついてきた。

だが、彼は焦ることはなかった。

（これワーウルフだよなあ・・・これはアレかな？ずっと前にN Kのドキュメンタリーでやってた『傷を負った野生動物達は、たとえ天敵であれ寄り添い傷が癒えるのを助け合うことがある』ってヤツだな）

そんなことを考えていた。

やがて身じろぎしだしたリューベンに気がついたのか、ワーウルフは頭をもたげリューベンへと視線を合わす。

そこには敵対者を見る怒りの色はなく、穏やかな光を湛えている。

よような気がする。

それに気づいた（そう思うことにする）リューベンも引かれるように首を上向け、ワーウルフへと視線を合わす。

「・・・」

「・・・」

さらさらと水音のみが響く地底の砂浜にて、一人と一匹は静かに見つめ合う。

（・・・そういやあ、昨日のコイツの『眼』。なんで寂しそうだったんだろう・・・？）

昨日の第一遭遇にて、リューベンが組伏されたときに覗いたワーウルフの眼は、今よりも苛烈な敵意に燃えていたが、確かにそこには寂しさを感じさせる色があった。

普通ならば勘違いと断ずるが、リューベンは不思議とそれが当たっている気がしてならなかった。

だからこそ、次のような行動に出た。

「暖めてくれたのか？有り難うよ」

「・・・！」

緩やかな口調で語りかけてやれば、ワーウルフが驚く気配が分かった。

それに、リューベンはある種の確信を得た。この獣は、人の言葉を理解しているのだと。

ならば、語り続けることは間違いではないはずだ

一方で、ワーウルフは自身に戦いを挑む人間達は見てきたが、こうして穏やかに話しかけてくる人間は知らなかった。

獣からすれば、この人間に寄り添ったのはよくわからない気まぐれのようなものであり、起き抜けに敵意を向けるようなら殺してしまえばいいとも思っていたのだ。

新鮮な朝飯の確保だと思えば、苦にもならない。

だからこそ、まさか礼を言われるとは思っていなかった。

そんな獣に構うことなく、リューベンは話しかけ続ける。

「昨日は、悪かった。お前の縄張りを荒らしてしまった・・・そうだ、私達が気をつけるべきだったな。武器を向けて、済まなかった」

この謝罪に、更にワーウルフは驚く。

礼を言われ、あまつさえ謝罪までする人間など、ワーウルフからすれば未知の存在だった。

暖かさをくれるこの獣から『寂しさ』という生きている感情を読み

取ったりリューベンは、なおも言葉を続ける。
彼とて、何か考えているわけではない。
衝動のままに口を動かしているだけだ。

ただ、この黒い狼になんともなく話しかけたかっただけだった。

「その上こんな所にまで落ちる原因も、元はといえば私達・・・思えば、お前は私の命の恩人・・・恩狼？・・・何にしろ、まあいいか」

フツと笑うリューベンだが、彼としては供に寝ているペットに話しかけているの飼い主のような心境だ。
だからこそ、一方的に口を開く。

いくら伝説の魔物と言っても、人語を理解していそうでも、さすがに狼の声帯では話せまい。
そう思って発した言葉だったが

『・・・オマエも、オレのケガ治したろ』

「ッ!？」

返るはずもない相手から返事があったことに、リューベンは目を見開く。

「お前・・・話せたのか・・・」

ワーウルフは、首をコクンと頷かせ、それに答える。

聞こえた声は黒く禍々しい見た目に似合わない、よく通る中性的な

響きだった。

(狼しゃべってるよ・・・ホロ、いや、モロか)

リユーベンはその事実には驚きながらも少し固まるだけで、すぐさまならばと話しかける。

「いやはや、何でもありか。さすがは伝説」

『・・・驚かないのか?』

「いや、驚いてはいる。しかし、それならそれで別に騒ぐほどのことじゃあないな」

喋る狼にこれほど対応が早いのは、リユーベンが『ハルケギニア(ここ)はそういう世界だ』と前世の記憶によりそう意識しているからだ。

(古い種族だもんな。竜だって喋るんだから、わんこも喋るさ)

と、納得していた。

(韻竜みたいな獣だから・・・韻獣か? いんじゅう、インジュー・・・なんか、卑猥っ!)

げに失礼な妄想すら高速展開していた。

だが人狼からしてみれば、この反応はやはり奇異なものと写る。

一つ嘆息すると(ため息を吐く大きな黒い狼という画は、なかなかシニールであるが)、ポツリと漏らす。

『……今までの奴らは、オレが喋ると武器を向けてきた。オレを見ただけでもだった。オマエみたいに言う奴は、初めてだ』

「そう、か……大変だったな。難儀なことだ。話せるならば『そういうもの』なんだから、仕方ないだろうに」

『……だが、喋る前から武器を向けられるのも当たり前だった。オマエらみたいに』

「うん……すまん」

ふわふわの毛皮に身を預けたまま、リューベンと同じ人間達の短慮さに、我が身を棚上げしてため息をつく。

生まれつき話せるならば仕方ないだろうに。

逆に言葉が通じるからこそ、友好関係も結べるのではないか？
そんな風にも思えたが。

（しかしまあ、こういう考えは異端だな。やっぱりそういうのが出来るのは英雄とか、リアル偉人じゃないと無理だろ）

しかし、襲われた身としては、そんな綺麗事も吐いていられなかった。

そう、命の危機に瀕すると、人はなりふり構っていられないのだ。

（めっちゃ怖かったし）

リューベンは、いくつかの修羅場を経験したつもりではあったが、人としての原初の恐怖を味わったのは、初めてだったかもしれない。

人を傷つける怖さとは、また種類の違う恐怖。

目の前に狼が現れた、それだけでパニックになりそうな頭、足はすくみ、体は強制的に硬直した。

こちらが群れていたからなんとか持ち直したが、あの状況下で単独遭遇などすれば、まず漏らすだろう。上やら、下やら。

恐怖はあらゆる感情を塗り潰す。こればかりは体験しないとリューベンにも分からなかった。

『・・・なんで』

「んん？」

思考の迷子になり掛けたリューベンに、ワーウルフはポツリと問いかける。

『なんで、オレを治した？オマエもケガしてる』

「それは、お前の方が傷が大きかったからな・・・恩狼を見捨てては寝覚めも悪い・・・後は、何故だろうな。私にも理由は解らん。ただ、そうしたかったただだよ」

『・・・やっぱりオマエはヘンな人間だ』

「・・・非常に遺憾ながら、よく言われるよ」

親友達の変人発言を思い出したのか、リユーベンは苦虫を噛み潰したような顔を見せる。

そう言えば、先に撤退した皆は無事だろうか？
あまりの押し寄せる事態にすっかりと忘れていた。

(いつまでも寝てらんない、な)

リユーベンは体を起こそうと力を入れる。

しかし、肩を中心に左半身をズキリと鈍い痛みが襲った。

「ッ……！どうやら、左側を下に落ちたらしいな……」

ただでさえケガしていた左側に追い打ちを掛けたと考えるべきか、右腕にも余計な負傷がなく助かったと考えるべきか。

判断に迷うところではあるが、リユーベンは気を取り直し、多少の痛みは無視して上半身を起こした。
それでも骨が軋んだ。

『……もういいのか』

「ああ、大丈夫だ。さて、何とかここから出る方法を考えねばな……」

リユーベンは先の見えない高い天井を見上げれば、寝そべっていたワーウルフもむくりと体を起こす。

「ん？お前の方こそ体は大丈夫……な、ようだな」

『オレ達は頑丈だ。人間と一緒にするな』

昨晚までのひどいケガがほとんど治っていることに、リューベンは気が付いた。野生動物のずば抜けた回復力には驚嘆させられるばかりだ。

（これなら秘薬自分に使やあよかったかもしらん）

実際は、リューベンが使った秘薬と治癒魔法の支援があったからこそその回復力なのだが、リューベンは自分の行為の効力を過小評価していた。

ともかく、リューベンは体をチェックする。

両足は幸いにも何ともないため、歩くことは出来る。痛みを発する肩の裂傷は、傷は塞がっているものの中はボロボロで、左腕は完全に折れている。

肋の鈍い痛みは、おそらく罫が入ったのだろうが気力で何とかなるレベルだ。

全体的に重傷ではあるが痛みがそれほど強くないことに一つ安心する。

昨晚の応急治癒魔法は効いたのだろう。

（これで秘薬がもつとありゃ、傷も治ったんだが・・・まあ、後の祭りか）

チラとワールフに目をやるが、向こうは向こうで体に付いた血の後を嘗めとっていた。

毛が血濡れて、ゴワゴワと固まっているのがお気に召さないらしい。この空間から出るには、この狼の力を借りる方が賢明だろう。もとより、彼はこの洞窟の住人である。無作為に歩き回るよりは、よっぽど頼りになる。

一晩ともに過ごし、対話した仲であるため、もうワーウルフを敵と見ることはなくなっていた。

後は、ワーウルフの方がそれを承諾してくれるかどうかだが・・・
「こんな事頼めた義理ではないと思うが、恥を承知で頼みたい。外に出たいんだ。力を貸してくれないか？」

『わかった』

「・・・あ？いいのか？」

やけにあっさりとはと答えるものだから、リューベンは拍子抜けしていた。

『別に、かまわない。オマエはヘンな人間だからな。それに、ケガも治してもらった。恩は返す』

「や、まあ、それはだな・・・いや、有り難いな」

元はといえばリューベン達が悪いのだが、折角そう言ってくれているのだ。

断り続けるのは、無粋でしかない。リューベンは空気の読める水メイズを自認している。

なのでリューベンは、正直にお言葉に甘えることにした。

『うん。外に行きたいのか？道はわかる。付いてこい』

「ああ、よろしく頼む」

『ん』

こうして、リューベンとワーウルフの奇妙な二人組（？）による洞窟探索が始まった。

「なあワーウルフよ。『アラーフ』という名前に聞き覚えはあるか？」

凸凹した道のりをザクザクと歩いてゆくこと数時間。

時にはワーウルフの跳躍に追いつくためにフライで必死に追いかけたり、冷たい水脈を踏み分けて進んだり、リューベンは歩き続けていた。

足元を照らすために、じりじりと精神力を削られながらも杖先に『灯り』を灯し続けている。

そこで、ふと話しかけたのだった。

別段沈黙が苦になるわけでもなく、ただ、少し気になったのだ。

現在は二足歩行ではなく、安定性のある四足歩行状態のワーウルフは、耳をぴくりと動かしてその問いに答える。

『ひいひいじいちゃんの名前だ』

「そ、そうなのか・・・」

(実在したのかよ!?!しかもコイツの先祖かよ!?)

伝説が案外身近に存在したことに、リユーベンは言葉に詰まる。さらりと言われた内容だが、歴史家に聞かせればゲルマニア史に残る大発見ではないだろうか?

リユーベンは冷や汗をかきながらも、更に質問してみた。

「その、曾々祖父殿は、やはり既に亡くなっているのだろうか?」

『ううん。今は集落の長老をしてる。オレ達の集落では一番強い。オーガとか、爪の一振りです三十は殺してた』

「そ、うか・・・」

(六千年生きてるってなんだその怪物!?!こえー・・・超こえー・・・)

伝説級のとんでもない規格外っぷりを聞いてしまい、ゲルマニアはそんな相手にかつて喧嘩を売ったのかと思ってしまう。

(コイツの集落には行きたくないな・・・いや、行かないけど)

リユーベンはワーウルフとはその見た目通り一匹狼な生き物だと思っていた。

だが、話してみれば知性も高く、自分達のコミュニティを形成し

ているというではないか。

喋る生き物の例に挙げた韻童に、益々似ている気がしてならなかった。

『……オマエらは、何しに来たんだ？』

「……ん？ああ、聞いてばかりでは悪いな。こちらも答えるとして。実は大したことではなかったんだが、私たちは学生でな

」

この後も、難雑な道に多少時間をとられながらも、リューベンはワールフと会話をしていた。

こうして、本来交わらないはずの野生と人間は、交流を暖めてゆく

一方その頃、洞窟内に突入した二人は。

「うぬひよえあふえあ！！？」

「珍奇な声を上げないでくれよグルフユンク。ビックリしたなもう」

「なんか踏んだ！？ぐにゆるってした！！」

「……ああ、水場にすむワームの一種だね。こんなところにも住んでいるなんて、知らなかったなあ」

「クソツ！クソツ！！虫風情がこの僕をこけにするとは！！大体だなブルックリン！君が選んだこの道は本当に正しいのか！？」

「いや、下へ下へ向かっているだけなんだけど・・・二手に分かれて探すかい？」

「ななな何を言っている！！もし僕がワーウルフになんか出会ったらどうするんだ！！？ししし死んだらどうする！！君は実にバカだな！？」

「えー・・・」

そこそこ深い場所で、わいわいとやっていた。

彼らとリユーベンの距離、あと数リーグ・・・

場面は戻りリユーベン達へ。

一人と一匹は歩き詰め、半日ほどでワーウルフ曰く行程の半分ほどまで進んだ。

さすがは住み慣れた獣であり、ジェテラード小隊の面々であるいたよりも、洞窟内はスイスイと進むことができた。

「フウ・・・」

ただ、それは怪我人には辛いことには変わりなく、慢性的な痛みと疲労により、リユーベンは軽くふらついてしまった。

ポフリ、と。

「ぬ？・・・すまない、な」

その体をワーウルフは支えてやった。

礼を言いよろりと体勢を立て直すリユーベンだったが、いきなり、襟首をぐいと引かれる感覚におそわれた。

「うお・・・!？」

『・・・乗れよ』

「・・・ああ、いや、悪いだろう?？」

『いいさ、別に』

2メートル強の黒狼の背に揺られる形となったリユーベンだったが、素直に好意に甘えることにした。

狼はリユーベンを乗せ、のっしのっしと静かに歩く。

それに揺られながら、リユーベンは黒い毛に覆われた背中をさらりと一撫でした。

半日連れ立って気づいたことだったが、この狼、どうにも言葉尻が拙いというか、どこか幼い少年のような印象を抱かせた。見た目よりも高めの声質もそれを助長しているのだろう。

それでも、伝説の一族であるわけだから、リューベンなどよりも幾年月を生きてきたのだろうが、やはり感じるのは『若い』という感覚だった。

(ブライアンも、妙に勘が冴えてたもんだ)

前日に別れた親友の寸評は、実能的を射ていたわけだ。さすがは野生派メイジ。経験と直感はもはや動物級か。

「しかし、かなりの距離を落ちたとはいえ、半日歩けど出口も見えんのか」

『そりゃあそうだ。あの場所はここいらで一番低い。オレだって滅多なことじゃ行きやしない』

「……出口まで、あと如何程かかる？」

『この速さなら、あと半日』

狼は事も無げにいったが、都合丸一日かかるといっわけである。

それだけの長さを持つ鍾乳洞など、下手な迷宮とは比べ物にならない複雑さを誇るだろう。

昨日まで居たのは崩落したすぐしたの層、つまりは最上層に近かったのだろう。

だからこそ、風の流を読んで出口まで漕ぎ着けたといっわけだ。

リューベンは、それに気づいてぞっとした。

この道案内がいなければ、今ごろはこの迷宮を一人ふらふらとさ迷っていたに違いない。

まさしく、不幸中の幸いというやつだった。

（下手に独り歩きしないで正解だったわー。いやー、あぶないあぶない）

素人の洞窟探検は自殺行為だ。ダメ、ゼツタイ。

いやはや、まったく。

心に刻んだところで、リューベンは視界がふわふわとしていることに気づいた。

これは、覚えがある。

訓練で疲れ果てたときや、三日徹夜した次の朝によくこうなる、そんな気分であった。

つまりは、眠い。

自覚すると、睡魔というものは最高戦速で襲いかかってくるものなのだ。

（いかん、いかんよ。流石に運んでもらうっという寝るってのは……人としての……意地的なものが……）

無理もない。

昨日は神経を磨り減らす撤退戦を敢行し、緩む間もなく負傷して血を流し、しばし冷えた地下水に浸っていたのだ。

疲労も、失血からくる気だるさも、一晩眠った程度では取れるはずもなかった。

その上で適温に保たれたもふもふシートに揺られたならば

「おい、おい？人間？・・・何だ、寝たのか」

そして、素人の二人はといえば・・・

「・・・うーむ」

「ぜひー、ぜひー・・・す、少し休まないかねブルツクリン。いや、あれだ、別に僕は疲れてなんかいない。ぜひー、ぜひー。ただ、ほら、あれだ。貴族たる余裕的なもので溢れている僕だからして、げっふお、ゲホツ・・・せかせか歩くのは優雅じゃないというか・・・」

「・・・うーむ」

「・・・おい、ぜひー、聞いているのかね？というか、ぜひー、なにを唸ってるんだ、君は」

「ん？ええと、さて、どう説明したものか」

「いいから、ぜえ、止まりたまえ。歩くの速いから」

息絶え絶えのグルフンクによる懇願に、ブライアンはようやくと足を止めた。

数時間前までの喧しさは、すでにグルフンクには無かった。体力お化けのブライアンに追い縋っているのだから当然だ。

立ち止まるや否やどすんとへたり込んだグルフユンクは、むしろよくやった方であった。

「で、何だったっけ？」

「はあ、はあ……一つ聞きたいんだが。深く潜っていると言っていたが、げぼつ、今は、どこら辺だね？」

グルフユンクは、最早風の通り道など読んでいなかった。

前を歩くブライアンを追うのに必死で、余力は微塵もなかった。

現に、今も周囲を照らすのはブライアンの杖にともる光だけである。

投げられた問いに、しかしブライアンは答え難そうに、乾いた笑いをこぼした。

ひゅるるり。

洞窟の中だというのに、冷たい風が吹いたように、グルフユンクは思った。

口の端が、ひくりと引き吊る。

「おいまさか」

「うーん、迷ったみたいだね」

「こつ、こつ、このテクノボウめ！？ズカズカ先を行ってこの様か
！！」

「いやー、参った参った。予想以上に広いなあ、ここは。もう上だ

か下だかよくわかんなくなってきたね、ハハハ」

「笑つとる場合かー！ーっ！ー！おまつ、このっ、こらー！ーっ！ー？
お前こらー！ーっ！ー？」

もの見事な遭難劇であった。

つづく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6495j/>

貴族生活、ゲルマニアにて

2011年11月2日02時09分発行